

---

# とある水使いの物語

人力車

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

とある水使いの物語

### 【Nコード】

N9045K

### 【作者名】

人力車

### 【あらすじ】

医者を目指す少年がいた。ある日、少年の常識を崩壊させる出来事がおき、物語へ参加するのだった。医師を目指す少年、魔導の力を持つ少女達。彼らはこの物語にどのような結末を生み出すのか・・。  
とある水使いの物語　　始まるよ。

## プロローグ（前書き）

初めまして、人力車といます。この度はこのページを見て頂いてありがとうございます。最初にいくつか注意事項があります。まず、この小説は作者が書く初めての作品であり、自己満足で書いている部分があります。また、原作キャラの性格崩壊や設定崩壊が嫌な方は今すぐブラウザを閉じていただいてかまいません。それでも大丈夫！という方は引き続き作品をお楽しみください。では、本編プロローグスタート！！

## プロローグ

人生ってのは『何』が起こるかわからない。

まして、たかだか10年ちょっとしか生きてない俺にはわからないことだらけ。

だから人生は面白い。

そんなことを俺こと海波<sup>うみなみ</sup>ハガルは考えていた。

考えていた、けどさ……

だけどさあー!!なんで俺は今赤いゴスロリ少女に追われなきゃならんのよ!!

「待ちやがれえええ!!とつとつとてめえのリンカーコアをよこせー  
——!!」

しかも意味わからんこと言ってるし!!

俺が何したってんだよ!?

そう・・・これは俺の人生を大きく変えたある事件の序章でしかなかった・・・

## プロローグ（後書き）

作者「以上がプロローグです。」

ハガル「いや、短いから！」

作者「プロローグということでもいいじゃない？」

ハガル「なんで疑問系！！」

作者「とりあえず、次回の本編一話でいきなり死に掛けるよ、君。」

ハガル「へ？」

作者「そんじゃ今回はここまで。」

ハガル「ちょ！まってy・・・」

<暗転>

第1話『始まりは突然。だからって急すぎるだろ!!』(前書き)

作者「では、本編一話だな。」

ハガル「原作のA・S一話よりも前の話なんだよな。」

作者「そだね。まあいきなり原作本編から登場させるのもどうかと思っただのよ。」

ハガル「理由は？」

作者「なんとなく(キツパリ)」

ハガル「おい!!」

作者「それでは、とある水使いの物語」一話始まるよ。」

第1話『始まりは突然。だからって急すぎるだろ!』

・・・この始まりは突然だった。

いつも通り図書館を出た後家までの道のりを歩いていた。

しばらく歩いていた時だった。

妙な空気を感じたと思ったたら周りに人がいない。まだ夜の7時だよ？

いくら11月も終わりで寒いからって普段人通りが多いこの通りでそんなことはまず無い。

ふと、空を見たらなんか見たことの無いような怪しい色をしていた。

「・・・明らかにおかしいよね・・・」

まあこんな状態になれば、独り言の1つや2つぐらいで済むよね？

とにかく俺は早く家に帰ろうと思って走ろうとした。

・・・したらいきなり目の前から鉄球が飛んでくるじゃーあーりませんか!?

ぬおっ!!か、鞆にかすった!!

そうしたら今度は後ろからハンマーが落ちてきた・・・いや、振り下ろされた。

それを前転で何とか回避。

「・・・・・・・・ちっ・・・・・・・・」

「ちっ、て何よ!!ちっ、て!!」

当たったら怪我どころじゃすまんでしょう!!」

「気にすんな。何もしなきゃちょっとした打撲程度で済むから。」

ど、どどどいうことだよ?明らかにちよっとしたく打撲くじゃすまな  
い気がするんですけど・・・

「あたしゃ、気にしねえよ。それよりもお前の魔力をよこしやがれ  
——!!」

なんか地の文に突っ込まれた!!つか、襲ってきた!?

しかも飛んでる!?!えっ?魔力つてのもなんだよ!?

ゲームのやり過ぎじゃねえの?

と、とにかく逃げろ——!!!!

……んで、そんなことがあったのが5分ほど前。

今はというと……

「いい加減にあたりやがれ！…ちょこまかつごくんじゃねえ！…」

「怪我したくないからいーやーだー！…だから逃げらるってのー！」

「待ちやがれえええ！…とつとつとてめえのリンカーコアをよこせー  
ー！！」

……と、こんな感じですよ。

体力には自信があるからここまで逃げれるけどさすがに限界はくる。

向うはまだまだ余裕っぽいなあ……

……なんとかしないとなあ……

「いったい何なんだよあいつは!!」

「でけえー魔力反応があるから来てみたらただのガキだし。」

魔法をつかわねえところを見ると、「魔法」の存在をしらないのか？

それなのにさっきからあたしの攻撃を回避して逃げ切ってる。

「本当になんなんだこいつは!!」

「手こずっているようだな、手を貸そうか？ヴィータ」

「ザフィーラか。あたし一人で十分だよ。てえ出すんじゃないぞ!!」

「先ほど主から連絡があったとシャマルがいつていたぞ。」

”んんん・・・わあ〜ったよ！挟み込むぞ！！”

早く帰ってはやてのギガうまい飯を食べたいのになんなんだこいつは！！

「それでも・・・」

ん？

「くらいやがね！！！！」

げっ！？ゴミ箱（空き缶）蹴りやがった！？

ゴッソ、カランカランカラン・・・

「……てんめえ、この野郎!!」

「き、効いてない?」

「あつたりめえだ!! てんめえ、アイゼンの錆にしてやる!!」

「うわっ!! だから、んなもん振り回すなよ!!」

はやてにデザインしてもらった、大切な騎士甲冑を……ゆるさ  
ねえ……

ほんとなんだよ!!

俺、何か怨み買うようなことしたか?

つつかさすがに疲れてきた……早く帰らないとお婆ちゃんに叱ら  
れる。

また訓練追加とかいよ

「はあああ!!」

「ぐほぎゃっ!!」

んな!?

「・・・とっさに防いだか・・・」

あのタイミングでよく防げたものだ。

・・・いてええ・・・吹っ飛んだ先が服屋でよかった。

服がクッション代わりになってくれたよ。



「しつこかったけどこれで終わりだな。早く帰ってギガうまいはやてのご飯食べなきゃ。」

近くにあったパイプを拾う。

・・・俺が・・・

「ヴィータ、まだ油断するな。」

立って上段に構える。

・・・何を・・・

「魔法も使えねえやつがおめえの蹴りをまともに受けてんだぜ?」

「やつはっ!」したっつうううんだああよおおお!!!!」「ヴィータ!!くっ!?!?」

一撃で決めるつもりでゴスロリに向けて打ち込んだ。

でも犬耳のついた大男が間に入って防がれた、つうか弾かれた!?

・・・ちっ・・・体格差がありすぎるよ。

でもやんなきゃやられる。

だったら・・・

「しっけえっ」やっぱ逃げるー!」「んだそりやー!」

逃げるが勝ちっていつじゃん?だから逃げる!

後ろでぎゃあぎゃあ聞こえるけど、無視!!

「鋼の軛!」

「ぬあああ!」

な、なんじゃこりゃ!?!? 咎っ? コンクリート?

「ヴェータよ、初めからこうすればよかったのではないか？」

「う、うっせー！あいつがあんまり動き回るもんだから忘れてたんだよ。」

「う、うっせー！あいつがあんまり動き回るもんだから忘れてたんだよ。」

確かにあの少年の動きは素人のそれではなかった。

魔法の存在を知らぬようだが………ん？

「出せ！んちくしゅー！」

この状況下においてもまだ逃げようとするか。

「うつせええな。なあザフィーラ。胸の辺りまで出すことってできるか？」

面倒くさそうにヴィータが訊ねてきたが。

「一度解除せねば無理だ。」

「ならこのまま殴って気絶さすか……」

ヴィータとグラフアイゼンなら輓の破壊は不可能ではない。

が、仲の少年が危険だと思っただが……そんなことを言っても聞くやつではないか。

ズン！！

ぬ！？この衝撃は・・・軛の内部からか。

まさか破壊しようとしてもいっつか？

苦い顔をしているとヴィータが心配してきた。

「大丈夫かよ？やっぱり殴って気絶させてからのほうが」

「くう、一度解除する！」

その瞬間。

「だありゃーーーー！！！」

鋼の軛は砕かれた。

ゴスロリの方からは相変わらず物騒なことしか聞こえねえし。

早くここから出たいんだけど、なんとか………なるか。

習ってるくあれくを使えば何とかなるかも。

でも痛いんだよなあ……まあお婆ちゃん曰く「この、未熟者が！  
！」らしいからかな。

……いつちよやりますか。

一発目が場所決めで、二発目で破壊だっけか？

んじゃ……！

「だありゃ………！」

よっしゃ割れた！！って！？

「ううおりゃあああ！！」

「しぎやばー！！」

な、何回バウンドしたよ。

10mは吹っ飛ばされてやっととまった。

は、ハンマーで……つう、あ、あごはいった。

た、たて……な……い……。

ゴスロリが近づいてきて。

「手間かけさせやがって。おめえに怨みはねえけど、今のうちに蒐集させてもらっぜ。」

どこからか分厚い洋書のような物を出してきた。

本が浮いてページが開いた瞬間だった。

「うわああああ！！」

突然痛みにも似たわけのわからん感覚が俺を襲った。

しばらくしたら本が閉じた。

どれくらいたったんだろうか？

5分？10分？

実際は10秒前後だろうけど、俺にはそう思えるくらい濃い感覚だった。

な、何とか逃げないと……ん？

「力が……はいら……な……い……？」

「20頁か、結構進んだな。」

「ヴェータ、先に戻っている。私はこの少年に話がある。」

なん・・・だよ？

「わあーっただよ。んじゃ先に戻ってるからな。」

そういつてゴスロリ・・・改めヴィータと呼ばれる少女が消えた。

「君には悪いことをした。だが我等には成さねばならぬことがある。」

大男が俺を見下ろしながら喋りかけてきた。

「命に変えてでも、な。」

それも恐ろしく真剣な、絶対譲れないという瞳で。

や、やばいかも・・・なんか眠たくなってきた・・・

「・・・だから・・・許せてのか？」

「そうではない。少年「ハガル、海波ハガル。俺の名前。」ではハガル。」

「これ以上我等に関わるな。」

「・・・な・・・て・・・が・・・」

ここで俺の意識は途切れた。

ーっっくー

第1話『始まりは突然。だからって急すぎるだろ!!』(後書き)

作者「以上、本編一話でした。」

ハガル「……………」

作者「どした？」

ハガル「いやなにこれ!? 10歳の子供がこんな目にあつたら死ぬでしょ!!」

「つてか俺よく生きてるな!!」

作者「そりゃ、お前だからw」

ハガル「w、じゃねー!! はあ、もういいよ。」

「んで今回のあとがきは何? 雑談だけじゃないんでしょ?」

作者「良くぞ聞いてくれた! 今からそれを言おうと思つてたのよん

」

作者は寝不足のためテンション壊れてます。

作者「我等が主人公、ハガル君の設定を少し公開しようと思つてね。

ちなみに25歳までの設定がすでにあるのよ。」

ハガル「…………原作Forceまでか。ちなみにそこまで書くの?」

作者「…………(目線をそらした)」

ハガル「そうか、いや、いや。とにかく俺の設定を見てみようか。」

名前：海波　ハガル（うみなみ　はがる）

性別：男

年齢：10歳

生年月日：11月6日

人種：地球人　日本人と北欧人のハーフ

身長：132cm

体重：身長に見合った程度

血液型：B

出身地：第97管理外世界（現地惑星名称「地球」）日本・鳴海

魔法術式：？

魔導師ランク：？

魔力光色：？

好き、得意なこと：物作り（ジャンルは問わない）

好きな物：干し肉

嫌い、苦手なこと：人の死

嫌い、苦手な物：ゴージャ

詳細：

「とある水使いの物語」の主人公。

地球育ちで黒髪碧眼の少年。

顔立ちは上の下ぐらいで微妙。

両利き。

髪型は「MH2G」の「レウスレイヤー」がデフォルト。

「なのは」達と同級生でお互いに顔を知っている程度の付き合い。

「アリサ」とは幼馴染。

人見知りをしない性格だが親しい人以外には自身の情報を不用意

に与えることは無い。

両親は事故で他界しており、祖母と二人暮らし。

両親の影響で医療系の道に進もうと考えている。

医療系の本を読んでいる小学生として図書館では少し有名である。運動神経はかなり良く、祖母から「清心流古武術」を叩き込まれている。

ハガル「やっぱりまだ？があるね。」

作者「そりゃ一話だからね。」

ハガル「ところで、【清心流古武術】ってなに？あと本編に出てきた【あれ】ってのも？」

作者「それはおいおい……。」

ハガル「んじゃ今回はこれで終わり？」

作者「そうだな。では俺はそろそろ寝るかな……。」

ハガル「さっさと寝やがれ！このダメ作者！」

< 暗転 >

第2話『うちのお婆ちゃんは「ワ」いのだ。最強で最恐なのだ。』（前書き）

作者「第2話だけこのタイトルにしたのには理由がある。」

ハガル「ガタガタガタガタガタ……」（震えています）

作者「あゝ……主人公がこんなだしさつさと本編逝ってみようか。」

ハガル「字違くない?」

作者「お、復活した。それでは、とある水使いの物語」 第2話  
逝ってみよう。」

ハガル「だから字!」

第2話』うちのお婆ちゃんは「ワジ」なのだ。最強で最恐なのだ。』

目が覚めた場所は公園のベンチだった。

・・・さ、寒い・・・

さっきのは夢・・・じゃないよな。

体中の痣や傷が物語ってる。

あいつらいつたいたんだっただんた？

あ！ー！じ、時間！ー！

公園の時計を見るとしっかりと短針はある数字を指していた。

.....「9」.....

O  
r  
N

さばいさばいさばいさばいさばいさばいさばいさばいさばいさばいさばいさばいさばいさばいさばい  
さばい

現在俺は全力疾走中。体中痛いけど。

理由は簡単。ぜってーお婆ちゃん怒ってるよー！

ただ訓練に遅れるだけならまだ訓練追加だけですむけど、連絡なしでこんな時間に……

ぜってー怒ってる！！

そう……我が家の大黒柱こと師範である海波うみなみ三月みつきは怖いのだ。

……いや、鬼なのだ。普段は優しいんだよ？

理由があつて遅くなるなら別にいいんだ。もちろん連絡ありならだ  
けぞ。

そうじゃなく連絡なしなら、しかも訓練時間完全にすっぱかしてる  
から余計にやばい。

お婆ちゃんと組み手………俺明日生きてるかな？

・・・ついた・・・鳴海市の端にある我が家（外観はまんまFateの衛宮家）。

「・・・た、ただいま・・・」

す、すげえ空気が重い気がする（汗）。

とりあえず居間についてお婆ちゃんに事情を説明しないと。

居た。また生け花の本でも読んでるのかな。

「お、お婆ちゃん。じ、じと「ハガル。今何時か言ってみなさい。」「・・・9時10分です。」

後を見ずにいうお婆ちゃん言葉にはすごい力がこもってた。

さすがだよなあ・・・60歳でこの迫力ある人ってそうそういないんじゃない？

「あ、あの～実はね・・・。」

「なんだい・・・!どうしたのハガル!？」

振り向いた瞬間すごい驚いてた。

あ、そりゃそうか。こんなボロボロになってりゃ誰だって驚くか。

信じるかどうかわかんないけど手当てされながら正直に話した。

「……………ってことがあったんだ。」

「……………」

チツチツチツチツチツ……

時計の音がよく聞こえるほどの静寂。

普通こんなこと信じてもらえないよな。

俺だって友達にこんなこと言われても信じれないよ。

そう思ってたらお婆ちゃんが口を開いた。

「ハガル。そいつらは妖怪か幽霊という可能性はないのかい？」

さすがお婆ちゃん。俺が思ってもいなかったことを指摘してきた。

でも・・・

「少なくとも幽霊、って感じじゃなかったよ。それなら俺にもわかるし。」

そう・・・俺には靈感がある。

昔幽霊関連の事件に巻き込まれて靈感が覚醒しちゃったんだよな。

ま、それは置いて・・・

「なら妖怪は？」

「可能性はあるよ。大男の方は犬の耳みたいなのがついてたし。」

「そうかい。・・・しかしわからないね。」

「何が？」

「妖怪なら何でお前を生かしているかってことだよ。いくつか予測はつくけど、ね。」

そう・・・いくつか予測はつく。

1つは俺から奪った物は俺が生きている限り何度でも再生して取れるから。

これなら殺さないで置くのも納得できる。・・・したくないけど。

2つ目はその奪った力のみ必要だった、ってこと。

ほかはいらないから気まぐれで殺さなかった。・・・これはこれでムカつくな。

そんなことを考えていたらお婆ちゃんが台所から晩御飯を持ってきた。

「明日にでも知り合いに連絡してみようかね。  
ハガル、最後にこれを飲んで今日はもう寝なさい。」

でた・・・海波家秘伝の薬草ドリンク。医学的根拠はないけど怪我や病気にはすごく効く。

ただし、すつつつげええー！ー！まずい！

「そうだ、ハガル。今日ははやてちゃんには会ったのかい？」

図書館でできた友達のことだ。

「会ったよ。最近遠い親戚が来たらしくて毎日楽しいって言ってたよ。」

俺はまだ会ってないけど。」

「そうかい、なら近いうちに挨拶に行ってきたさい。家は知ってる

んだろ？」

そんな他愛もない家族の会話をしながら食事をした。

最後に特性ドリンクを飲んでると。

「明日から訓練増やすからね。」

聞きたくない言葉を耳にした。

.....つげえ.....まじい.....

まだ小学生とはいっても、高校生程度なら問題なく相手にできるよう育てたつもりだったんだけどねえ……。

話では不完全ながらく連楔砕くを使えたみたいだし、次の段階に進めようか。

ま、それも明日以降だね。

「よっと。疲れがたまってたのかね？」

「すぐに寝ちまったよ。」

寝てしまった我が孫を背負いながら部屋に運んでいるが、それにしても。

「大きくなったねえ。」

孫の成長が実感できてうれしいね。

それにしても・・・ちよいと物置でも漁ってみるかね。

↳午前1時・八神家↳

「今日は随分と多くのページを集めたようだな。」

休んでいると我等ヴォルケンリッターが将、シグナムが話しかけてきた。

どつちから風呂上りのようだな。

「地球にいなながら数時間であれだけの頁数。おそらく相手は2、3人なのだろう。」

ともすればそれなりの相手、にもかかわらず大きな戦闘は感じられなかった。

「いったいどのような相手だったのだ？」

そう・・・今回の蒐集で埋まった頁についての疑問だった。

それは直接戦った俺も疑問だった。

「・・・わからん・・・。」

「どづいづいとだ？」

今回の戦闘について詳しく説明した。

ヴィータが寝てしまいグラフアイゼンがいないので少々面倒ではあったが。

話し終えてシグナムを見ると信じられない、といった顔をしていた。それもそうだ。

我等ヴォルケンリッターが魔力だけが高い少年に2対1で手こずったとなれば、な。

「あの少年、魔力を扱う術を知らないようだが戦い方は心得ているようだった。」

しかし・・・

「そうだとしても魔力もなしに鋼の軛を破壊したことが信じられん。お前の盾は並の攻撃では破壊されることはないからな。」

あの攻撃は身体に見合ったものではなかった。

魔力での身体強化も感じられなかった。

二人で考えに浸っていると。

「二人して何を考え込んでいるの？」

・・・シャルカ・・・

「今日のこと少し、な。」

「私も話を聞いたのだが、正直信じられんよ。

カートリッジを使用していないといっても、主とそう変わらぬものが魔力を使わずにザフィーラとヴィータを手こずらせたのだからな。」

「それは私も気になるわね。それよりもザフィーラ。」

心配そうな顔をして俺を覗き込んでいる。

「両腕・・・今は前足ね、ちょっと診せて。怪我をしているでしょ？」

「腕をやられたのか？」

「打撲程度だ。怪我とはいわん。」

「でも念のため、ね？」

手当てが済んだあと今日は休むことにした。

また主に心配をかけるわけにはいかないからな・・・

しかし・・・またやつ・・・ハガルとはどこかであいそような予感がする。

らしくないな・・・。

そう思いながら意識は闇に落ちていった。

あれから4日たった。

またくると思っていた襲撃はあれ以降ないけどまだ気は抜けない。

……それよりも気が抜けないことがある。

おばあちゃんとの訓練だ。正直きついよ（泣）

訓練時間はほとんど変わらないけど密度がすごいことになってる。

そのせいで居眠りが増えて先生に怒られたんだよな……

……ま、今はこれに集中しようかな。

現在俺は鳴海市にある図書館で本を読んでいる。宿題はとっくに終わってる。

ちなみに日課。読んでも本が医学書なので周りからは変わった目で見られてる。

「……そつかぁー、同い年なんだ。」

「うん。時々ここで見かけてたんよぉ。」

「あつ、同い年ぐらい子や。つて。」

「あつ、実は私も。」

ん？この独特の訛りのある声は八神と……たしか月村さん、だっ  
たかな？

二人とも自己紹介をしているところを見ると初めてあつたみたいだ  
な。

「んふふ。」

お互いに微笑んでる。これなら二人は友達になれそうだな。

「そういえばもう一人同じ年の子、男の子なんやけどおるの知ってる?」

「ん?どんな子なの?」

「いつも難しい医学書を読んでる変わった子やね。」

俺のことかな?八神もいるし挨拶でもしとこうかな……

「それって俺のことかな?こんにちは、八神。」

ちょっと驚いたように俺の方を見る二人。ドッキリ成功かな?

「ハガル君。こんにちはあ。  
びっくりしたやないか。」

「そりゃ悪かったね。えっと、君は確か隣のクラスの月村さんだっけ？」

「あ、はいそうです。えっと……あなたは……確か海波君？」

「そ、俺は海波ハガルっていうんだ。よろしく。」

そっいつて手を差し出す。

「月村すずかです。こちらこそよろしく。」

笑顔で握手をして答えてくれた。うん。いい友達になれそうだな。

「はやてちゃん、海波君がさっき言ってた変わった子なの？」

「そや、本人いわくほぼ毎日通って医学書を読んどるらしいんよ。」

「へえ、海波君って医療関係に興味があるの？」

「まあね。あ、月村さん俺のことはハガルでいいよ。」

「それなら私もすずかでいいよ。」

「うーん……名前じゃなきゃだめ？」

「いやなの？」

そんな泣きそうな顔をしないで！！

「ハガル君って名前で呼ぶの抵抗あるもんね。特に女の子やし。うちの時もずっと八神さんって感じてぜんぜん名前で呼んでくれるのよ。」

「男ならまだいいんだけどね。目上や女の人には敬語を使えって散々言われてるから。」

まあ友達は別なんだけど。」

「へえ〜」

そんな感じで3人で楽しく話をして過ごした。

.....うるさかったのか途中司書さんに怒られた.....

俺はちょっと用事があったから先に帰っただけだね。

ハガル君が先に帰ってから、すずかちゃんと二人で話をしていた。

好きな本や今読んでいる本についてとか。

同い年の友達って今までハガル君しかおらんかったから、ついついうれしゅうなってしゃべりすぎてもうたな。

車椅子をすずかちゃんに押ししてもらいながら、そんなことを考えていたらシャマルが迎えに来てくれとった。

「ありがとう、すずかちゃん。」「こいこいだよ。」

「うん。それじゃ。」

「お話してくれておおきに。ありがとうな。  
ハガル君にもよろしゅういって。」

「うん、わかった。またね、はやてちゃん。」

今日はほんまに楽しかったな。

そんなことを考えていると後ろから車椅子を押しているシヤマルが声をかけてきた。

「どづしたんです、はやてちゃん？今日はとても楽しそうですね。  
何かいいことでもありました？」

そんなに楽しそうな顔をしとるんやろか？

「ええ、とても。さっきの子ですか？」

「それもやけど久しぶりにハガル君ともお喋り出来たからかもね。」

「ハガル君って、前に話してくれた変わった男の子でしたよね？  
今日はお話できたんですか？」

「ハガル君は毎日図書館に通ってるらしいんですよ。  
特に今は持ち出し禁止の医学書を読んでいるらしいし。」

「そうですか、本当に変わった子なんですね。一度私も会ってみ  
たいですね。」

「そやね。きっとシヤマルとも仲よくなれるよ。」

「そうだ、はやてちゃん。寒くないですか？」

「うん、平気。シヤマルもさむない？」

「私は全然。」

シヤマルの気配りや物腰はものすごく安心できるなあ。

あ、あれは

「シグナム！」

「はい。」

三人での帰り道……ちょっと前まではこんなことはなかった  
んよなあ……

それに晩御飯も量が増えたし。

今日はなんにしよう？

「晩御飯、シグナムとシャマルは何たべたい？」

「ああ、そうですね……悩みます。」

「スーパーで材料を見ながら考えましょうか。」

「うん。そだね。」

こんな会話もうちにとってはとても大切な時間。

ヴィータもよう食べるし何にしようか・・・

「そういえば、ヴィータは今日もどこかお出かけ？」

シヤマルが少しばつが悪そうに。

「ああ・・・えっと・・・そうですね・・・」

「外で遊び歩いているようですが、ザフィーラがついていきますのであまり心配はいらないですよ。」

「・・・そうかあ」

一緒に居れんのか・・・

「でも。少し距離が離れても私達はずっとあなたのそばにいますよ。」

「はい。我等はいつもあなたのそばに。」

そんなこと言われると泣いてしまつせん。

「……ありがとう……。」

……時刻は少し遡る……

主を迎えに行く途中のことだった。

ん？この魔力は、大きいな……。 同員か？

前から来る大きな魔力に気付いた私は待機状態のレヴァンティンをとっさに握って立ち止まった。

しかし前方から歩いてくるのは主と同年代の少年のみ。

私とその少年がすれ違う時に私は……

……その少年を警戒していた。

身体の重心がブレていない。スキの見当たらない体運び。

そして……足音がまったく聞こえなかった。

管理局か？いや局長ならば魔力を隠そうとするはず。

それに私達のことを少しは知っているはず。

もしかするとザフィーラが言っていた少年というのは彼のことなのか？

少年の後ろ姿を見ながら考えに浸っていた。

はっ！それよりも今は主を迎えに行かねば。

頭の片隅にそのことを残し私は歩き始めた。

くっくくく

第2話『うちのお婆ちゃんは「ワ」いのだ。最強で最恐なのだ。』（後書き）

作者「いや、本当によく生きてるよな。お前。」

ハガル「いや、俺も不思議なんだけど……。そういやこの話って原作1話の途中までだよな?」

作者「そうだな。んで、はやてとすずかと会おう、と。はやてとは以前から知り合ってるって設定だけだね。」

ハガル「あとシグナムとニアミスしてるよね?」

作者「すれ違う程度だけだな。そしてお前は、はやてに微妙にフラグを立てている。」

ハガル「え!? 立ててんの? 普通に話してるだけのようなの……」

作者「あまい!!! リンディ茶のように甘いぞ!!!」

ハガル「そこまでかよ。」

作者「よく考えてみる。ずっと一人暮らしで病院との往復が主だった幼い少女。しかもはやては脚を患っている。その状態では満足に友達もできず遊ぶことができない。そんな中、図書館という限定的な場所とはいえ同世代、いわば幼馴染でかななり話も合うし気遣いもしてくれる。」

ハガル「まあ八神は脚が悪いからね。」

作者「それでフラグが立たんわけが無かろう!!!」  
拳を握って熱弁中。

ハガル「・・・いやいや、現実はそのなあまくないから。」

作者「これは小説、つまり話。現実など関係ない!!!」

ハガル「メタな発言はやめい!!!それよりもうちのお婆ちゃんが出てきたね。」

作者「ああ、キャラ紹介もしておこうか。」

名前：海波うみなみ 三月みづき

性別：女

年齢：60歳

生年月日：3月3日

人種：日本人

身長：166cm

体重： kg

血液型：O

出身地：日本・群馬

所属：帝護神一派・清心覇軍流戦場古武術

好き、得意なこと：生け花

好きな物：孫ハガル、和食

嫌い、苦手なこと：衰え

嫌い、苦手な物：特に無い

詳細：

「ハガル」祖母で育ての親。

羨に敵しいがそれは全て「ハガル」を思つてのこと。  
現代に存在する「帝護神一派・清心覇軍流戦場古武術」最後の師範を務める。

「清心流」の師範でもあるため「ハガル」にとつて特別な存在。  
生け花教室を開いておりそこで講師をしている。

作者「そうそう言つておきたいことがある。」

ハガル「ん？」

作者「三月はこの段階、A・S終了までだと最強キャラの予定だ。」

ハガル「……………まじ？」

作者「大マジ！ちなみに魔法ありで戦闘したとしてもダントツだ。  
さすがに空に逃げられたり、広域魔法はどうにもならんがある程度  
の高さなら何とか対応できる。」

ハガル「お婆ちゃん……。そういや【帝護神一派・清心覇軍流戦場古武術】つてのは？【清心流古武術】と関係あるの？」

作者「そうだな。それについても少し触れるか。」

名前：帝護神一派・清心覇軍流戦場古武術

みかどごしんいっば

せいしんはぐんりゅうせんじょうこぶじゅつ

系統：古武術

詳細：

通称「清心流」。

祖母「海波」の家系で代々受け継がれてきた戦場技法。

資料は少なくわかる限りでも10世紀以上もの歴史を持ち、その時代に合わせ様々な技術を取り入れている。

多くの技が口伝であるため失われた技術も多い。

暗殺術や隠密行動などの裏の技術も多く時代によっては重宝された。

作者「俺が原作、この場合はとらハ3ね。その御神流からイメージして作った古武術だ。」

ハガル「厨二臭がすさまじいな。」

作者「まあそういうな。俺もそれは感じてる。」

ハガル「あ、やっぱり。」

作者「うなづく。」

作者「そりゃな。んじゃ今回はここいらで終わるとしますか。」

作者・ハガル「それでは皆さん次回で。」

<暗転>

### 第3話『知ってしまった秘密の一部』（前書き）

作者「さてさて、我等が主人公は順調にフラグを立ててるようだね。」

ハガル「俺にそのつもりはないんだけどね。」

作者「だろうな。んじゃ今回の3話だがまだ戦闘パートだ。といっても導入部分までだがな。あとここで注意事項がある。」

ハガル「なに？」

作者「俺は英語が苦手だ！そしてドイツ語なんてわからん！」

ハガル「威張れることじゃないよね。」

作者「だから、たまに日本語で表記するが極力原作道り、英語とドイツ語を使用するつもりだ。ま、限界はすぐ来ると思うが・・・」

ハガル「下手に英語使うよりはましだろ。そろそろ本編行く？」

作者「そうだな。では、とある水使いの物語」 第3話始まるよ。」

### 第3話『知ってしまった秘密の一部』

〽12月2日 PM7:45 鳴海市 市街地〽

「ありがとうございます！」

ふう、これですばらくは薬局にこなくてもいいかな。

最近生傷が絶えないから包帯やら消毒液やら減りが早いんだよな。

「ちょっと遅くなったけど、お婆ちゃんには連絡済だから大丈夫かな。」

そんなことを考えている時だった。

「え？」

妙な感覚とともに目の前で人が消えた。

この感じは前に感じたのと同じ……てっことはまさか？

とにかく武器になるものを手にしないと。

俺は近くの工事現場を目指して走った。

〈同時刻上空〉

「魔力反応。獲物見つけ！」

ひとつはこの前と同じ奴……ってことはでかい方が最近感じる奴か。

だったら……

「いくよ。グラフアイゼン。」

了解

なんだあの光!?

ビルの屋上でなにが……

ゴドオー……ン!!!!!!

・・・なっ！？誰か落ちた！！・・・

どうにかできるわけじゃない。でも俺はそれを見た瞬間走り出した。

すると落ちている人が桃色も光に包まれた。

ん？あれは！？

とっさに建物の影に隠れて今起こってることを確認する。

「空中で止まってる！？」

それの上にいるのってまさかこの間のゴスロリ少女、ヴィータだっけ？・・・ってことはまたあいつらの仕業か？」

また鉄球打ちやがった！！

光の繭に当たって爆発した。

その瞬間桃色の光が2つ、煙に紛れてどこかへ飛んでいった。

「うおらぁあああああ！！」

お、煙から人が出てきた。

「いきなり襲い掛かられる覚えはないんだけど。  
どこの子？ いったいなんでこんなことするの？」

……確かにそうだよな……

ん？ あれって確か……月村さんと同じクラスの、  
なんであの子が  
???

しかも空飛んでる！ いったい何なんだよ！？

仲間？いや攻撃されてるから敵？

んん？？

俺が考えている間にも状況は進んでいた。

「教えてくれなきゃ！！わかんないつてばあー！！！」

ん？あれってさっきどつかいったピンクの玉……

もしかしてヴィータに当てるのか？

「ヴィータ！！後ろ！！！」

あ……なんで教えちゃったんだよorz

「ギタータ!!後ろ!!」

ん?この声は・・・後ろ?

「あ!」

いつの間に二発も!?

「え!?!うあ!?!」

ドゴオオオオン!?!

「」のやろっおお!!」

よくもやってくれたな!!

ちっ、こっちの攻撃は交わされちまっ!でもさっきの声って確かあ  
ん時の……

……なんで敵に教えちゃったんだよ……

まあお互いに直撃じゃないみたいだからダイジョウ……

「話を!」

ん? 何だあの光?

《デイバイン》

「聞いてっつてばあ!」

《バスター》

..... な..... なんじゃありや!?!???

何あのバスターライフルみたいな攻撃!?

言ってることとやってること違うねえ!?

それよりあんな当たったらヴィータが……

ギリギリ当たんなかったのか……いや、元々外す気だったのか？

……あれ？

ヴィータのやつなんか怒ってない？

あの雰囲気……わかってたけど、やっぱりただの女の子じゃない……い……

見た目俺より年下なのになんて迫力だよ。

あの子なんてびびってるよ。

そっぴやヴィータの魔方陣みたいなのって赤いんだ……

「グラーフアイゼン。カートリッジロード……！」

《エクスプロージョン》

な、なんだ？ってそっぴや俺最近こればっかだな……

そんなことはどうでもいいんだあれ？

ハンマーが動いた……というかしゃべってる！？

《ラケーテンフォルム》

か、形が変わった？

「ラケーテン……！」

な！？回りだした？まさか投げるわけじゃないよな？

って突っ込んだー！？

しかも結構早い。

「ううおおおー！！」

「くうー！！」

とっさにあの子も防いだみただけどピンクの盾みたいなのはすぐに砕けた。

そのままあの子の杖を削っていき……

「あー！！」

「ハンマーー！！！！」

吹っ飛ばした。

「あああああ……」

ガシャーン！！

やばいビルに突っ込んだ。あんな吹っ飛び方したら怪我じゃすまないぞ。

ってヴィータも追い討ちかけようとしてるし。

「二人を止めな……」

走り出そうとした瞬間思わず止まってしまった。

なぜかってそりゃ簡単な理由だよ……

「関わるなといったはず……いや、巻き込まれたのか、ハガル。」

「……ザフィーラさん……」

この男がいるからだ。

~^U^U~

### 第3話『知ってしまった秘密の一部』（後書き）

ハガル「え？俺またザフィーラさんと戦うの？」

作者「お前が超えなきゃいけない壁の一つだからね。」

ハガル「まじかよ・・・」 orz

作者「んじゃ今回の3話の説明を少ししようか。まあ、前回の続きで原作一話の後半部分を再構成した形になってる。」

ハガル「そっぴやこの小説って基本再構成なの？」

作者「途中まではね。後半にいくにつれてオリジナル要素が増える予定だ。」

ハガル「オリキャラ出してると点でそうなるよな。」

作者「まあな。んじゃ今回も恒例となりつつあるオリジナル設定を公開しようか。今回は第1話で出てきたあれだ。」

ハガル「あれって、たしかザフィーラさんの鋼の軛を破った技？」

作者「そそ、ちゃんと技名もあるよ。・・・厨二臭いけどね。」

ハガル「やっぱりか・・・」

名前：砕さい

系統：帝護神一派・清心霸軍流戰場古武術

威力：C \ A A A

射程：F

詳細：

攻撃対象を「面」で破砕する攻撃法。

未熟者は攻撃時の衝撃で腕や脚を痛めることが多い。

熟練者となると武器越しにも扱える。

作者「ちなみにハガルがやったのは次のだ。」

名前：連楔れんけつさい砕

系統：帝護神一派・清心霸軍流戰場古武術

威力：A \ S +

射程：F

詳細：

「砕」の発展技。

一撃目で楔を打ち込み寸分違わぬ場所に二撃目を打ち込む。

それにより衝撃を内部深くに衝撃を伝え内側から破壊する。

隙が生じ易く打点がずれ易いため動く物に対してはかなりの練度が必要となる。

ハガル「うわゝ厨二臭がすげー。」

作者「ここはほめ言葉として受け取っておこう。そうそう、お前は  
まだ未熟だから表記の威力は出ているが、身体の負担や予備動作な  
んかの無駄もある。」

ハガル「そりゃそうだろ。だって俺10歳だよ？」

そう、ハガルはまだ10歳。小学3年生なのだ。それを考えると十分異常、チートだ。

作者「んで、次回の話を少ししよう。次回、お前とザフィーラのカチバトルの話だ。んで1話以上にお前がボロボロになる。」

ハガル「……………へ？」

作者「では次回をお楽しみに。」

ハガル「ちよつとまて」

<暗転>

#### 第4話『戦いの嵐、また巻き込まれた!!』(前書き)

作者「さてお楽しみハガルvsザフィーラのガチバトルだ!!」

ハガル「何人が楽しみにしてたんだろうね。俺としてはなぜ?って感じなんだけど。」

作者「今回の話で、ハガルのチートとも言える力的一端が見えるようになってる。ただ、まだ魔法は使わん!」

ハガル「まだ使わないの!?!」

作者「いや、正確にいうなら最後の方でちょこつと使う程度だな。」

ハガル「ねえ、俺本当にリリカルなのは二次創作の主人公?今のままじゃ格闘作品と変わらない気がするんだけど。」

作者「気にするな。そのうち使うようになるさ。では本編いつてみようか。」

ハガル「そだね。。。とある水使いの物語」 第4話始まります。」

**第4話 『戦いの嵐、また巻き込まれた!!』**

突然目の前で繰り広げられた現実離れた光景。

『魔法』という存在を知らない俺にとっては、まさにファンタジーだった。

これがきっかけで、俺はある事件に巻き込まれていくこととなる。

その事件をきっかけに俺の人生は大きく変化し、加速し始める。

このときの俺は、そのことを知る由もなかった。

くとある水使いの物語

第4話 『戦いの嵐、また巻き込まれた!!』

「…………ザフィーラさん…………」

…………さて…………どうしようかな…………

ヴィータが居たからもしかしてって思ってたよ。

だから覚悟はしてた。巻き込まれた段階でね…………

だけど、いざ目の前に出てこられるとびっくらしちゃっね。

しかも一度負けてる相手だし。

「……ハガルよ。この場は引け。これより先、お前が首を突っ込まなければ我等はお前に危害を加えることはない。」

「そんなこと言われても、はいわかりました。なんて言えませんよ。俺は一度襲われた側ですよ？警戒するのは当たり前です。」

俺の言ったことが正論だと思ったのだろう、ザフィーラさんは苦い顔をした。

それに俺には引けない理由ができちゃったしね。

「それに、今ヴィータと戦ってるのは俺の同級生です。その子を見捨てることなんてできません。」

ザフィーラさんが、そうか。と小さくつぶやいた。

それを合図に雰囲気が変わった。

簡単に言えば空気が重くなって呼吸がし辛くなった。

「ならば前回同様眠ってもらおう。」

正直逃げたいよ!!

ただどこのとんでもない状況を知るためには、あの子から話を聞かなきゃならない。

ヴィータや目の前にいるこの人は絶対教えてくれないと思うし。

それにこのまま帰ると何か大事なものを無くす気がするからね。

「……今度は1対1。負けません!!」

そうして俺は鉄パイプを正眼に構え相手を……敵であるザフィーラさんを睨み付けた。

「うおりゃあああ!!」

「はあああああ!!」

バキヤ!!

何回目かの打ち合いの後、拳と鉄パイプが衝突した瞬間パイプが根元から折れた。

そのまま持っていた残りを投げつけ突進の勢いを殺さず右足で蹴りを繰り返す。

「ぶん!!」

ザフィーラさんはそれを左腕でガード、そのまま脚をつかんで後ろに投げられた。

なんとか着地して勢いそのままに後ろへジャンプ。

んで、さつき着地した場所を見るとザフィーラが地面へと拳を突き立てていた。

「ああああ!!」

連駆を使って一瞬で背後に移動、そのまま不完全な碎を撃って見たけど当たり前のように防がれた。

一応効果はあったけどこっちも痛いのであんまり意味なし。

痛みで一瞬動作が止まったところにザフィーラさんが攻撃してきたがそれをしゃがんで回避。

でもそれがよくなかった。

「あまい！」

思いつき蹴りを食らった。まるでサッカーボールを蹴るみたいに。

「いでえ！」

とっさに後ろに飛んで受けたけど勢いを全部は殺せなかった。

「……その身のこなしやはり戦闘経験があるようだな。」

「そりゃそつだよ。毎日お婆ちゃんと死ぬほど実戦訓練してるから

ね。」

腕の痛みを堪えながら虚勢を張ってみる。

内心痛みで泣きそう。(TOT)

「それよりもザフィーラさん……手を抜いてるのって余裕の現われなの？そんなんじゃないよ。」

はったり囁ましてみる。

魔法だけ？使ってるようには見えない(使ってもわからないけど)から今なら勝機はある。

まあ使われても空飛ばれない限りは何とかするけどね。

「手を抜いているつもりはない。しかし魔法を使っていないことを言っているのであれば手を抜いた、と言われても反論はできんな。」

「んじゃ、まだ俺に勝ち目はあるね!」

不敵に笑みを浮かべたその瞬間、俺の視界から音と色が消えモノクロの世界になる。

今俺ができる最高の技、天駆。

簡単にいっちゃえば、色々と人体のリミッターを外すことで体感時間を延長し相手より早く動く技。

今の俺では体感時間2秒が限界。

でもそれだけあれば近づいて攻撃するぐらいはできる。

ザフィーラさんの懐まで詰め寄りそのまま攻撃を行った。

「ぐぶおあ!」

攻撃の直後、音と視界が元に戻った。

ザフィーラさんは後ろのビルに吹っ飛んで、勢いがつきすぎたため壁を突き破った。

天駆のスピードと連楔碎の衝撃で吹っ飛んだみたいだな。

「……………いだあ!!」

天駆と連楔碎の反動で体中の筋肉が悲鳴を上げてる。

お婆ちゃんに言われてたからわかってた……………わかってたけどやっぱりきつい。

痛みで思わず下を向いた。

それがまずかった。

「……はあ!」

一瞬でザフィーラさんが目の前に現れそのまま蹴りが顔面に。

とっさに左腕でガードしたけど俺は蹴り飛ばされた。

文字通り吹っ飛ばされたのよ。それも10mはね。

俺はガードレールに当たって何とか止まった。

でもまずった。とっさに左腕で受けたけど完全に折れた。

しかもガードレールにぶつかった時に、右のあばらもやったかも。

「ぐはあ……はあ……はあ……」

ザフィーラさんも無傷じゃないみたい。証拠に肩で息してるし。

「ぐはあ……」

あ、血吐いてる。内臓痛めたんだな。

「……………正直ここまでとは……………予想以上だ。」

「そんなこといっても……………まだ……………まだ、戦えるんでしょう?」

ぶっちゃけこっちはやばい。呼吸さえつらい。

痛みでなんとか意識を繋いでるようなもんだし。

「悪いがここで大人しくしてもらおうぞ。鋼の軛!」

「うわぁあ!」

またこれが

今度は腕と脚を挟まれて貼り付け状態にされた。

「しばらく大人しくしている。」

「あ、ぐっ……くそー!! までこらー!」

「その状態では戦えまい。」

そういつてザフィーラさんは飛び去っていった。

たぶんヴィータの援護にいったんだろう。

くそ！俺にもっと力があれば……

ここで見ることにしかできないのかよ。

……正直これほどとは……

魔力を使っていないというのは嘘だ。

身体強化に加え一度だけ障壁を展開した。そう一度だけ。

一瞬奴が視界から消えた時はぼ無意識に発動させた。

だがそれを超えて……いや、正面から破壊して攻撃を放って来た。

あの高速移動は……それに障壁を破ったあの攻撃。

あれに魔力は感じられなかった、となると一体……。

「……………今は気にするな。それよりもヴィータだ。」

2対1のヴィータを援護せねば。

俺がどうにか脱出しようともがいている時、上空では事が進んでいた。

今日は俺の常識を覆すことばかり……………いや今回のことに巻き込まれた時点で俺の常識あるようでない。

俺と同じぐらいの金髪ツインテールの子と栗色の男の子（？）（？）  
それとザフィーラさんと似た犬耳をしたオレンジ色の髪のお姉さん  
がヴィータ達と戦ってる。

ヴィータ達にはどこかで見たことがある桃色の髪をしたお姉さんが加わってる。

状況はヴィータたちの方が有利、だな。

戦うことに関しての経験が違いすぎる。

特にあの剣士の人。 . . . . . あの中じゃ一番強いんじゃないか？

あっ！まただ。

あの弾丸みたいなやつ。 あれを使った後の攻撃の威力が上がってる . . . . .

あれも魔法の一種なのか？

. . . . . あれが魔法かどうかなんて関係ない . . . . . このままじゃ

金髪の子たちが負ける……

どうにか、どうにかしないと!!

「くそ!! 邪魔なんだよ、この岩があ!!!!」

怪我のせいで思うように動けない。

どうすればいいんだ?

考えろ、考えるんだ!

みんな私を助けに来てくれたんだ。

それなのに私だけ……

「助けなきゃ。……あう……」

今度は私が……

「私が、みんなを、助けなきゃ！」

マスター！！

え！？

シューティングモード アクセラレーション

「レイジングハート？」

撃ってください、スターライトブレイカーを！

「そんな・・・無理だよそんな状態じゃ。」

撃てます！

「あんな負担がかかる魔法。レイジングハートが壊れちゃうよ!!」

スターライトブレイカーは私にはもちろんレイジングハートにもす  
ごい負担がかかる大魔法。

それを今のボロボロの状態で・・・

私はあなたを信じています!!

え・・・

だから、私を信じてください。

.....レイジングハート.....ありがとう.....

わかった、私も決めた。

「レイジングハートが私を信じてくれるなら、私も信じるよ!！」

私はユーノ君の魔法を解除して、レイジングハートを空へと向けた。

”フェイトちゃん、ユーノ君、アルフさん。私が結界を壊すから、タイミングを合わせて転送を!！”

”なのは!?”

”なのは、大丈夫なのかい?”

”.....”

”大丈夫!!!スターライトブレイカーで撃ち抜くから!!!”

「レイジングハート、カウントを!!」

わかりました。

め、眼が霞む・・・

カウント、9

!!この魔力は!!

「な!？」

8

何をしようというのだ!?

7

6

さっきの白いの、何しようってんだ!?

・・・ちっ、このやろう邪魔しやがって!!

5

・・・スリィー・・・

3

ぐぬー!!

3

「はあー!!」

この魔力・・・まさか結界を!?

4

・・・すり、いいいいい・・・

「レイジングハート、大丈夫？」

やっぱり負担が大きいかから・・・

大丈夫です。

そついいながら鈍い点滅を繰り返している。

カウント、3

さっき信じるって決めたんだ。だったら絶対に信じる！！

2

まっけてて昏すぐに

「ああ!」

．．．ありえない．．．ありえない．．．

な、なんだあれは．．．

なんで高町さんの胸から腕が生えてんだ！！！！

あまりに突然のことだったから思考が停止した。

でもそれは一瞬だった………と思う。

正直そっからの記憶は曖昧だから。

だって、キレたみたいだから。

「があああああああああああっっっっ！！！！！！！！！！」

「なのは――！！！！」

目の前の敵を見ずに見方へと向かうか……

間違っではない、が現在の最良の手ではない！！

「があああああああああああっっっ！！！！！！！！」

な！？

声の方を向くとそこには、ザフィーラが発動したであろう鋼の軛の拘束を解いた少年がいた。

件の少年ならば魔法は使えないはず……ならば力づくで？

いやそれはありえん。我等の盾の守護獣の拘束を力のみでなど。

「ああああああああ……」

ゾク！！

な、何だこの悪寒……あいつから発せられるものか？

「……す……た……た……た……た……」

私が奴を警戒した瞬間、視界から奴の姿が消えた。

「なっ！？」



きた。

レヴァンティンが自動で障壁を展開した。

P a n z e r s c h i l d

「シグナムよける!!!」

奴の拳が障壁に当たると一瞬の均衡の後破壊された。

「くっ!!!」

その一瞬の間に半身なりかわそうとしたが、奴は拳を振りぬいた勢いを殺さず身体を回転させ蹴りを放って来た。

それをレヴァンティンで受けるも衝撃でビルへと叩き付けられた。

「ぐはあああ!!」

” ” シグナム!! ” ”

「シグナム!?!?!?!?!今のうちになのはを!!」

この隙に白い魔導士へと向かうテストロッサ。

しかしそれは意外な人物によって止められることとなる。

あの子シグナムに攻撃を……それよりこの隙になのはの下にいかなきゃ!!

「バルディッシュ!!」



「あ……」

Defensor

「バルディッシュュ!!」

オートディフェンサーが発動したけどそれを瞬時に破壊。

そのままバルディッシュュのグリップを中央部分から殴り折られた。

勢いを利用して後ろに下がりあの子を見る。

……追撃の様子は無い……。

もう一度よくあの子をしてみる、その異常に気付いた瞬間私の顔から血の気が引いた。

全身傷だらけで頭の左半分と服は血で赤く染まり、左腕は本来曲がる筈の無いところが曲がっていた。

まさに満身創痍だった。

それなのにまだ戦おうとしている。

その姿はまるでなのはを守るように……いや、実際あの子はなのはを守っているんだ。私達から。

でも!!

「聞いて!! 私達はなのはの味方!! なのはを助けたいだけなの!!」

こうしている間にもなのはの身に何か起きてる。

その時だった。場の空気が少し軽くなった。

瞬間あの子は、私達の目の前で、地上に落下していった。

そして……

「スターライト……」

それと同時になのはの魔法が発動した。

「ブレイカー……!!!」

そつだ！！あの子を助けないと！！

私は急いであの子の下へ向かった。

結界がやぶられか……

” 結界が抜かれた。離れるぞ！”

” 心得た。”

” シヤマル、ごめん。助かった。”

” うん。いったん散って、いつもの場所で、また集合！！”

今回も何とかなった……が、ハガルのあの力。

全員に話す必要があるな。

” 後で話がある。 ”

” 何だザファイラ？ ”

” ……あの少年についてだ。 ”

” わかった。 ”

今回のことで少しわかった。

ハガルは局の魔導士よりも危険かも知れない、と。

僕とアルフの魔法じゃ応急処置にしかない。

なのはもこの状態だし。

「クロノ！エイミーさん！早く医療班を！！」

全身血まみれの男の子に、回復魔法をかけつつ思う。

さっき見せたこの子の力。

あの魔導士達の力……少しだけ似ていた。

この子はいつたい.....

~~~~~

第4話『戦いの嵐、また巻き込まれた!!』(後書き)

作者「以上、本編第4話でした。」

ハガル「……………」

作者「どうした？」

ハガル「…………俺死んだよな？普通死ぬって!!しかも10歳の  
子供だよ!!シグナムさんに斬られた時点でやばいでしょ!？」

作者「まあ落ち着け。」

ハガル「落ち着けるかー!!俺の今後に関わるんだよ!?落ち着け  
るか!！」

作者「そこは主人公補正で死なんから安心せい。それよりも。」

ハガル「それよりも!？」

作者、気にせず話を進める。

作者「今回の最後、まあ暴走状態とはいえハガルがやっと魔法を使  
いました。これからは徐々に魔法を使うようになるのでお楽しみに。」

ハガル「…………もうあきらめる。お前に何言っても無駄みたいだし。  
……………」

作者「んじゃ、今回も恒例の設定紹介。今回は2つだな。」

ハガル「・・・無視かよ。」

作者「まずはこいつ」

名前：連駆れんく

系統：帝護神一派・清心霸軍流戦場古武術

詳細：

各関節を連動させることで、力の流れを無駄なく発揮する「清心流」の基礎体術。

これを身体に覚えさせなければ、多くの「清心流」の技を使えない。

打撃の強化・移動方の効率化・斬撃の高速化など様々なことに応用される。

ハガル「どっかで見たことある設定だな？」

作者「気にするな。これは上記のように様々なことに応用できる。つまりお前の強さの一端はこれにあるわけだ。」

ハガル「なるほどね。んで、次は・・・」

名前：天駆てんく

系統：帝護神一派・清心霸軍流戦場古武術

詳細：

「清心流」の高速移動術。

「御神流」の「神速」と原理や理屈はほぼ同じ。

ハガル「でた、チート技能。しかも基にしたのは公式チート技能か。」

作者「そこは言わんとして。御神流をイメージして考えてんだからしょうがないでしょ。」

ハガル「でもさ、10歳の俺が使って大丈夫なの？」

作者「いや、反動とかシャレにならんから本当はやばいよ。」

ハガル「おい！」

作者「ただ今のところお前の体感で2秒、つまり他人からしたら1秒にも満たない本当に一瞬だからな。実際使ってもあんまり意味は無い。今回みたいに初見だと、動揺を利用した奇襲に使えるけどね。」

ハガル「それでも十分チートな気が……」

作者「三月はもっと長く使えるぞ。それこそ他者の体感で10秒とか余裕。」

ハガル「お婆ちゃん……」

作者「そんじゃ、今回はこの辺で。」

ハガル「俺どうなるんだろう……」

< 暗転 >

番外編 PV6000 & a m p ・ユニーク1000突破記念(前書き)

今回は特別編。

本編が進むわけではないけど、関係ないわけではありません。

番外編 PV6000 & amp・ユニーク1000突破記念

作者（以下作）「いや〜驚いた驚いた。」

ハガル（以下ハ）「どうした、作者？」

作「なんとPVが6000、ユニークが1000を突破したのだ！  
！」

ハ「……………まじで？」

作「嘘言っでどうする。本当だ。」

ハ「ちょ、ちょっとまって。」

ガサゴソ……………（確認中）

ハ「……………まじだ……………なんで？なんでだ？」

作「ま、【リリカルなのは】の二次創作物だからだろ。」

ハ「自覚あんだね。」

作「そりゃ自分の文才ぐらい自覚してるさ。」

ハ「んで、今回は何するの？雑談だけじゃないでしょ？」

作「もちろんだ。今回は今後の方針というか、どういう流れになるかってのを説明をしようと思っている。」

ハ「それってネタバレになんないの？」

作「なるだろうな。ま、ギリギリのところまでやるつもりだ。」

それに、ここで言ったことがそのまま実現するか、ということすらでもない。

全て俺しだいだ！」

ハ「威張ることじゃねーだろ！！」

作「んじゃ、まずは今後味方側にオリキャラが登場するか、だが。」

どうやらハガルは諦めて話を聞くようだ。不満顔であるが。

作「勿論登場予定だ。ただしA・S編ではなく、それ以降に出す予定だが。」

ハ「あくまで予定なんだね。」

作「そうだ。」

ハ「んで、そのA・S編ってどこまで？原作のエピローグ、15歳まで？それともそれより前なの？」

作「それより前、つまりエピローグより前、とだけ言っておこう。」

ちなみにPSP版のストーリーを導入する考えもある。」

ハ「そりゃまたすごいね。」

作「ただ一つ問題がある。」

ハ「問題？」

かなり真剣な顔の作者にハガルは気持ちを切り替え、次の言葉を待った。

作「……俺、ゲーム買ってないの!!」

ハ「おい！それダメじゃない!？」

作「大丈夫！某笑顔の動画サイトでプレイ動画見れば何とかなる。」

ハ「いや、買えよ。」

作「……買えたらね。」

ハ「そういや、今大変なんだっけ。」

作「うん……。さて！次だ次。」

ハ「お、おう。」

作者のテンションに若干の押され気味のハガル。

でも次の話題が気になっているのですぐに聞く姿勢になる。

作「感想でもあったのだが、誰にフラグを立てるかって話だ。」

ハ「それかい！！よりもよってなんでそれなんだ!？」

作「いやいや、結構重要だぞ。なんたってこの作品のヒロインになるんだからな。」

「しかも最終的にはお前の恋人になるんだぞ？」

ハ「いや・・・そりゃ、まあ・・・そうだけどさ・・・」

ガラにもなく照れるハガル。なんだかんだ言ってまだ10歳の少年なのだ。

作「だがここで問題がある。」

ハ「問題ってなんだよ？」

作「お前の特殊スキル、【フラグメーカー（中）】の能力だ。」

ハ「・・・なあ、その妙なスキルなに？しかも中って・・・」

作「俺が命名したスキルだ。様々な人物にフラグを立てるフラグメーカー。」

その中でも段階があり、弱だとまあ恋愛感情まで行くのは少数だ。

逆に強だと異性で近い年齢なら、ほとんどが恋愛感情まで行くというものだ。」

ハ「んで俺は中なのね。つまり中間で半端、と。」

作「ああ。俺はハーレム物を作りたいわけじゃない。

だがお前が色々はことに関わることで様々な人にフラグを立てることになる。

そしてこれは【リリカルなのは】の二次創作物。原作キャラの女性比率が以上に高い。」

ハ「そうだね。男をぱつと数えてもクロノさん、ユーノ、ヴァイスさん、ロツサさん、

エリオ、グリフィス、ゲンヤさんにスカリエッティの8人か。」

作「それに比べて女性は多い。つまり恋愛感情を持たせ易いのだ。

まあそれも俺の書き方次第だが・・・」

ハ「地味にメタ発言すんなよ・・・」

作「んでだ、フラグメーカーには他にも能力がある。」

ハ「・・・大体予想付くけど言ってみ。」

作「死亡フラグなんかも立てる。」

ハ「やっぱりかい!?!」

作「安心しろ。お前は主人公補正が働いて死亡フラグが立つことは無い……………今のところ。」

ハ「安心できねえな。」

作「あとはザフィーラとのライバルフラグとかシグナムとのバトルフラグなんかはもう立ってるな。」

ハ「たしかにな。」

4話までの連載ですでにザフィーラとは2回戦っている。

そう考えるとこの作品のザフィーラ登場率と発言率は高いと思われる。

ハ「んで、肝心のヒロインは？」

作「うむ。ヒロインというかルートはいくつか候補がある。」

ハ「ちなみにそのルートとは？」

作「まずは王道ともいえる、はやてルート。」

ハ「ま、王道だね。フラグも立ってるみたいだし。」

作「んで次がアリサルート。これはお前のキャラ紹介の時にヒントを仕込んでおいた。」

ハ「確かに・・・俺とあいつは幼馴染つつう設定だもんね。」

作「次がシャマルルート。これはお前がいずれ医療系の道に進むからな。」

そうするとシャマルとの接点も増えるからだ。んで、闇の書事  
件の借りもあり、次第に・・・。

そんなとこだな。」

ハ「なるほどね。確かにこれも納得できる。でもこの時点で3人が  
・  
・

俺っていつたい・・・」 orz

落ち込むハガルに作者は更なる追い討ちをかける。

作「んで、次がファイラルート。これh「ちょいまって!!」って、  
ん?」

ハ「なんでファイラさんルートなんだよ?え?BL系ルート?」

作「そんなつもりはない。ただ他のルートと違い特定のヒロインと  
親密になりにくいってだけだ。」

基本ザフィーラと任務を共にすることが多く、尚且つ普段から  
一緒に訓練する。

そんな感じだ。これは最終的にはやてがヒロインになる可能性  
が高い。

ま、ライバルフラグ立ててるからこれもやり易いんだよね。」

八「そういうことか。俺はてつきり・・・」

作「てつきりなに？俺にBL物書かせようってか？

そりゃ、やりがいはあるだろうが俺の精神が持たん。」

八「いややれとは言わんさ。」

・ 「えー！！」という不満の声がどこからか聞こえたが無視しよう・

作「んで次。」

八「まだあんのかよ！？」

作「あと2つだな。んで次だが、マテリアルルートだ。」

八「マテリアルってゲームに出てきたあの3人か？」

作「そ、んでその中から作者が気に入ってる1人をヒロインにするわけよ。」

ちなみにゲームでは消えちゃうけど、この話の中だと消えないように方法は考えている。」

多少無茶矛盾はあるがな。」

八「そうか。んで最後は？」

作「オリキヤルルートだ。これはまだ考えが纏まってないし、

女性のオリキヤラを三月以外に考えていないから一番可能性が

低い。」

ハ「いや考えなくていいよ。むしろそのルートだと【リリカルなのは】でやる意味が薄れるしさ。」

それにしても……」

ここでハガルは重大なことに気付いた。それは……

ハ「ルートの半分が人じゃない、しかも1つは男ってどうなの？」

作「いんでね？それにザフィーラだと男の友情で書くようになるし。」

ハ「でも助かったことが1つだけある。」

作「何？」

ハ「ハーレムルートがないこと！！正直それはきつい……！」

ハガル、それはもう切実に訴えている。涙を流し拳を握りながら。

しかしそこで作者がとんでもないことを言う。

作「いや、ハーレムルートの構想はあったよ。」

それを聞いたハガルは真っ白になり、砕け散った。

作「いやね、戦闘機人ルートつつのを人物設定だけのときに考えてたのよ。

ただそれだとなんか納得いかいしシツクリなくてさ。だから没にした。

まあ戦闘機人たちとも仲良くなるけどね。」

ハ「……………んじゃハーレムルートはないんだよね!？」

作「お、復活した。だから最初から言ってるだろ。ハーレムルートはしないって。

……………ま、俺の気が変わったらわからんけどな。

(小声)「

ハガル、ハーレムルートが無いということに喜んでいて最後の言葉を聞き逃している。

重要なのだがここはそっとしておこう。

作「んで、最後の話題となるわけだが。」

ハ「おう」

かなり上機嫌なハガル。余程ハーレムで無いのがうれしいのだろう。

作「・・・最後はお前の魔法についてだ。」

ハ「そっぴゃ本編の俺ってまだ飛行魔法、それも暴走状態でだけどさ、それしか使ってないよね。」

作「ああ。ちなみにお前が魔法をちゃんと使用する描写があるのは6話以降になるだろう。」

ハ「まだなのかよ!?!」

作「いやゝ、色々考えて書いてたらそうなったんだよ。だけそ安心しろ。」

お前の使う魔法、かなり強力なものが多いぞ。」

ハ「そうなんだ。ま、その辺はまかせるよ。ただ余りチートすぎるのは止めてほしいかな。」

作「それは無理だ。設定の初期段階から、ずっと消していない能力があるんだがそれはチートと

言っても過言じゃない能力だ。」

ハ「手遅れだったのか・・・」

作「気にするな。それよりも次回5話でお前のパートナーが出てくるぞ。」

ハ「パートナーって、デバイス?」

作「そうだ。それも楽しみにしておけ。んじゃ、そろそろ話を切り上げようかね。」

ハ「そうだね。気付いたら3500字を突破してるし。」

作・ハ「それでは皆様。今後とも【とある水使いの物語】をよろしくお願いします。」

作「ではでは。」

<暗転>

## 第5話『再会と出会い』（前書き）

作者「さて、番外編でもいったように今回ハガルのパートナーが出てくるぞ。」

ハガル「やっとか。んで俺が魔法使うのって」

作者「まだ先だ。しかも8話以降延期した。」

ハガル「……マジかよ。」

作者「んじゃ、とある水使いの物語」 第5話いってみよう。」

## 第5話『再会と出会い』

それは小さな願いでした。

微笑を交し合う、そっと触れ合うこと。

だけど、私を迎えたのは戦いの時。

奪われてしまった力。

傷ついてしまった魔道の杖たち。

まだはつきり掴めない戦うべき相手と、自分達のできること。

敵か味方かわからない、傷ついた男の子。

「ただ、それでも私達は……」

「12月2日 PM 8:45 時空管理局本局」

「検査の結果、なのはちゃんの怪我はたいしたことないようです。ただ、魔導士の魔力の源、リンカーコアが異常に小さくなっているんです。」

「そう……。じゃあやっぱり、一連の事件と同じ流れね。」

「はい。間違いないみたいです。ただ……」

「問題はあの子。」

「あの男の子、ね。」

「はい。左腕と右肋骨を骨折、数箇所筋肉の断裂、胸の切傷がひどくさつき治療が終わったところです。」

あの男の子。話によると巻き込まれたらしい。

なのはちゃんを犯人から助けようしてたみたい。

でもフェイトちゃんにも攻撃を仕掛けてるんだよね。

「こっちは重症ね。」

魔力を使ってたみたいだから簡易検査を試してみた。

そうしたらなのはちゃん達ほどではないにしろ、EーS級の魔力量を持っていた。

でもリンカーコアが少し変だったのが気になるなあ。

「目が覚めたら少しお話を聞かなければいけないわね。」

「そうですね。これだけのことが同時に起こると休暇は延期ですね。流れるに、うちの担当になっちゃいそうですし。」

「仕方ないは、そういうお仕事なもの。」

「あは・・・」

やっぱりね・・・

艦長も苦笑いしてる。

どっちら同じ気持ちらしい。

く同時刻 ？？？

この力・・・新しい主なのか？

今の世に私を扱える資質を持つものがいようとは・・・

くとある水使いの物語

第5話 『再会と出会い』

今私はベットの上で、お医者さんから何かの検査を受けてます。

目が覚めたら知らない部屋で寝ていたからびっくりしました。

「うん。さすが若いね。もうリンカーコアの回復が始まっている。ただ、しばらくは魔法がほとんど使えないから気をつけるんだよ。」

「あ、はい。ありがとうございます!」

よかった。魔法が使えなくなるわけじゃないんだ。

ん？

「ああ、ハラOWN執務官。ちょっとよろしいでしょうか。」

「はい。なんでしょう?」

「こちらへ。」

「何か?」

「実は例の子……」

そのままクロノ君とお医者さんは出て行って、部屋に私とフェイトちゃんだけになった。

何を話せばいいんだろう・・・話したいことはいっぱいあったはずなのに。

なんでだろう。出てこない。

「フェイトちゃん・・・」

「なのは・・・」

「あ、あの・・・ごめんね、せつかくの再開がこんなで。怪我、大丈夫？」

「あ、ううん。こんなの全然・・・」

怪我した左手を後ろに隠しながらいうフェイトちゃん。

「それよりなのはが。」

「私も平気。フェイトちゃん達のおかげだよ。元気、元気。」

ちょっとおどけながら言ってみる。

「やはは、身体はまだ力が入らないんだけどね。」

「フェイトちゃん。フェイトちゃん？」

様子少しおかしい・・・どうしたんだろう？

ベットから降りようとしたけど力が入らない。

うあ・・・

「あ。なのは！」

今の私はフェイトちゃんにさせられて何とか立ててる状態。

「あははは・・・。ごめんね、まだちょっとフラフラ。」

「……………うん。」

「助けてくれてありがとう、フエイトちゃん。それから、また会えてすごくうれしいよ。」

これは私の本心からの気持ち。

皆とまた会えて、本当にうれしい。

「うん。私も、なのはに会えてうれしい。」

病室から出た僕は、医療スタッフから例の子、巻き込まれ大怪我を負った男の子について聞いていた。

渡されたカルテを見ると、怪我の酷さが相当だとわかった。

「傷口からの感染症などの心配はありません。ただ、左腕の骨折がひどく管理局の施設を利用したとして完治まで最短でも2週間、自然療養で1ヶ月半ほどかかる見込みです。現在は麻酔の効果で眠っています。」

「そうですね。それで彼はどれぐ「先生!!」ん？」

僕の質問はあわてて駆けつけた女性スタッフに遮られた。

「どうしたんだ、そんな慌てて。」

「あ、ハラOWN執務官もいらしたのですね。ちょうどよかった。先生、例のアースラから運ばれた患者が部屋にいないんです!!」

「「なっ!?!」」

麻酔で寝ているはずの、件の少年が見当たらない。

僕は絶句してしまった。

〔PM 8:45 八ガルの病室〕

”・・・ター・・・マ・ター”

なんだこの声・・・

その奇妙な声で起きた俺はここがどこだかわからなかった。

「知らない天井・・・」

んなこと言ってる場合かよ。

・・・っつうー!!とにかくここはどこなんだ??

体中が痛い。多分天駆の反動だなあ。

とりあえず今わかる範囲、自分の身体の状態を見ることにした。

左腕はギブスをはめられている。

胸にはなんか切傷、刀傷の痕みたいたいのがついているっぽい。

包帯で見えないんだけどね。

こんな傷いつ受けた？

「治療されてるってことはここは病院か何かの医療施設かな？」

でも部屋にある医療機器に俺は見覚えが無い。

少なくとも資料で観た事のある医療機器は無いと言っても過言ではない。

なにこじこじ？

”マスター。私の声が聞こえますか？”

「うわ!？」

突然頭に声が響いた。

”マスター？もしかして魔法が扱えないのですか？”

「なんだなんだ!？」

”マスター。今から私を意識して心で会話してください。思念通話という会話魔法です。”

「ん？あ、うん。」

われながら思うが結構冷静だよね、俺。

”・・・えっと、聞こえますか？”

”大丈夫です。飲み込みが早くて助かります。さすが、私のマスター

ーとなりえる方です。”

どうやら思念通話、だっけ？はできているらしい。

” どの誰だかわからないけど、お聞きしたいことがあるんです。”

” 私が答えられる範囲でしたら”

” ありがとうございます。……まずあなたの名前は？あとここってどこですか？”

” 私の名はネーベルリッター。ここは時空管理局本局、ミッドチルダ式魔導士達が多く勤める時空世界の治安維持機関です。”

ドイツ語で霧の騎士、か。

” え？えっと……”

” 申し訳ありません。わかり易く言つと警察と裁判所が複合した組織、と思ってもらつてかまいません。”

” あ、ごめんなさい。俺魔法のこと何も知らないから。”

” おきになさらず。それならあなたが魔法を使えないことも納得いきます。”

なんだろ。フォローされてるのかな？

” 今からあなたの元へ跳びます。”

え？跳ぶ？

突然足元に三角形の頂点に円が描かれた魔方陣、ザフィーラさんが魔法を使うときに出ていたのと同じのが現れた。

そして光の中から緑色の宝石がついた銀の羽状のアクセサリが現れた。

お初にお目にかかります、マスター。

「……………」

マスター？

開いた口が塞がらなかった。

だって人だと思ったら物だもん！！

「え、えっと……初めまして。俺、海波ハガルって言います。」

思わず自己紹介しちゃったよ。

「あの、えっと……さっきから俺のこと、マスターって呼んでるけどなんで？あと魔法のことも少し教えてもらえると助かり、ます。」

わかりました。それでは……

俺は目の前に浮かんでいるネーベルから聞きたいことを聞いた。

あ、敬語もいらなくて、むしろ普通に話してくれってさ。

ちなみにネーベルって呼んでいいと言われた。

なんでもマスターと認めた相手にだけそう呼ぶことを許しているらしい。

話を戻そう。ネーベルからなんで俺をマスターと呼ぶか、魔法のこと、そしてネーベルがどういう存在か。

あと時空管理局についてのことも、これはネーベルの主観と客観的イメージの両方を教えてもらった。

正直……ちゃんとした組織なの？って思っちゃった。

「ありがとう。なんとというか、ネーベルたちのいう魔法が高度なプログラムや科学でできているっていうのでなんとなく納得できた。昔、高度な科学は魔法とやら変わらない、って本で読んだことがあるから。」

その作者は面白いことを書いていますね。

「そうだね、俺もそう思う。まさか現実がそうだとは思ってもよらなかったけど。んでさ。魔法のことは知らない人には言わない方がいいんだよね?」

そうですね。いつの世も、理解されない異質なものは排除される危険性を持ちますので。親しい者には時期を見て伝えるのが妥当かと。

「わかった。」

ん? 時期……時間……時間……

あ!!!!!!

「ネーベル! 今何時かわかる?」

地球時間で午後9時ちょうどです。

やばい、予定を1時間も過ぎてる。

またお婆ちゃんに怒られる・・・やばい。

帰ろうにもこの格好じゃあ帰れないし。

ちなみに今の俺の服装は、典型的な病人服。

「どっしりどっしり・・・」

転送装置の有る部屋に移動しますか？

「ん？わかるの？たしか君はずっと封印されてたはずじゃ？」

簡単です。ハッキングしました。もちろん跡は残していません。

・・・なんかとんでもないこと聞いた気がする・・・

と、とにかくその転送装置のところに行こうか。

そうですね。マスター、短距離転送を行いますか？それとも徒歩

にしますか？徒歩ですと1時間ほど掛かりますが。

ん〜・・・どうしようかな。身体も痛い・・・ん？

「身体が、痛くない？なんでだ？つつ！やっぱり痛いか。」

オートヒールを発動しています。魔力はマスターから勝手に使用していますが、余計だったでしょうか？

なんというか、気が利く子・・・いや人（？）だな。

「ん〜ん。ありがとう。んじゃ、まずは服を着替えてその後転送室にいこうか!」

はい、我が主。

まずは服を着替えるためナースセンター（？）に向かうことにした。

あとになって思う、この判断は間違이었다と。

まさかあんな騒動になるとは、この時俺は思いもしなかった。

~~~~~

## 第5話『再会と出会い』（後書き）

作者「以上が第5話だ。」

ハガル「よかった・・・俺生きてた。」

ハガル、本当にうれしそうだ。

作者「んで、状態が状態だったから一時的に管理局で保護・治療することになった。」

ハガル「それで管理局に保管されてたネーベルと出会うわけね。」

作者「そういうことだ。」

ネーベル（以下霧）「それでは今回は私の紹介をするのでしょうか？」

作者・ハガル「うお!？」

霧「驚かないください。」

いきなり現れたのだ。驚くなど言う方が無理である。

作者「あゝ……ネーベルに関しては今回紹介しないでおこうと思う。」

ハガル・霧「なぜ？」

作者「ネーベルには秘密、というか色んな機能があるからね。」

霧「そうですか。」

ハガル「んじゃ今回はこれで終わりだね。」

霧「次回をお楽しみに。」

<暗転>

## 第6話『誓い、新しい友達』（前書き）

人力車（以下人）「本編第6話、これは原作で言うところの3話途中からだ。」

ハガル（以下ハ）「あ、そっちに変えたのか、作者よ。」

人「ああ、なんかこっちの方がいい気がしてな。んで本題だが。

今回は初っ端やってくれます、お前が。」

ハ「え？俺!？」

人「だってそうだよ。普通重症の患者が部屋から居なくなったら大事だし。」

ハ「そ、そうだった……。」

人「んじゃま、さつさと本編始めようか。」

ハ「そうだな……。とある水使いの物語」 第6話始まりです。」

## 第6話『誓い、新しい友達』

まさかこんなことになるなんて。

件の少年がいなくなったと言う知らせと同時に、保管室にあった準ロストログア指定のデバイスまでロストするなんて。

しかも転移したらしく、転移先が件の少年の部屋らしくい、それで僕に連絡があった。

「母さ、艦長。連絡は来ましたか!？」

『ええ、話は聞いたわ。しかも準ロストログア指定のデバイスが彼の元へいくなんて……。とにかく彼を最優先で保護しデバイスを回収しなさい!』

「勿論そのつもりです!」

『クロノ君!サーチかけてみたけど駄目だ。ぜんぜんひっかからないよ。』

「わかったよ、エイミー。このままサーチを続けてくれ。何か会ったらまた連絡を頼む。」

『わかったよ。クロノ君も気をつけて。』

くそ！内心あせりながら病棟を走りながら探すも一向に見当たらない。

可能性は0じゃなかった。そう、彼がく闇の書との関係者であることは考えられたはずだ。

そんな焦りが最高潮に達しようとした時だった。

「あの、すみません。ナースセンターにはどう行けばいいんでしょうか？」

「すみません。いままで、こんで……」

振り向くとそこには、問題の少年が首に例のデバイスを下げて立っていたので……

「え！？ちよっ！！いきなり何するんですか！？」

問答無用でバインドをしてやった。

「全スタッフに報告。目標の少年とデバイスを確保。これより取調べを行う。」

まったく、いきなりいなくなったと思えばすぐ目の前に・・・なんだというんだ。

〜とある水使いの物語〜

第6話『誓い、新しい友達』

私達はクロノ君に連れられて、とてもえらい人の所へ来ています。

なんでもクロノ君の先生だった人みたいです。

それよりも気になる子が一人。

「あははは、こんばんわ高町さん。身体はもう大丈夫？」

その子はクロノ君にバインドで雁字搦めに拘束されています。

にやははは。さっきの騒ぎの時にいったい何があったの？

どうしよう・・・ネーベルに手伝ってもらえばこのバインド、だっ  
けか？

これの解除はすぐっぽい。

むしろ吸収できるんじゃないかな？

「君が先ほどの騒動の中心人物かい。身体の方はもう大丈夫なのかな？」

すごい人の良さそうなお爺さんが話しかけてきた。

服装からして偉い人なのかな？

「ええ、まあ。まだ身体は痛いんですけど、なんとか。あと詳しい話をお願いします。ネーベルから魔法関連の話は聞いているので大丈夫なんですけど、それ以外の、俺が巻き込まれた事件についてとか話せる範囲で教えてください。」

ん？なんか驚いているな。

「ネーベルといったね？それはもしかして君が首につけているデバイスのことかい？」

「ええそうですよ。」

なんだろう？そんなに不思議なのかな？

”マスター、それは私が適正者以外には反応しなかったからです。いかなる信号も遮断していたので。”

なるほどね……だからこの黒い人、クロノだっけ？も驚いたんだ。

納得。

「それでは本題に移ってもいいかな？今後のことに関わるのでね。」

俺は問題ないんだけど……

そんな俺の意思とは関係なく話は進んでいった。

なお、途中俺がバインドを解除したのでまたクロノが驚いてた。

高町さんと俺の出身世界と、グラムさんの出身世界が一緒という  
事実が発覚したり。

魔法との出会い方や友達との付き合いなど、あと俺の処遇について  
もかな。

「それでハガル君、君の・・・いや君達の処遇についてだが。」

「はい。」

どうなるんだろう？ネーベルとは離れたくないんだよ・・・

せつかく出会えたし、ネーベルがまた封印保管されるのもなんか嫌  
だし。

「まずハガル君、君はこのままなのはさん達とともに戻ってもらっ  
てかまわない。」

だよ。ここで帰さないと言われてたら、俺暴れるよ……

「次にネーベルリッターについてだが……」

そう、ここからが本題。

なにせネーベルは準ロストログアっていう指定をされていたらしく、危険物扱いされている。

それを俺がそのままもって帰るとなると、やっぱり……ね……

問題あるわけですよ。

「このまま君のデバイス、という形にしようと思うのだがどうだろう？ 勿論条件付だがね。」

「提督！！それはあまりに軽率なのではありませんか？」

「話に聞けば、ネーベルリッターは元来適正者がいないかぎり自身

で封印状態になるらしいではないか。それにどうやら危険性も無い、言い方は悪いが古いだだけのデバイスではないか。」

まあ確かにそうですね。古い、と言うことに関しても反論することはありません。事実私が製造されたのは古代ベルカ、聖王が誕生するよりも遥かに過去なのですから。

んじゃあ、ネーベルはこのまま俺の相棒ってことかな？

いいのか？俺はうれしいからいいけど。

それよりも気になるのが条件だな。

「それで、条件っていうのはなんですか？」

「条件は2つ。1つはフェイト君に言ったのと同じこと。2つ目は今回の事件中、クロノの部隊、アースラに協力すること。以上の2つを守ってもらえるなら、君にネーベルリッターを託そう。」

「やはりご存知でしたか。」

「ああ……言えた義理ではないが、無理はするなよ。」

「わかっています。」

クロノが話をしている間にさっさと移動することにした。

俺には関係ないことっぽいしね。

それよりも俺の服だよ、服。

高町さんと、たしかハラオウンさんだけ、俺の服の場所知らない？

173

「うーん、私もさっきまで病室だったし、そのあとデバイスルーム  
にいつてすぐここだったから、わからないかな。」

「ごめん、私もわからない。もしかしたらエイミィが知ってるかも。」

えっと・・・なんでそんなに警戒しているのかな？

「俺、何かしました？」

「……覚えてないの？」

なんか驚いてるけど……覚えてない……あっ！！

「もしかしてさっきの戦闘？俺、途中から記憶飛んで覚えてないんですけど。」

うん、マジで。

たぶんキレたんだろうね。

だから覚えてない。

「………そっか、バルディッシュ達が戻ってきたら記録映像を見せてあげる。友達を、なのはを守ってくれたことに代わりないからこれ以上は何も言わないよ。」

そか。友達は大切だからね。

「あのさ、よかつたら友達になりませんか、高町さんも。」

二人とも顔を見合わせて。

「うん。」

「改めまして、海波ハガルです。よろしくね。」

突然失礼します。ネーベルリッターといいます。主共々よろしく  
願います。

「高町なのはです。よろしく。」

「フェイト・テストロッサ、よろしくね。」

さて、軽い自己紹介もすんだことだし・・・

「・・・とじろで」

「なに（かな）？」

「エイミィさんってどこ？服着替えたいんだ。」

そんなわけで移動開始。

主たちが風呂へと向かった後、その場に残った私とザフィーラは今日のことについて話をしていた。

「あの場に居た黒い魔導士、フェイト・テスタロッサとかいったな。」

「ああ、澄んだ太刀筋だった。良い師に恵まれたのだろうな。」

そう、今回のことでわかったことを互いに確認しているところだ。

テストロツサ、ミッドチルダ式を使いながらも戦闘方法は我等ベルカ式に近く、

高速戦闘を中心としたヒットアンドウェイを基本としているように思えた。

それゆえにどう対処すればいいかある程度はわかる。

が、そもいかな存在が、イレギュラーが今回確認された。

「それよりもザフィーラ、あれが以前言っていた少年か？」

「そうだ。我とヴィータが以前遭遇した少年、名をハガルという。信じられんだろうが魔法のことは知らぬらしい。」

「なっ！」

私は疑うしかなかった。

あれほどの力を見せていながら魔法のことを知らないとは……

しかし最後に見せたあれはいつたい？

「そこは我にもわからぬ。飛行魔法を無意識に使っていたのはおそらく一時的な魔力暴走が原因だろう。それよりも問題なのはハガルが使う技だ。我の盾を魔力を使わず、力のみで幾度となく破壊している。」

「お前の盾を力のみで、か。」

ザフィーラの盾は我等ヴォルケンリッターの中でもっとも強固。

それを力だけで破壊することなど。

しかも主と年もさほど変わらぬ用に見える。

「……いや、もしかしたら技術なのかもしれないな。おそらく筋力は高校生レベルだろう。しかし力の流れ、扱い方が巧すぎる。」

「確かに……あの年にしては巧すぎる。……なんにせよ、今後関わってくる可能性はないともいえないな。」

現状である能力の高さ。

もし魔法の扱いを覚えたなら……注意する必要があるな。

そう……主を守るために。

全ては主のために。

「我等ヴォルケンリッター……騎士の誇りにかけて。」

くっくく

## 第6話『誓い、新しい友達』（後書き）

人「以上が本編第6話だ。」

ハ「なんというか……迷惑かけてすいませんでした!!」

それはもう見事な土下座をするハガル。やはり迷惑をかけたことは反省しているようだ。

ネーベル（以下霧）「それに関しては私も同罪です。」

人「たしかにそうだな。ジャミングかけてハガルの居場所をわからなくしてたんだから。」

霧「昔の癖で、つい……」

ハ（昔の癖って……なにがあっただ？）

人「それもおいおい紹介していくとして。」

この話からハガルが本格的に事件に関わっていくわけだ。」

ハ「そうみただな。そういや、サブタイトルの誓いってグラム提督との?」

人「それもあるが最後にシグナムが言っていた、

騎士の誇りに改めて誓いを立てた、って意味もある。」

霧「そして新しい友達がフェイト殿、というわけですね。」

人「そういうこと。あと今回もネーベルの紹介はなしだ。」

ハ「今回もかよ。でも少しずつだけどわかってきたね。準ロストロギア、だっけ？」

人「ああ、俺が勝手に定義してつけたんだけだな。」

ハ「ちなみにその定義つつの聞いてもいい？」

人「かまわん。まずロストロギアだが、これは簡単に言えば、

『現代では再現不可能なロストテクノロジーの塊』ってわけだ。

」

霧「正確ではありませんが確かにそうですね。

詳しく知りたい方はウィキ ディアなどをご利用ください。」

人「んで、準ロストロギアつつうのは『あと数年したら再現できる技術』もしくは、

『理論や原理はわかっているが再現不能』という物のことだ。」

ハ「なるほどね、だから『準』なんだ。」

霧「私もデバイスということはわかっていたのと、

あまりにも自己封印が強力だったため、当時の研究員が諦めたのが理由です。」

ハ「なんだその理由……」

人「気にするな。管理局つつつても全知全能じゃないんだからな。」

八「たしかに。」

人「それじゃあ今回はこの辺でやるかな。」

霧「それでは皆様、次回をお楽しみに。」

<暗転>

設定資料（6話まで）（前書き）

今回は設定資料と雑談のみとなります。

これを見ていると物語が少しだけ読みやすくなると思います。

## 設定資料（6話まで）

人力車（以下人）「今回はこの小説に出てくるオリジナルの設定を紹介しようと思う。」

ハガル（以下ハ）「それはいいね。毎回小分けにしていると読者の方も見難いだろうしね。」

人「ああ。ま、これからもオリジナル設定が出るたびに後書きで紹介していくつもりだ。

んで数がある程度まで溜まったら資料集としてまとめようと思う。」

ハ「なるほどね。んで、今回はどこまで？」

人「一応6話までにしようと思う。まあ区切りとしては微妙だが。それでは設定紹介！」

名前：海波 うみなみ ハガル

性別：男

年齢：10歳

生年月日：11月6日

人種：地球人 日本人と北欧人のハーフ

身長：132cm

体重：身長に見合った程度

血液型：B

出身地：第97管理外世界（現地惑星名称「地球」）日本・海鳴

魔法術式：ベルカ式？

魔導師ランク：？（なのはよりは低い）

魔力光色：？

好き、得意なこと：物作り（ジャンルは問わない）

好きな物：干し肉

嫌い、苦手なこと：人の死

嫌い、苦手な物：ゴーヤ

使用デバイス：ネーベルリッター

詳細：

とある水使いの物語の主人公。

地球育ちで黒髪碧眼の少年。

顔立ちは上の下ぐらいで微妙。

両利き。

髪型はMH2Gのレウスレイヤーがデフォルト。

なのは達の同級生でお互いに顔を知っている程度の付き合い。

アリサとは幼馴染。

人見知りをしない性格だが親しい人以外には自身の情報を不用意に与えることは無い。

両親は事故で他界しており、祖母と二人暮らし。

その祖母に、目上や女性には敬語を使えと教え込まれている。

両親の影響で医療系の道に進もうと考えている。

医療系の本を読んでいる小学生として図書館では少し有名である。運動神経はかなり良く、祖母から清心流古武術を叩き込まれている。

肉体のスペックが年齢と不釣り合いなほど高い。

年齢も関係しているが、恋愛関係には疎い。

〓能力〓

文武両道で学力はアリサ以上。

医療知識レアスキル独学で習得中。（知識のみ）

稀少技能、

を保有。

特殊スキル、フラグメーカー（中）を常時発動。  
霊感・霊力有り。

名前：海波うみなみ 三月みづき

性別：女

年齢：60歳

生年月日：3月3日

人種：日本人

身長：166cm

体重： kg

血液型：O

出身地：日本・群馬

所属：帝護神一派・清心覇軍流戦場古武術

好き、得意なこと：生け花

好きな物：孫（ハガル）、和食

嫌い、苦手なこと：衰え

嫌い、苦手な物：特に無い

詳細：

ハガル祖母で育ての親。

躰に厳しいがそれは全てハガルを思つてのこと。

現代に存在する「帝護神一派・清心覇軍流戦場古武術」最後の師範を務める。

「清心流」の師範でもあるためハガルにとって特別な存在。

生け花教室を開いておりそこで講師をしている。

A's 編終了までは本作最強の予定。

〓能力〓

「清心流」によるチート戦闘力。

生け花の腕は老舗の料亭や最高級ホテルから頼まれるほど。

霊感・霊力はあるがハガルより低い。

名前：帝護神一派・清心霸軍流戰場古武術  
系統：古武術

詳細：  
通称「清心流」。

祖母海波の家系で代々受け継がれてきた戦場技法。  
資料は少なくわかる限りでも10世紀以上もの歴史を持ち、  
その時代に合わせ様々な技術を取り入れている。  
多くの技が口伝であるため失われた技術も多い。  
暗殺術や隠密行動などの裏の技術も多く時代によっては重宝され  
てた。

名前：砕さい

系統：帝護神一派・清心霸軍流戰場古武術

威力：C〽AAA

射程：F

詳細：

攻撃対象を「面」で破碎する攻撃法。

未熟者は攻撃時の衝撃で腕や脚を痛めることが多い。

熟練者となると武器を使用しても扱える。

名前：連楔碎れんけつさい

系統：帝護神一派・清心霸軍流戰場古武術

威力：A〽S+

射程：F

詳細：

「碎」の発展技。

一撃目で楔を打ち込み寸分違わぬ場所に二撃目を打ち込む。

それにより衝撃を内部深くに衝撃を伝え内側から破壊する。

隙が生じ易く打点がずれ易いため動く物に対してはかなりの練度  
が必要となる。

名前：連駆れんく

系統：帝護神一派・清心霸軍流戰場古武術

詳細：

各関節を連動させることで、力の流れを無駄なく発揮する「清心流」の基礎体術。

これを身体に覚えさせなければ、多くの「清心流」の技を使えない。

打撃の強化・移動方の効率化・斬撃の高速化など様々なことに応用される。

名前：天駆てんく

系統：帝護神一派・清心霸軍流戰場古武術

詳細：

「清心流」の高速移動術。

「御神流」の「神速」と原理や理屈はほぼ同じ。

脳のリミッターを一時的に外し、人間の限界に近づく。

使用中は、視界がモノクロ状態になり音が聞こえなくなる。

使用の反動が大きく、筋肉を傷めるだけでなく脳にも負担をかけてしまう。

人「とまあ、今回はここまで。」

ハ「あれ？ネーベルは紹介しないの？」

ネーベル（以下霧）「マスター、私は諸事情で次回の設定資料になります。」

人「おう、来てくれたか。よろしくな。」

霧「こちらこそよろしく申し上げます。」

ハ「諸事情・・・ね。どうせ作者の都合でしょ？」

人「そうだ。というかだな、ネーベルに関しては7話以降のほうが何かと都合がいいからだ。」

霧「私にはいくつも能力が隠されていますしね。」

人「Sts編までいくと結構すごいことになっているぞ。」

さすが準ロストログリア指定されるだけはある。」

ハ「俺扱いきれるの？なんか不安になってきた。」

霧「大丈夫ですよ。マスターは私のマスターとして、十分過ぎるほどの資質をお持ちなのですから。」

ハ「ありがとう、ネーベル。俺頑張るよ！」

人「うんうん。二人が仲良くしてくれて俺はうれしいよ。しかし、アレだ。」

7話以降でわかることだが、お前相当苦労するぞ。魔法に関してもだし、人間関係に関しても。」

ハ「・・・そこまでかよ。」

人「仮にも主人公だからな。その辺は受け入れろ。」

八「覚悟しておく。」

霧「全力でサポートします。」

人「んでは、今回の設定紹介はここで終了しようかな。」

霧「最後に。感想、ダメだし等ありましたら随時受け付けます。

その方が作者はより気合を入れると思います。」

人・八・霧「それでは皆様。今後とも【とある水使いの物語】をよろしく願います。」

第7話『新情報、意外な再会』（前書き）

人「さあ第7話だ。ちなみに原作で言うところ話後半に当たるところからだな。」

ハ「またずいぶんとゆっくり進むね。」

人「この辺はちょっと丁寧に書きたかったからな。」

一応導入部分なわけだからな。」

ハ「それじゃあさっそく本編いくのか？」

人「ああ。それでは」

霧「〜とある水使いの物語」 第7話ミッションスタート！」

人・ハ「いきなり出てきてとられたー！ー！ー！」

## 第7話『新情報、意外な再会』

現在俺は高町とエイミィさんの二人の後ろをついて行く形で移動中。

高町からは名前で呼ぶように言われた、あとテッサからも。

ま、高町には苗字で呼ぶつてことに納得してもらったけね・・・一応。

ちなみにテッサつてのはテストロッサのこと。

高町を苗字で呼ぶのに、テッサを名前で呼ぶのも悪い気がしたし、テストロッサが言い難いから愛称で呼ぶことにした。

ただテッサは顔赤くするし、高町はすごい不機嫌になるし・・・  
なんでだよ。

敬語も止めてくれてって言われた。友達だしかもう普通に話すつてことは伝えた。

俺が敬語で話すのつて、目上の人・女性・初対面の人・あまり親しくない人の4パターンだから。

んで前の二人はエイミィさんの上司でありクロノの母親であるリン  
デイさんとテッサの養子縁組の話をしている。

この辺の事情はよくわからないので口出ししないでおう。

話からするにプレシアって人と関係があるみたいだけど・・・なん  
か、複雑そう・・・

まっ、テッサが話すようになるまで待ちますかな。

「ハガル君はどう思うっ？」

「うえ？」

思わず変な声で返事しちゃったよ。

ってえかなんで俺に振るのさ、エイミィさん！

「あゝ・・・その、詳しいことはわからないんですけど。」

「うん。」

「お互いが納得して幸せになれるんなら良いんじゃないでしょうか？」

「そか。」

うん、きっとそうだ。

互いが幸せになれるなら、養子縁組を組むのも別に悪いことじゃない。

「そうになると、クロノ君お兄ちゃんですね、フェイトちゃんの。」

「そうそう。でも結構気が合うみたいだし、案外いい感じの兄弟かも。」

んん？

ちょっと気になることが・・・

二人は普通に笑ってるけど俺はちと気になった。

「あの一。」

「ん？何かな？」

「クロノって俺達と同年ですよね？お兄ちゃんってことはクロノの方が早く生まれたってことですか？」

そういつた瞬間二人が固まった。

なんかすげえ苦笑い浮かべてる。

・・・なんかまずいこと聞いたみたいだな。

マスター、クロノ執務官は14歳です。つまりあなたよりも4歳年上になり、学年で言うならば5つ上、つまり中学3年生になります。

それを聞いた瞬間俺も固まった。

「……ああ、つまり、あれだ。あいつ、いやあの人は発育が遅いんですね。」

あは、あははは……

きつと触れてはいけない領域なんだろうな。

「あはははは……ハガル君、クロノ君にそのことは絶対言わないでね。本人は結構気にしてるから。」

ああ、だろうね。

俺より年上なのにあの身長は・・・

まあああいう奴ほど後々伸びるらしいし気にせんでもいいと思うけどね。

くとある水使いの物語

第7話『新情報、意外な再会』

現在今回の事件の今後についてのアースラのスタッフは会議中。

その場になんで俺が居るんだろう？

”マスターちゃんと話を聞きましょう。一応私達、いえマスターは

関係しているのですから。”

”いや、ちゃんと聞いてるよ。ただなんでだろう？って疑問に思っただけ。”

俺とネーベルがそんなやり取りをしている間話は進んでいった。

そして・・・

「ちなみに司令部は、なのはさんとハガルさんの保護を兼ねてなのはさんの家のすぐ近くになりまーす。」

「え？」

「「あ!？」」「」

「「うわあああ!」」

皆、特に高町は嬉しそうだな・・・でも。

「「・・・やっぱりか。」」

そうだろうと思ったよ。

だってねえ

「お、なんかわかってたって感じだね、ハガル君。」

「エイミーさん、そりゃそうですよ。だって魔法が使えらるとはいえ一般人の高町、そして今回のことで初めて魔法の存在を知った俺。聞くところによると俺もそこそこだし、高町なんて管理局でも稀な魔力量なんですよ。一度襲撃に会ってるし、闇の書でしたっけ？あれの性質上また狙われるかもしれない。それに地球周辺で事件が多く起きている。だったら高町、もしくは俺の家の近くに保護を兼ねて司令部を置くのは当たり前というか妥当ですよ。それに……」

「「それに？」」

う……エイミーさんとリンディさんがすごい笑顔で俺を見ながら聞いてきた。

「それに、テッサのためですよね？察するにテッサってこっちの学校には行ったことないみたいだし、せつかく高町とも友達になれた。それをまた事件だからといって引き離すのも、ね。」

うわああ、リンディさんがすげえいい笑顔。

「そう、ハガルさんのいい通りよ。でもよくわかったわね？」

だってさ、リンディさんの人柄を聞く限りそれぐらいしそっだし。

それにさ・・・

「そうなるって俺がうれいんですよ。せつかく友達が増えたわけですしね。」

「え？あ、その・・・ありがとう。」

テッサが顔を赤くして反応してる。

なんだろう？俺なんか特別なこと言ったか？

「あらあら。それにしてもその考察力、うちにほしいわね。どう、ハガルさん。管理局に入ってみる気はない？」

「お断りします。」

「これまた即答だね。」

エイミーさん、当たり前だよ。

俺にはやりたいこと、いやなりたいものがあるからね。

それにさ。

「管理局のことはよく知りません。だから入るなら有る程度下調べをしてからにさせていただきます。」

「あら、意外と慎重なのね。」

「時には大胆に、時には慎重に。それを使い分けなければ戦場では生き残れませんからね。ま、祖母の受け売りですけど。」

正直まだ管理局は信用しきってない。

ネーベルの話もあるから慎重に行きたいよ。

とにかく管理局にはいるのは今回は無しということだ。

ただ今回の事件については可能な限り協力しますよ。

グレாம்提督との約束もあるしね。

そして次の日……朝からブルーです。

理由は簡単。

お婆ちゃんにめっちゃ怒られたから。

2時間説教とか・・・しかも正座で。

今はアースラメンバーの引っ越し作業を手伝ってます。

「エイミーさん、これどこに置けばいいんです?」

「ありがとう、それは向うの部屋に置いてもらえるかな。」

「あいさー。」

「でもいいの?」

「なにがです?」

荷物や機材の整理をしながら俺とエイミーさんは色々と話をしていった。

「いやさ、二人と話さなくていいのかな、って。」

ああそのことか。

なんか二人で盛り上がってるし。

それよりも気になることが俺にはあるんだけど。

………なんだこのフェレットもどきと赤い子犬、いや狼？

とにかくなんだこの二匹は？

「ん、ユーノ君とアルフはこっちではその姿か。」

え！？

ユーノにアルフさんだって！？

確かにお二人の魔力反応が感じられます。変身魔法ですか。

「新形態、子犬フォーム!!!」

「なのはやフェイトの友達の前ではこっちの姿でないと。」

「君らも色々大変だね。」

「なんだ、その、頑張れユーノ。」

俺は苦笑いしかできないよ。

「うわー！アルフ、どうしたのその姿？」

「ユーノ君もフェレットモード久しぶりー。」

ああ、なんかめっちゃスキンシップしてるけど、あれって元はユーノやアルフさんだろ。

アルフさんは女性だしフェイトの使い魔っていうのだけ？

だから、まあいいとして……ユーノって人間でしょ。

しかも男……いくら今の外見がフェレットだからって。

ユーノ、お前いつか痛い目見るぞ。

「あゝ、俺は手伝いの続きしてくるよ。って、クロノさんどうしたんです。」

「手伝ってもらってすまない。二人に用事があったきたんだ。なのは、フェイト友達だよ。」

「「はあーい。」」

二人揃っていったか……んじゃ俺は続きを

「ハガル君も行くこう。」

「へ？」

な、なんで俺まで？

私は今、アリサちゃんと一緒にフェイトちゃんの家に来ています。

引越し作業中だけど、良かったら来ないかと誘われたので来ちゃいました。

フェイトちゃんか、会うの楽しみだな。

アリサちゃんも同じみたい。

「ビデオレターはしていたけど、実際どんな子なのかしらね、フェイトって？」

「そうだね。でもなのはちゃんの友達だしきつといい子だよ。」

そういえばさっきの男の人は、フェイトちゃんのお兄さんなのかな？

なのはちゃん達を待っている間、私達はフェイトちゃんのことやさ  
つきの男の人のことをお話していた。

「こんにちはわぁ。」

「来たよう。」

「アリサちゃん！すずかちゃん！」

「初めまして、ってのもなんか変かな。」

「ビデオメールでは何度も会ってるもんね。」

「うん。でも、会えてうれしいよ、アリサ、すずか。」

「うん。」

「私も。」

「アリサちゃん、すずかちゃん、実はもう一人紹介したい友達がい  
るの。」

「「もう一人？」」

誰だろう？

フェイトちゃんの知り合いなのかな？

アリサちゃんも「誰？」って顔をしてる。

「ハガルさん、こんなところで何をしているの？」

「あ、いや、ちょっと・・・」

そうしたら一人は綺麗な女の人、もう一人は見覚えのある男の子が出てきた。

「あらフェイトさん、お友達？」

「こんにちはわ。」

「あ、こ、こんにちはわ。」

もう一人の男の子、そうハガル君がそこにいたのです。

「あれ？月村さん何でここに？友達って月村さんとバニングスさんだったのか。」

「なんでハガル君がここに？」

「ちよつと手伝いで。先日ひょんなことで知り合って友達になったからね。」

「それはそうだとしてもなんであんなのよ・・・」

アリスちゃんはちよつと嫌そう、というか不機嫌？

「バニングスさん、そんな顔するなよ。かわいい顔が台無しだよ。」

「なっ！・・・あ〜ん〜た〜は〜。」

「あれ？三人とも知り合いなの？」

そっか、なのはちゃんもだしフェイトちゃんは私達の関係って知らないんだっけ。

説明をしようとしたところ、リンディさんからお茶をしながらという提案があったので、

皆で翠屋へ移動することになりました。

でも学校や図書館以外でハガル君に会うなんて。

ちよっとびっくりかな。

今私達は喫茶翠屋に歩いて移動中。

すずかはなのはやフェイトと話をしている。

私はどうと。

「なんであなたが居るのよ。」

「さっき説明したろ。」

「あれだけで納得するとても思ってるの？思っていないわよね。さっさと説明してもらおうよ。ていうか何時なのはと友達になったのよ？」

こいつ、海波ハガルに色々と気になることを問い詰めている途中。

私とこいつの付き合いは、なのは達よりも古い。

私達が生まれる前から、お互いの両親が家の仕事関係で付き合いを  
していて、その関係で小さい時から良く会わされていた。

いわゆる幼馴染というやつ。

そして昔から何事に関しても、私よりも少し前を歩いている。

勉強しかり運動しかり・・・

唯一勝っているのがピアノや茶道なんかの習い事関係ぐらい。

でもそれはまだいい。

私が一番腹が立っているのは、小学生になってから私を名前で呼ばなくなったこと。

「どうしたよ、バニングスさん？」

「……あんたわかってて言ってるわよね？」

「まあね。それより説明だけどさ、翠屋にいたら説明するよ。まっつ、簡単にだけどね。」

「相変わらずむかつくわね。説明するだけましかけど。」

「それよりも今はテッサ達と話してるよ。俺は別にいいだろ。」

「そうね、そうさせてもらっつわ。」

むかつく言い方だけど、こいつなりの気の利かせ方。

少しはオブラートに言えないのかしら？

いじりあうことかえりあうことだかゆね・・・。

～んんん～

## 第7話『新情報、意外な再会』（後書き）

霧「以上が第7話でした。しかし……」

人「またフラグたつたな……。主にフェイトとアリサ。

いや、アリサに関しては前回の設定でもあったように幼馴染だったから問題は無い。

問題なのはフェイトだ。」

霧「そして本編中のマスターはその自覚が無い。」

人・霧「これは問題あるだろ（でしょう）」

どこからか、ドストス、という音が聞こえる。

どうやら二人の言葉がハガルに突き刺さっているようだ。

ハ「……もうやめて。俺のライフは0だから……

というかそもそも書いたのは作者、お前だろ！！」

人「何をいう。確かに書いたのは俺だが結局はお前の問題だ。

お前と言う存在が、俺の指をあの話にしあげたのだからな。」

ハ「無茶苦茶な理論かざすな！！」

霧「それはともかく。」

ハ「ともかく!？」

霧「今回のマスターは能力、といえますかその才能の片鱗を見せて  
ますね。」

リンディ殿やエイミー殿との会話で。」

無視されたため部屋の隅で一人沈むハガル。

しかし二人は無視して会話を続ける。

人「才能って訳じゃないけどな。あれは単純に頭の回転がいいだけ  
だ。」

設定資料に『学力はアリサ』以上と書いたが、あれは普段ハガ  
ルが勉強しているからだ。」

霧「つまり天才、と言うわけではないと？」

私からすればそれは十分天才の領域になると思うのですが。」

人「まあ確かに天才といえは天才か。ただしハガルの場合は努力の  
天才だ。」

独学で医学学ぶなんてかなり難しい。しかもハガルはまだ10  
歳。

んで、小さいころから夢に向かって勉強してきた結果、  
知らず知らず大学レベルの勉強をするようになったわけだ。」

霧「というと？」

人「医学書を理解するにはまず字が読めなければいけない。そして意味を理解する。」

さらに肉体の構造や薬品の計算なんかもある。極め付けが論文だ。

確かに翻訳されたものもあるが、ほとんどは英語かドイツ語だ。ましてやカルテに書く単語つてのはほとんどがドイツ語だしな。んで、この馬鹿は医学の歴史も調べたわけだ。」

霧「とても10歳の子供ができることではありませんね。正直異常としか思えません。」

人「だから努力したんだよ。」

幸い頭の回転が良かったから、比較的効率よく勉強したみたいだがね。

んで、ここまででわかると思うが、勉強した内容は全て学校の主要5教科に当て嵌まる。

社会に関しては暗記がほとんどだから特に問題ない。」

霧「それでアリサ殿以上の学力、と明記したわけですね。」

人「そういうこと。あれも実際小中高レベルでつてことだけだね。」

たまたま専門知識を学ぶ課程で、早く身につける必要があっただけだ。

つまり、今ハガルが学校で習っているほとんどのことは復習と変わらんのよ。」

霧「ありがとうございます。これでまた少しマスターのことがわかりました。」

人「気にするな、この辺は作者としては答えねばならんだろ。

感想にも疑問がきていたからな。

あと、ハガルは自分の興味のあることにはとことんのめり込むタイプなんだ。

それも多少なりとも影響しているな。」

霧「なるほど。話も長くなりましたし今回はここで終わりますか？」

人「そうだな。」

人・霧「それでは、とある水使いの物語、次回をお楽しみに。」

<暗転>

## 第8話『地獄の特訓開始』（前書き）

人「さあ、今回はハガルに地獄を見てもらおうと思う。」

ハ「なんでさ!？」

人「わからないか？前回あった事をよく思い出してみろ。」

そういわれ前回のことを思い出すハガル。そして気付いた。

ハ「フラグのことが・・・」

人「そういうことだ。まあ、俺が手を下すわけじゃない。本編中に、  
だ。」

ハ「え？」

霧「それでは本編にまいりましょう。とある水使いの物語」 第  
8話 ミッションスタート!」

## 第8話 『地獄の特訓開始』

まさかこんなことになるなんてなあ。

高町がアリサや月村さんと友達なのはしってたけど、テッサとビデオメールのやり取りをしてたなんて知らなかったよ。

四人は今オープン席でアルフさんやユーノを弄りながら話し合っている。

俺はというと店内のカウンター席に移動して、カフェオレを飲みながら高町のお兄さんの恭也さんと話をしている。

「まさかお前があの人と来るなんて、正直驚いたよ。」

「俺自身が一番驚いていますよ。まさかこんな形で店に来ることになるとは思ってみませんでした。」

ここで俺と恭也さんの関係を簡単に説明すると、早朝のランニング仲間である。

「・・・誰に説明しているんだ？」

「いえ、約束事なので気にしないでください。」

「それよりも・・・なのはに手を出すんじゃないぞ。」

コケた。それは思いつきりコケたよ！！

店内のお客さんの視聴率が一時的に100%超えたよ！！

「いきなり何言い出すんですか！！高町とは友達ですよ。と・も・だ・ち！」

「うちのなのはに魅力がないとでもいうのか！」

だあー！！このシスコン兄貴は！！

恭也さんは若干・・・いやかなりのシスコンです。

「恭也さん、俺にどうしてほしいんですか。」

「なのはといい友達でいてくれ。それ以上の関係にはなるなよ。」

「いや……なりませんって、今のところは。」

「とっつか俺にその気はありません!!」

あと下げた左手に持っている飛針、置いてもらえますか？

命つかまわると安らげないんですけど……

「気にするな。ほんの冗談だ。」

「いや、気にしますから!!」

本当にこのシスコン兄貴は。

高町のことに関わらなかつたらまともでいい人なんだけど……

くとある水使いの物語

第8話 『地獄の特訓開始』

あのとテツサが聖祥大学付属小学校、つまり俺や高町たちが通っている学校への転入が、

リンデイさんから発表されたり、テツサがそれについて嬉し泣きしたり、と色々あった。

んで今俺は家の稽古場で訓練中。

そう・・・お婆ちゃんと訓練中なのである。

これでも一応死にかけたんだけどね。

「うぎゃぱっ！！」

「ほら、さつさと起きな！さっきの攻撃が真剣なら死んでるよ。受けきるか回避するかどっちかにしな！」

「……はい……っ、次お願いします……」

現在お婆ちゃんは木刀を持ち、俺は籠手と小太刀サイズの木刀を二本持っている。

お婆ちゃんには今回のことを正直に話した。

以外にもお婆ちゃんはこの話を信じてくれた。

真偽は定かじゃないけど、お父さんの家の家系に出自が不明の人がいるとか。

その人が魔法と同じ現象を扱えたらしい。

そんな訳でお婆ちゃんはすんなり……比較的すんなりとネーベルや魔法のこを受け入れてくれた。

最初ネーベルが喋った時は驚いてたけどね。

んで、俺が狙われてるってことで尚のこと訓練を強化しないと、という結論にお婆ちゃんの中では至った。

ネーベルは俺とお婆ちゃんとの訓練を見学中。

曰く録画もしているらしい。

225

しかし驚きました。まさか魔法を使わずここまでの動きをするなんて。魔法社会の住人が見たらさぞ驚くでしょうね。

「そんなことないさね。人っていうのは鍛えればこの程度まで育てることができるよ。人の潜在能力っていうのは、それほど高いんだ。」

なるほど、勉強になります。訓練映像の提供といい、三月殿ありがとうございました。

「かわいい孫のパートナーなんだろう、遠慮することはないよ。」

そうかいそうかい・・・そのかわいい孫をほつといて俺のパートナ  
ーと何話てんだよ。

「それじゃあ休憩は終わり。次いくよ！今度は崩くずを混ぜるよ。ちや  
んと捌ききりなよ。」

「無茶言わないで！！！」

頑張つて下さい、マスター。あなたが強くなるためには必要なこ  
となのです。

「ネーベルもとめてよ！！てか、俺怪我人だよ！！！」

これ以上はさすがにやばいって！

体力もだし、なによりお婆ちゃんのテンションがあがるとやばいの  
！！

「はあああああ！！！」

き、来たああ!!

・ ・ ・ ・ あああああああ!!

この夜、鳴海市にハガルの声が響き渡ったと渡らなかったか・ ・ ・

しかし三月殿はすごいお人だ。

マスターの御婆様とは思えないほど、完成された肉体をお持ちだ。

もしマスターが三月殿の技術を全て受け継いだなら、あの騎士達にも遅れをとることはないだろう。

しかし・・・マスター、見事にボロボロですね。

「い、いわないで・・・」

マスターの魔力を使い治療しながら、私達は先ほどの反省をしている。

それにしても、マスター。あなたの身体は同年代の子供では、ま  
ずありえない身体でしょう。

先ほどの訓練と私が出会う前、先日の戦闘記録を見せて頂いて改めて気付いた。

身体のスペックが他の人とは違うことに。

「そうなの？」

ええ。肉体の能力という点では、身体強化を使用した魔導士とほぼ互角でしょう。さすがに筋力はそのままでありませんが、それでもこの世界の高校生と同じかそれ以上です。現在のあなたの肉体の強さはそれほどなのです。

「そついやお婆ちゃんが『最低でも高校生には勝てるよう仕込んでる』って言うってたな。あれマジだったんだ。」

そのようですね。

「そついや最後の攻撃さ、上段からじゃなくてフェイント混ぜて、後ろに回った方が良かったのかな？」

そうですね・・・その方がまだ可能性は高いでしょう。ただ今のマスターでは三月殿に当てるだけで、有効打を決められたかというところ微妙です。

「そつ・・・だよな。」

などと身体のケアをしつつ反省を30分ほど行った。

現在時刻は夜の10時過ぎ、これから庭で魔法の訓練を開始することにした。

なお、三月殿は夜食を作ると台所へ行かれた。

では今から結界を張ります。といっても使用する魔力はマスターのものです。

「あいよ〜。」

封鎖領域展開、範囲は海波家限定。

それではマスター、始めましょうか。

「んでき、まず何から始めるの？今俺ができることっていったら念話ぐらいだよ。」

そうですね、まずは基本的なことからです。ただ今回は時間がないので、少々スパルタ気味に行きますがいいですか？

そう、いつまた襲撃があるかもしれない。

まずは必要最低限、魔力を使用して戦えるところまでいってもらわないと。

座学は通学中や学校に行っている間に、マルチタスクでやっていたくとしましよう。

「問題ないよ！スパルタなら慣れてる……うん、慣れてるよ。」

マスター、そう落ち込んでいる時間はないのですが……

ではまず、簡単な魔力運用を。

次に急ではありませんが、飛行魔法を練習しましょう。

映像記録を見た限り、無意識とはいえ飛行魔法を使っていたのなら習得もすぐでしょう。

では、コールをお願いします、マスター。

「ネーベルリッター、セットアップ!」

「ネーベルリッター、セットアップ!」

そういつた瞬間、俺とネーベルを銀色……いや、鋼色の光が包んだ。

マスター、騎士甲冑を、あなたの戦闘服をイメージしてください。それがあなたのバリアジャケットになります。

そして俺は自分の戦う姿をイメージしていく。

イメージが固まった瞬間、俺の服は光の粒子となって消えた。

下も全部ね。

そのすぐ後、黒いノースリーブのインナーと黒のインナーパンツ姿になった。

次に光の粒子は少し大きめの黒いズボンを形成、足にはグレーのブーツを装着。

上着としてこれまたグレーの袖なしのコートを着る。

そのコートの中には赤い十字が描かれている。

最後に腕にネーベルが装着された。

これが俺のバリアジャケット。

それにこれがネーベルの本当の姿、話では聞いてたけど実際見るとまた違う印象だな。

肘から手の甲まで覆う灰色の大型の籠手。

前腕の中心部分には、待機中のネーベルについていた宝珠と同じ色の、菱形のクリスタルがついている。

手首の部分は動かし易いよう独立しているみたい。

腰の後ろには二振りの刀が装着されている。

この刀の名前はセンチネル。

こいつも俺の相棒となる存在だ。

ケーニヒ・フォルム、私の基本形態です。

「これが俺の、いや俺たちの戦う姿なんだね。」

うはーなんかすげえw

本当に変身しちゃったよ。

しかしマスター、そのバリアジャケットのデザインは騎士とは少し違う印象を持つのですが。

「ああたぶんね、俺の中で魔導士と騎士イメージが混ざったからだと思う。」

んで、戦い易い格好は？って思ったらこうなったんだ。」

んじゃ早速魔法訓練開始だ！！

「……な、なんでだよ。」

訓練開始から約2時間後、俺は地面に大の字になって肩で息をしな  
がら、訓練中にあった疑問を口にしていた。

何故なのでしょう？原因はおそらくリンカーコアでしょうが……

236

なんで……なんで……

オールドマスター達はマスターと同じスキルの持ち主でした。  
不得意ということはあっても、まったく使えないということはな  
かったのですが……

尚更なんで!?

もしかするとスキルの影響でしょうか？

「なんで攻撃魔法が使えないんだよ!!」

そう、俺は攻撃魔法が使えないのだ。

何度も試してみた。

攻撃用の魔力スフィアを展開すると、すぐに霧散してしまって発動することはなかった。

他の飛行魔法や防御魔法は大丈夫……まだ練習は必要だけど。

だけど攻撃魔法だけはだめだ。

そんなことを考えている間、ネーベルは俺に回復魔法を発動してくれていた。

魔力は俺のだけど・・・

これは推測なのですが・・・

何？

マスターのスキルへ魔力吸収は常時発動型です。今回のことで魔力の使い方を目覚め存在を知った。

しかしスキル自体は以前より発動していたのではないのでしょうか？

「とというと？」

魔力を吸収しすぎてリンカーコアに異常がでた、ということですよ。

「え？それってどういうこと？」

そうですね例えるなら魔力は水、リンカーコアつまり個人の魔力総量というのはそれを入れる容器です。

容器の形がその人の特性、大きさが最大魔力値と考えてください。たとえばダムのような大きさだとして、

一般家庭の水道から水を供給し続けても溜まるまでは時間が掛か

ります。

そうだね。それだとかかなり時間が掛かるよね。

しかし、もしそれがダムでなくコップならば？水はすぐに漏れてしまいます。

「確かに、でもそれだと俺の魔力最大値って低いの？」

今のネーベルの話だとそうともとれる。

いえ、マスターの場合どちらかというたダムです。ただダムといえど常に溜め続けることはできません。

時に放水し調整することで維持しています。

「ん？つてことは俺の場合出すことでの調整ができてないってこと？」

その通りです。マスターは魔力を溜め続けていました。その結果最大保有値を超えて尚溜め続けた。

結果容器は歪み魔力は別のところへと溢れ続け、身体やリンカーコアに影響を及ぼした。

マスターの身体スペックが高いこと、攻撃魔法が使用できないのはこれが原因かもしれません。

ああ、言われてみれば身に覚えがあるかも。

昔から人より怪我の回復とか早かったもんな。

ああ〜でも今の説明でまた疑問ができた。

「今の話だと魔力の最大値って先天的なものなの？」

いえ、有る程度なら量を増やすこともできます。そのための訓練もありますから。

「なら・・・」

ただ、マスターに関してはその範囲を遥かに超えています。

負荷をかけすぎた結果増えはしたものの歪んだ、ということです。

なるほど納得。

確かに出さずに溜め続けたらそうなるよね。

水といえば、気になることがもう1つあったな。

「ネーベル、俺が魔法を発動した時さ、たまた水になってたよね。あれって何？俺なんかミスしたのかな？」

そう、何故か俺の魔法は水になることが多かったのだ。

魔力スフィアを形成しても、何故か水になった時もあった。

それは魔力変換です。

「魔力変換？」

ええ・・・

ネーベルの話によると、俺は魔力変換資質・水を持っているらしい。

これの影響で俺の魔力は自動で水状になるらしい。

んでなる時とならない時がある原因は、俺が無意識にON・OFFの切り替えをしているんじゃないか。

と、いうことらしい。

元々攻撃に向かない変換資質らしいので、攻撃魔法が使えない俺にはぴったりだ。

「んじゃま、今後の方針は決まったのかな？」

ええ、まずは身体強化と防御魔法ですね。次に移動などの補助魔法という順番で行きましょう。

攻撃魔法が使えないので、他を集中的に行きますよ。

「ういっす。今日は時間が時間だしもう終わるつか？」

そうですね。

そう、なんだかんだでもう12時前なのだ。

体力が普通の小学生よりはある自信はあるよ？

でもさすがに動きっぱなしだったからもう限界だよ。

夜食食べたからお風呂入って寝よう。

くっくくく

## 第8話『地獄の特訓開始』（後書き）

人「以上が8話だ。今回やっとハガルが魔法を使ったわけだ。

まあその描写も少しだが。」

霧「ええ、そして私の姿もやっと表現されましたね。」

人「ここ本当にやっとだな。しかし・・・そのゴミどうする？」

二人の目の前には真っ白に燃え尽きたハガルが横たわっている。

時おり身体を痙攣させているのが確認できるため、生きてはいるようだ。

霧「マスターならそのうち回復するでしょう。」

人「お、回復してあげないのか？」

霧「ええ、あまりサポートしすぎるとマスターの成長の妨げになりますから。」

人「ふむふむ。そいじゃま、こいつはほっという本編に出てきた新設定を紹介しようか。

まずはハガルの追加能力だ。」

Ⅱ ハガル追加情報Ⅱ

保有魔力：A+相当

魔力変換資質：水

レアスキル  
稀少技能：魔力吸収

その他：

長年「魔力吸収」の影響下にありながら魔力の調節をしていなかったため、

リンカー・コアに欠損が生じ攻撃魔法が使用できない。

・使用バリアジャケット（騎士甲冑）

名前：クロイツリッター（十字騎士：K r e u z R i t t e y）

詳細：

「ハガル」が使用する基本のBJ。

基本色はグレー。

ハガルのイメージで「魔法使い＋騎士」という一見するとどちらともとれるデザインとなっている。

背中には赤い十字架が描かれている。

インナーは上下黒で上はノースリーブタイプ。

防御と動き易さに重点を置いて設定されている。

（イメージ：「MHP2G」にある「フルフルZ」の袖とマスクのないバージョン。）

〓デバイス情報〓

名前：ネーベルリッター

種類：インテリジェンス・デバイス

詳細：

通称「霧の騎士」、愛称「ネーベル」。

管理人格は女性。

両腕に装着する籠手型のデバイス。

普段（待機状態）は緑色の宝珠のついた羽根状のアクセサリとして首にかけられている。

特殊な「カートリッジ・システム」を両方に搭載。

片方8発のカートリッジを腕を包むように円形に配置して、外への排出機構をオミットしている。

これは「魔力吸収」を使用できる者用に生み出された「ネーベル」の特徴となっている。

吸収した魔力の一部を空のカートリッジに自動でまわす事で半永続使用を可能としている。

過去の主をオールドマスター、現在の主「ハガル」をマスターと呼んでいる。

ECM機能が搭載されており並のセンサーでは感知出来ない。

古代ベルカ時代（聖王時代以前）のデバイスで、「魔力吸収」を扱える者用に生み出されたデバイス。

元々は管理局が保管していたもの。

「ミッド式」を主流とする局員や数少ない「ベルカ式」の使い手にすら反応せず、解析もできない状態で準ロストロギア指定されていた。

本局にきた「ハガル」に反応したため、「グレアム」の権限で「ハガル」のデバイスとなり、以後専用のデバイスとなる。

ケーニヒ・フォルム（第1形態）  
国王：Konig

籠手型（イメージはMHP2GバサルX）で基本形態。

若干防御よりになっているが全体のバランスが非常によく燃費もいい。

BJ：クロイツリッター（基本形態）

名前：センチネル

種類：アームド・デバイス

詳細：

片刃の双剣型デバイス。

待機状態では「ネーベル」に収納されており、展開すると腰に装着される。

クリンゲ<sup>ハ</sup>刀：Klinge

基本形態。

小太刀ほどの大きさだが刃がやや幅広になっている。

Ⅱ 魔法・スキル・技Ⅱ

名前：崩<sup>くずし</sup>

系統：帝護神一派・清心覇軍流戦場古武術

詳細：

中国拳法の浸透径のような内部破壊技。

「砕」と違い外部に攻撃の跡が付きにくい。

名前：魔力吸収

術式：古代ベルカ式・特殊

詳細：

魔力吸収率を大幅に上げるスキル。

術式による発動と常時発動型の2種類がある。

術式型は適性があれば使用できるが常時発動型は先天的なものなのでさらに使用者が限られている。

常時発動型は呼吸と共に魔力素を吸収できる。

また意識することで吸収できる量を変えることができる。

他者の魔法から吸収することもできるが、魔力運用と処理が難しく他の魔法との併用は厳しい。

どんな魔法でも吸収できるというわけではなく、物質加速式や魔力変換に使用された魔力は可能、物質や現象（電気など）は不可。

相手に触れることでも吸収ができる。

使用者によって魔力の吸収口（出入り口のようなもの）に差があり、その差が能力の差となる。

それでも反則といってもおかしくない能力をもつ。

ちなみに、魔導生命体は身体を吸収され消滅してしまう可能性もある。

人「以上が新情報だ。」

霧「今回はまだ多いですね。」

人「ああ、分量も多くなってきたから今回はここで終わろうと思う。」

霧「そうですね。それでは皆様、次回をお楽しみに。」

<暗転>

## 第9話『戦い、新たな敵?』（前書き）

人「今回は原作で言うところの4・5話にあたる部分だ。」

霧「結構進みますね。」

人「進みはするが、内容は原作5話の部分がほとんどだ。」

ハ「4話部分は?」

人「ハガルに関わる絡みや会話が無いからカットした。」

もし書くとしても原作をそのままコピーする形になっちゃうからだ。」

ハ・霧「なるほど。」

人「それでは、とある水使いの物語」 第9話始まるぞ。」

## 第9話 『戦い、新たな敵？』

手にしたのは大切なパートナー。

教えられた魔道の存在と今回の事件。

少しずつわかり始めた相手の正体。

誰も傷つけないための力。

動き始めた運命に立ち向かうために。

俺は力を望んだ。

そして、これから先の運命は、まだ、誰にもわからない……

「AM5:30 海波家 ハガル部屋」

「今日から早朝訓練スタートだ。」

「魔法の訓練とか人目につかないようにしないといけないしね。」

「ストレッチも終わったし。」

「んじゃ、そろそろ行くこうか、ネーベル。」

Yes, Master.

「まずは鳴海公園までランニングだ。」

このときは思っても見なかった。

まさかこの日を境に俺の運命がさらに加速し始めるなて……

くとある水使いの物語

第9話 『戦い、新たな敵？』

現在休み時間です。

朝のホームルームでフェイトちゃんの紹介がありました。

転校生ということもあり、今フェイトちゃんは質問攻めにあってます。

でも……

「フェイトちゃん、人気者。」

「でもこれはちょっと大変かも……」

「はあ、しょうがないわね。」

といいながらアリサちゃんがフェイトちゃんの方へと歩いていく。

なんだかんだいってアリサちゃんは面倒見がいいんだよね。

「はい、はい……」

大声を出しながら手を叩いてみんなの注目を集める。

こういったことは本当に上手だな。

「転入初日の留学生をそんなに皆でわやくちゃんにしないの。」

「アリサー！」

「それに質問は順番に。フェイト、困ってるでしょ。」

「はい！じゃあ俺の質問から。」

「はい、いいわよ。」

そんな感じで始まった質問会、結局休み時間が終わるまで続きました。

この日、ハガル君は学校を休みました。

・・・そして・・・

今、私たちの前には守護騎士の人が二人いる。

「私たちはあなた達と戦いに来たわけじゃない。まずは話を聞かせて。」

「闇の書の完成を目指してゐる理由を。」

そう、これを聞かないと何も始まらない。

もし何か理由があるなら、何かできるかもしれない。

「あのさあ、ベルカの諺にこんながあるんだよ。和平の使者なら槍はもたない。」

「「えっ？」」

それを聞いて私とフェイトちゃんは、お互い見合って首を傾げました。

その・・・言っている意味がよくわからなかったから・・・

「話し合いをしようつてのに、武器を持ってくる奴がいるか、馬鹿！！って意味だよ。ばーっか！！」

「なっ！！いきなり有無を言わずに襲い掛かってきた子がそれをいうー!？」

なんで攻撃してきた側に説教されなきゃいけないかな!？

「それにそれは諺ではなく、小話の落ちだ。」

しかも間違えてるし！

「うっせー！！いんだよ、細かいことは。」

少しこの子のことがわかった気がします。

その時で上空で、結界に何か強力な力が衝突し結界の中に何かが入ってきました。

そしてそのまま目の前のビルへと向かって落ちていきました。

煙が晴れたその場所には、フェイトちゃんと戦った騎士の人、シグナムさんがいました。

「あっ！シグナム・・・」

「ユーノ君、クロノ君！！手、出さないでね！私あの子と一対一だから！！」

そう、私とあの子は戦わなきゃいけないの。

お話をするために！！

フェイトちゃんとアルフさんも同じみたい。

負けない・・・絶対負けないの！！！！

3人が戦っている間、僕とユーノは闇の書の主を探していた。

蒐集が目的ならこの近くに潜んでいる可能性がある。

主さえ捕まえれば、少なくとも今回の事件は終息へ向かうだろう。

それに……父さんの……

いや、今は私怨で動くわけにはいかない。

まずは執務官として、局員として闇の書の主を捕まえないと。

「どうしようときこそ冷静にならないといけないな。」

ん？・・・あれは・・・

「どうしよう、皆結界の中に入っていつちやったけど、私だけだとこの結界を破るのは難しいわね。」

「一応なかの状況は思念通話でわかるけど・・・」

” 状況はあまりよくないな。シグナムやヴィータが負けるとは思えんが、ここは引くべきだろう。シヤマル、なんとかできるか？”

そうは言われても。

” なんとかしたいけど、局員が外から結界維持してるの。あたしの魔力じゃ破れない。シグナムのファルケンやヴィータのギガント級を出せなきゃ。”

こういうときこそ後方支援型であることが悔やまれる。

私に強力な攻撃魔法があれば・・・闇の書の<アレ>のような。

” 二人とも手が離せん。やむおえん、<アレ>を使うしか。”

” わかってるけど、でも。”

このとき思念通話と結界破りに気をとられすぎて周囲に注意が行き

届いてなかった。

これがいけなかった。

「あっ！！！」

” シャマル？どうしたシャマル！？ ”

まさか結界の外で探しているなんて。

「 搜索指定ロストログアの所持、使用の疑いであなたを逮捕します。

」

どうしよう。たぶんあの白い子や黒い子と同じか、それ以上の実力のはず。

今の状態で私ができることは……

「抵抗しなければ弁護の機会があなたにはある。同意するなら武装の解除を。」

どうしよう……どうしたら……

どうしようか考えていると、突然周囲の空気が変わった。

そして……横で何かが跳躍する音が聞こえた。

「えっ？」

「あっ」

気付いた時にはもう彼の攻撃が当たる瞬間だった。

「はっ!!」

そして蹴られた局員はすごい勢いで隣のビルのフェンスへととんでいった。

後ろを向くとそこには、左半分に赤い龍の模様が画かれた白い仮面を付けたく彼>がいた。

「くっ……仲間……?」

でもなんでく彼>がここに?

「あなたは……」

「シャマル。」

「え?」

仮面越しに聞いた声は普段と違っていた、おそらく管理局にばれな  
いたためなのだろう。

普段の声よりも低いので少し違和感を感じた。

「何か結界を破る方法はないのか？私でも破れなくはないが多少時  
間がかかる。」

「あ、あるにはありますけど。」

喋り方も違う・・・徹底してるのね。

「ならそれを使うんだ。」

「でも使用したら頁が！」

「それは後でまた集めればいい。問題は今、仲間を失うことだろう。  
違うか？」

「あっ・・・」

それを言われてようやく気付いた。

確かにそうだ。頁はまた集めればいい。

でも皆はそうはいかない。いくら私たちが闇の書から作られた存在でも、だ。

よし。

” 皆！！今から結界破壊の砲撃を撃つわ！うまくかわして撤退を！  
”

”  
” おう！！！！  
”  
”

く．．．いきなり現れたあの仮面の男は．．．

エイミイの話だとリーダーには何も反応がなかった。

今もあの男の反応は感知されていないらしい。

「いったい何者だ！？なぜ闇の書の完成に手を貸す。」

「．．．．．」

「答える！！」

もしかして管理局の知らない新たな守護騎士なのか？

な！？

突然発生した膨大な魔力。

思わずその魔力反応がある方を見て仮面の男から目を逸らした。

それがまずかった。

「でりゃあー!!」

仮面の男の蹴りを直撃して地面へ落とされてしまった。

「うわあー!!」

何とか地面スレスレで何とか持ち直したが、しかしこの蹴り・・・  
身体に響く。

「・・・執務官といってもこの程度か。管理局、所詮こんなものか。」

「なっ！」

「これ以上私達に関わらないでいただく。正直君達は邪魔なのだ  
」よ。」

「何？」

こいつ、やはり5人目の守護騎士・・・

「それと。」

「？」

「勘違いしているようだから言うておく。私は守護騎士ではない。  
彼らに協力するただの人間だ。」

な！？なら尚のことわからない。

闇の書が完成してもらくなことにはならないのに。

「アレがどんな存在かわかっているのか！？」

もしかしたら能力を買われ守護騎士たちに協力を求められた傭兵かもしれない。

となるとあれの能力を知らない可能性もある。

そんなことを考えているとあいつから予想外の答えが返ってきた。

「知っているとも、アレがどういった存在か。そしてアレの真の名も。」

「真の名、だと？」

「ではな……」

「ちょっとま、な！バインド!？」

突然発生したバインドによって動きを封じられた。

何時の間に!？」

そして奴は去り際に。

「貴様は甘いな。」

と一言発した直後、魔力爆撃により結界に直撃した。

シャルが破壊の雷を発動させたか……

もう時間か。

「すまんテストロッサ。この勝負、預ける。」

「シグナム！」

本当はもう少しお前と手を合わせていたいのだがな・・・

いきなり結界に高威力魔法が衝突しました。

もしかしてこの子の仲間の人か

「ヴォルケンリッター、鉄槌の騎士ヴィータ。あんたの名は？」

突然あのこ、ヴィータちゃんは私の名前を聞いてきました。

「なのは、高町なのは！」

「高町なぬ、なぬ・・・えーい！！呼びにくい！！」

「逆切れ！？」

なんで名前を教えたのに逆切れしやれなきゃいけないの？

「ともあれ、勝負は預けた。次はぜってー殺すかな。ぜってーだ！！」

「え？あ、ちよつと。ヴィータちゃん！？」

去っていくヴィータちゃんを止めようとした瞬間、結界に衝突している魔法が破裂するような音を発し思わず目を瞑ってしまいました。

「仲間を守ってやれ。直撃を受けると危険だ。」

「え？あ・・・ああ。」

そんなこと言われなくてもわかってるけど・・・

なんで敵であるあたし達に、それをいうんだ？

わけわかんないね。

やっと魔力爆撃の余波が収まったか・・・

しかし、さすがにこの威力から三人守るのはキツイね。

「はあ・・・」

「アルフさん大丈夫ですか？」

「ああ。」

「アルフ……」

大丈夫だよ、フェイト。

そりゃこれだけの攻撃を受けたんだ、ため息もでるさね。

”なのは、フェイト、アルフ、大丈夫！？”

「あ、うん。ありがとう、ユーノ君。アルフさん。」

当然だって。

ん……あの攻撃の影響で結界も維持できなくなったのか。

早いところ移動しないといけないね。

あの龍の仮面の男はいつたい誰なんだ？

私はお父様に言われ、もしもの時は動くように準備していた。

でも私が動く前にもう動いていた。

しかもあの時、クロ助を蹴る時私の方を一瞬だけ見ていた。

いや、警戒していたね。

あのイレギュラー、結局正体はわからなかった。

お父様に報告しないと。

もし計画に狂いが出るようなことになったら・・・お父様やク  
イド君のためにも、なんとしても今回でけりをつけないと。

八神家に無事ついた私たち。

でも家にはやてちゃんはいなくて、代わりに書き置きがありました。

すずかちゃんの家に居るのなら安心だけど、でも。

庭に出て今日のこと、はやてことをちゃんの考えていた。

電話越しに聴いたはやてちゃんの声は何時もとかわらなかつた・・・

いや、私達にわからないようにしていたのかもしれない。

はやてちゃんに悲しい思いをさせちゃった。

こんなことにならないよう注意していたのに……

「寂しい思いを、させてしまったな。」

シグナム……うん……

「それにしてもお前を助けたあの男、まさかあいつなのか？」

「ええ。わざわざ慣れない変身魔法と口調で。」

事前に今回のことを連絡しておいてよかったと、今更ながらに思う。

もしあの時彼の助けが無かったら、私たち全員ここに無事にいるかわからない。

負けることは無いにしても、少ないはない被害が出てたと思う。

「そうか。あいつは今どこへ？」

「ここには居れないから、近隣の世界で休むって言って転移していったわ。場所は聞いてあるから大丈夫よ。」

「礼を言わねばな」と小さく、隣に居る私にも聞こえるかどうかの聲で呟くシグナム。

そうね……彼には色々手伝ってもらってるし。

「しかし、管理局の連中も益々本腰を入れてくるだろうな。」

「あの砲撃で大分、頁も減っちゃったし。」

「だが、余り時間も無い。」

うん。

彼は私たちを手伝うためにわざわざ「アレ」を創った。

そのおかげで少しは楽になっているけど・・・

「一刻も早く、主はやてに闇の書の真の所有者に。」

そう、ね。

私たちがはやてちゃんと、平和に暮らすためには闇の書の完成が  
要。

でも、何か引つかかる。

それが何かわからないのだけど・・・

それに、あの時彼が言ったあの言葉「闇の書、いや夜天の書のこと  
か」。

これも気になる。私たちは何か大事なことをみをとして・・・いや・

・・・忘れてるんじゃないだろうか・・・

くっくっく

ふう・・・しかしここは過ごし易いところだな。

見渡す限り一面森・・・いやもはや樹海、ジャングルなんだけどね。

でも河も有る、きれいな湧き水もあるし食料も何とか確保できた。

しばらくはこので寝泊りすることになるかな。

訓練と蒐集の傍らちよつとこの世界を見回ってみるか。

管理外世界らしいし、何かあるかもしれないな。

ま、今日のところは寝よう。

・・・原生物・・・あいつらさえ気をつければなんとかなるか。

現在私たちはエイミーさんからレイジングハート達の説明を受けています。

その隣ではリンディさん達が闇の書について話をしています。

そのなかで私たちが驚いたのは騎士さんたちの性質。

「それからもう一つ。あの騎士たち。闇の書の守護者の性質だ。彼らは人間でも使い魔でも無い。」

これにはクロノ君とリンディさん以外のその場に居た全員が驚きました。

「闇の書に合わせて魔法技術で作られた擬似人格。主の命令を受けて行動する、ただそれだけの存在のはずなんだ。」

〜  
じじい  
〜

## 第9話『戦い、新たな敵?』（後書き）

ハ「え?今回俺の出番こんだだけ?」

霧「私にいたっては一言だけですね。」

人「その代わりといっちゃ何だが、原作と違う展開にしてみた。」

ハ「あの仮面の男か。」

人「ああ。これが設定だ。」

名前：?

性別：男

年齢：?

身長：約170cm

詳細：

「シヤマル」を助けた仮面の男。

左半分に赤い龍の模様がある白い仮面を着用し、赤い外套を羽織っている。

外套は「Fate」の「アーチャー」のものに似ている。

「シヤマル」曰く、何者かの変装らしい。

また「闇の書」についてそれなりの知識をもっている。

人「まあ察しのいい読者の方ならわかるだろうけどな。」

ハ「しかしクロノさんを完全に手玉にとってるね。」

人「不意打ちから始まり、動揺までさせて冷静さを失わせてるからだ。」

冷静でない人物を操るのは意外と簡単だからな。」

ハ「それでもすごいと思うが・・・」

人「うし。まあ今回はここまでにしよう。」

ハ「あれ？いつもに比べて早いね。」

人「これ以降のオリジナルの展開の構成と書き起こしをしなきゃならんからな。」

キーワードを入れてる理由も防具だけじゃないことを証明せいやならんしね。」

ハ「そっぴや追加されてたね。どうするの？」

人「ある程度道筋はできている。あとは細かい展開と文面に起こす作業だ。」

「というかそれが一番大変なんだがな・・・」

頭を抱え色々考えている作者。ハガルたちの声が届いていないようだ。

霧「今話をして無理ですね。ではさっさと終わらしましょう。」

ハ「だな。それでは皆様、次回をお楽しみに。」

<暗転>

## 第10話『考査と変化』（前書き）

人「記念すべき第10話だ!!」

ハ「いよいよ10話か。原作で言つと6話、ちょうど中盤あたりだっけ？」

人「そうだ。んじゃま、さっそく本編いってみようか！」

ハ・霧「とある水使いの物語」 第10話始まります。」

## 第10話『考査と変化』

もしかして、シグナム達は私と同じ？

「あの。使い魔でも人間でもない擬似生命と言つと、私みたいな・・・」

「違つわ!」

その一声に私ほ含め皆驚き、リンディさんの方を向いた。

「フェイトさん。生まれ方が少し違っていただけでちゃんと命を受けて生み出された人間でしょ？」

「検査の結果でもちゃんとそうでてた。変なことというものじゃない。」

「あ・・・はい、ごめんなさい・・・」

そう・・・なんだ。検査の結果では私は一応・・・

そんなことを考えているとエイミィが手を叩いて注目を集めた。

「ああそつだ！モニターで説明しようか？」

そつしてモニターを使いながら守護騎士たちの説明が始まった。

くとある水使いの物語

## 第10話 『考査と変化』

「しかし今回は何時もと少し状況が違う。」

そう、今回の守護騎士たちに人格があるというだけではない。

「えっと、確か仮面の人だっけ？」

「そう、この人物だ。」

僕は新しいモニターを立ち上げ、あの仮面の男を映した。

突然現れ守護騎士たちの手助けをした謎の男。

「この人も守護騎士の一人なの？」

「いや、この男は守護騎士ではない。おそらく魔導士、普通の人間だ。」

「え!？」

やはり驚いているな。それは僕も同じだ。

まさか闇の書の守護騎士ではないものが事件に関わってくるなんて。。。

「本局でも協力してもらって画像を解析したが、結果この男からは魔力反応を感知することはできなかった。」

「え！？で、でもこの人空を飛んでるよ？これって飛行魔法じゃないの？」

なのはは勿論、フェイトやアルフも驚いている。

それはそうだ、魔力反応がないのに空を飛ぶ人間なんて僕だって知らない。

そしてモニターはちょうど僕が蹴り下ろされるシーンに移り変わっていた。

「ああ、そのはずだ。おそらくだがジャミングでレーダーから逃れていたんだろう。」

「アースラのレーダーに引つかからないなんて、ほんとお手上げだよ。」

「普通そんなことなかなかできないんだから。」

エイミィの言うとおりだ。

魔導士個人の探知から逃れることができても、船のそれも次元航行艦のレーダーから逃れるなんてそうできるもんじゃない。

「あつこの男が気になることを言っていた。」

これは母さんや本局には報告したが、まだなのはたちには知らせていないこと。

四人・・・いや今は三人と一匹か・・・がどうということだ？という顔をしている。

そうして、僕はS2Uに記録されていた会話データを聞かせた。

「そして一番気かりなのがここ、『アレの真の名』というワードだ。」

そう、まるで闇の書には別の名前があるような言い方。

「もしかしたら、この仮面の魔導士は何か、私たちの知らない重要なことを知っている可能性があるわね。」

「ええ。」

「まあ、それについても捜査に当たっている局員の情報を待ちましようか。」

「転移頻度から見て主がこの付近にいるのは確実ですし、案外主が先に見つかるかもしれません。」

「ああ、そりゃわかり易くていいね。」

そう、アルフの言う通りそれだとわかり易い。

「だね。闇の書の完成前な持ち主も普通の魔導士だろうし。」

「うん。それにしても、闇の書についてももう少し詳しい情報がほしいな。」

何か方法は……局のデータベース以上となる、無限書庫か。

しかしあそこは整理もされてない場所だ。

あそこで情報を探すなんて発掘と変わらない。

……ん？発掘……そうか！

「ユーノ、明日から少し頼みたいことがある。」

「ん？いいけど。」

よし。これでなんとか情報の目処は立つかもしれないな。

「シグナム、はやてちゃんもつじき帰ってくるそうよ。」

「そうか。」

結局昨日はやってちゃんはさすがかちゃんの家泊めてもらっ形になった。

私たちが遅くなってしまったから・・・

そういえば。

「ヴィータちゃんと彼はまだ？」

「かなり遠出らしい。ヴィータは夕方には戻るそうだ。あと、あいつは今日も戻らないらしい。」

彼、大丈夫かしら？協力してくれてるのは助かるけど少し心配だわ。

「あなたは、シグナム？」

「なにか？」

「大丈夫？って。大分魔力が消耗してるみたいだから。」

「お前達の将はそう軟弱にはできていない。大丈夫だ。  
それに、あいつの方が大変なのだ。私が弱音を吐くわけにもいか  
んだろう。」

笑いながらそういうシグナム。そう・・・笑いながら・・・

「あなたも随分変わったわね。」

「ん？」

「昔はそんな風には笑わなかったわ。」

「そうだったか？」

少し考えながら答えるシグナム。

でも変わったのはあなただけじゃない。

「あなただけじゃない。私たち全員随分変わったは。  
皆、はやてちゃんが私たちのマスターに変わってからね。」

そういつとシグナムは静かに同意してくれた。

やはり心ではそう思ってるみたいね。

今うちはずかちゃんとのメイドさん、ノエルさんに家まで送ってもらってる最中や。

そういえば皆が来てからもう半年か・・・なんや、あつという間やったな。

今まで話す相手って言ったら、病院の人がハガル君ぐらいしか居らんかったからかもしれんな。

でも最初はほんまびっくりした。

だって本がいきなり光ったかと思ったら目の前にシグナムたちが居

るんやもん。

そらびつくりするで、普通。

んでみんなの服買ったり、騎士甲冑やつけ？それも決めたり。

新しい家族が増えてほんと嬉しいわ。

ただ残念なことが一つある。

ハガル君がなかなか皆と会えへんことや。

図書館で私とはよう会つのに、迎えに来るシャマルやシグナムとはいつもニアミスや。

本人曰く避けとるわけやないらしい。

タイミングが悪いいうとっとな。

でもこの半年で一回も会わんって・・・どんだけタイミングが悪いねんやるか？

ノエルさんと話をしながら、  
うちはそんなことを思い出し考えとっ  
た。

〜  
じゅん  
〜

第10話『考査と変化』（後書き）

ハ「ん？今回はいつもより短いね。」

人「ああ、ほとんど原作コピーになると判断したからカットした。

まあ物語の進行に支障の無い程度に、だがな。」

ハ「しかし……」

身体を震わせているハガル。なにやらただならぬ空気を発している。

人「どうした？」

ハ「なんで俺が出てないんだよ……！」

霧「私もです……！」

そう、今回主役であるはずの二人は出ていない。ネーベルにいたっては名前すらも。

人「ああ……まあ今回スポットを当てたのはあくまでアースラ

組と八神家だからな。

その代わり他の話ではかなり登場してるからいいだろ?」

どこからか「たまには私たちの心情を味わえ!!」という声が聞こえる。

ハ「そうだけどさ……。あと外野はだまってるー!!」

人「とにかく、今回は「」で済ませるぞ。」

ハ・霧「あ、ちよっ!!」

<暗転>

第11話『竜達の住まう世界、ミオガルナ』（前書き）

人「今回はオリジナルの展開。モンハンとのクロスになるのかな。」

ハ「モンハンって作者がハマってるゲームだっけ？」

人「ああ、年末にMHP3rdが発売予定ということもあり、現在再熱中だ。」

ハ「そんな情報いらんわ！」

人「ああ、今回は原作キャラは出てこない。代わりにオリジナルキャラが登場する。」

ハ「へ〜・・・とうかき、モンハンのモンスターと戦うんだよね、俺。」

人「その通りだ。」

ハ「・・・死ぬる」orz

人「ああ・・・こればかりは何も言わん。」

霧「いい加減始めますよ。〜とある水使いの物語〜 第11話ミッシェンスタート。」

第11話 『竜達の住まう世界、ミオガルナ』

手にしたのは魔導の力。

知ってしまった秘密と事件。

そして皆が知りえない事件の真相。

それをどうにかできるのは……

〈地球時間12月7日 AM9:00 管理外世界『ミオガルナ』〉

ここはとある管理外世界。

ネーベルが管理局にハッキングして管理世界に該当しなかった世界。

ここは自然豊かな星で文明自体もそれほど発展しているわけじゃない。

でも、この世界には他の世界に類を見ない存在がいる。

鳥竜・飛竜・魚竜と呼ばれる、ドラゴンのようなモンスター達。

そしてそれらを凌ぐ、圧倒的な存在古龍。

それらを討伐し、時には保護し自然と共存する世界。

そんな世界に俺とネーベルはいる。

そう・・・闇の書、いや、夜天の書の完成を目指すために。

とある水使いの物語

第11話『竜達の住まう世界、ミオガルナ』

同日 ミーグル村村長宅

朝ごはんも食べた、原住民の人たちから情報も集めた。

よし！

「んじゃ、そろそろ動こうか。ネーベル。」

しかし、いいのですか？こんな面倒なことをしなくても・・・

「いいんだよ。ここって管理外世界だろ？」

そんな世界で魔法の痕跡を残すのはやばいし、下手すると生態系にまで影響与えちゃうからね。

だったら正々堂々といったほうが、後々面倒にならないだろ。」

そう、自分の世界じゃないとはいえ、あまり好き勝手するのは良くない。

「だから。」

……わかりました。ではもう一度確認しましょう。

今回のターゲットは曲りなりにも竜と呼ばれる種族。用心に越したことは無いでしょう。

「そうだね。あとはなるべくこの世界に悪影響を与えないようにしないと。」

あとは、こいつか。」

今俺の手の中には一冊の本がある。

正確には本の形をしたデバイスだ。

これに蒐集したリンカー・コア保存して、夜天の書に移すことでシ

グナムたちの手伝いをする。

そう、俺はシグナムたちの手伝いをする事になった。

驚いたよ。まさかはやてが闇の書、夜天の書の主って知った時はね。

そんでネーベルがハッキングした時に偶然発見したあるデータファイル。

そこにはとんでもない計画がかかれてあった。

それを知った俺はシグナムたちに協力することにした。

でも、一つだけ問題があった。

高町たちだ。

グレアムさんの計画は正直賛成できない、むしろ怒りすら沸く。

でも約束、高町やテッサとの約束も無碍にできない。

それを隠し続けながら、顔を合わすのは正直辛い。

だから俺はネーベルとこの世界に飛んできた。

それがこの世界にいる理由だ。

機能は正常に作動しています。あとはターゲットを弱らせ蒐集行為をするだけです。

まずはギルド、集会所に行って狩猟許可を得ましょう。

「そうだね。んで報酬を貰わないとね。

さすがに長期間の野宿はつらい、というかここじゃ凍え死んじやうからな。」

ここミীগル村は雪山の中腹にある小さな集落。

転移先から一番近い集落がここだったんだよね。

よし、集会所に行くかな。

〔同日 AM9:20 集会所〕

今日は朝から新米ハンターの子がくると村長さんから連絡があった。

毎度のことだけどどんな子か楽しみだわ。

そんなことを思っていると入り口から一人の男の子が入ってきた。

「すみません。ハンター登録の受付はこちらでしょうか？」

それを聞いた瞬間私は驚いた。

若いとは聞いていたけどまさかここまでとは普通思わないわ。

どうみても10歳前後の男の子。村長さん曰く大丈夫だから、と云われているけど……

集会所に入ってまず目に入ったのはいくつも並んだテーブルと大きな暖炉。

そして奥にあるのは、様々な依頼が貼り付けてある大きな掲示板。

というか、俺が入った瞬間集会所にいるほとんどの人がこっちを向いた。

……いや、確かにわかるよ。

村長さんからも聞いたけど俺みたいな子供が来るようになるところじゃないしね。

さて、まずはハンターとして登録しないとね。

あ、受付見たいなところの横にいる人に聞いてみよう。

「すみません。ハンター登録の受付はこちらでしょうか？」

「あ……ええ……そうよ。あなたが村長さんがいつていた子ね。」

「はい、おそらく間違いありません。」

やっぱり驚いてるな。

”マスター、こればかりはしょうがありません。”

”そうだね。さっさと登録して狩りに行こうか。”

「驚いちゃってごめんなさい。私はこの集会所で、まあ案内みたいなことをしているわ。」

「初めまして、ハガルっていいです。よろしく願いします。」

「私はラミアっていつの、よろしくね。そういえば登録にきたのよね？」

「はい。村長さんからはすぐに済むって聞いたので、登録が終わったらさっそく行くこうと思ってるんですけど大丈夫ですか？」

「そうね、登録自体はこの書類を記入するだけだからすぐよ。ただ登録の後、簡単な説明を受けてもらうわ。」

「それは大丈夫です。あゝ・・・ただ一つ問題が・・・」

「何かしら？」

ううーん・・・そうだよね。よくよく考えたらすぐわかることじゃん。

こればかりはネーベルもわからないらしいし。

「えーっと、俺、字かけないん・・・ですよ。だから・・・」

「あらそつなの？」

「はい。恥ずかしながら。」

ううー、まじで恥ずかしい！

こんなことなら少し村長さんから字を教えてもらっとくんだった。

「そうね・・・それじゃあ私が代わりに記入してあげるわ。

あと字も教えてあげるから。」

「ありがとうございます。」

そうして俺の登録も済み、ハンターとしての説明を軽く受けたあと

早速狩りに出かけた。

ちなみにネーベルはすでにセットアップしてBJも展開している。

この世界の防具の代わりにしている。

理由は俺に合うサイズの防具がないから。

魔法に関しては勿論秘密にしてる。

BJも持ってきた防具ってことにしてる。

そいじゃま、一狩りいきますか！

〈同日 AM 11:15 雪山〉

あのとマスターのハンター登録が済み、現在はターゲットを狩猟するために雪山に来ている。

今回のターゲットはドスギアノスと呼ばれる鳥竜種。

その外見は恐竜ともとれ、その恐ろしさは単体としての強さではない。

群れで行動することによる数での強さ。

それがギアノスと呼ばれるモンスターの強さ。

「一応この飛竜達にもリンカー・コアはあるんだよね？」

そのようです。転移した時に遭遇した、あのイヤンクックと呼ばれる鳥竜。

わずかとはいえ、あれに有ったことからこの世界の飛竜たちにあると見て間違いないでしょう。

この世界で強大な力を誇る飛竜たちにはリンカー・コアがある。

といってもそこから蒐集できる量は極めて少ないだろう。

イヤンクックの魔力値はせいぜいE-程度だった。

そう考えると余り効率的とはいえないのかもしれないかもしれませんね。

マスターはそのあたりも考慮していると思いますが。

「ん〜・・・ギアノスばかりだな。」

倒したギアノスから蒐集をしながら感じた疑問を言ってみた。

というか、ギアノスから蒐集できる魔力なんて無いに等しいんだけど、しないよりはマシってことでしている。

そうですね。しかしドスギアノスから蒐集したとしても、おそらくイャンクック以下でしょう。

「うん、それは予想できる。たしかイャンクックのほうが強いんだっただよね。」

ええ、蒐集完了。

「よし次に行こうか。」

ギアノス程度だと特に弱らせなくても蒐集はできる。

バインドで動きを止めれば簡単だしね。

ただ、数がね……無駄に多いのよね。

そんな感じで、ターゲットがいるであろう頂上へ向けて進んでいる。

たださつきから様子がおかしい。

「ネーベル、なんか様子がおかしくない？」

ええ、何かに怯えている。いえ、何かから逃げているように思えます。

「うん。その途中で俺と遭遇して、邪魔だから襲ってる感じもするね。」

頂上に何か別のモンスターがいるのかもしれないね。

「とにかく行ってみよう。」

そうして俺たちは頂上へと向かった。

今にして思えばここで引き返せばよかった。

結果としてある程度魔力を蒐集できたからいいけどさ。

〈同日 PM 1:26 雪山頂上付近〉

……今の状況を整理しよう。

今回のターゲット、ドスギアノスを狩るために俺は雪山に来た。

そして様子がおかしかったけど、頂上にターゲットがいると思い進んだ。

頂上付近につき、岩陰から先を覗くとそこにいた。

確かにドスギアノスはいた。

そう……死体で。

岩の先にはドスギアノスのものと思われる頭が転がっている。

そしてその先にはとんでもないものがいた。

その見た目は話で聞いていた飛竜とは違っていた。

前足は異常に発達し、お世辞にも翼とはいいいにくい。

そしてその体表は虎のような柄の鱗に覆われていた。

・・・轟竜ティガレックス・・・それがこいつの名というのは後で知った。

そしてある程度熟練のハンターでないと討伐は不可能だということも。

本能なのだろう。俺はその場から逃げようとした。

しかしその時だった。

「GYAAAA!! GYAAAA!!」

一匹のギアノスが俺に向かって威嚇してきた。

おそらく逃げ遅れたのだろう。

とっさに俺はそいつの首を刎ねた。が、もう遅かった。

後ろを向くと、あの飛竜がこちらを向いていた。



第11話『竜達の住まう世界、ミオガルナ』（後書き）

人「以上、第11話でした。」

ハ「死ぬ！絶対死ぬってこれ！」

ハガル錯乱中。しょうがない、最後の最後でティガレックスと遭遇してしまっただから。

人「落ち着け。」

ハガルに向けて催眠スプレーをかける作者。そのまま眠ったハガルを部屋の隅に運ぶ。

人「とにかく今回登場した情報の設定を紹介するぞ。」

霧「今回は4つですね。」

人「まずはミオガルナについて。」

名前：管理外世界『ミオガルナ』

特徴：自然豊かな世界

詳細：

「MH」の世界と似て非なる世界。

この世界の竜種や竜人族にはリンカー・コアが存在するが、魔法のことは誰も知らない。

管理外世界といわれているが、実際まだ管理局には発見されていない世界。

人「説明にもある通り、MHとは似て非なる世界、ということにしている。」

霧「リリカルなのはの原作でもあった、【大型生物にはリンカー・コアがある】と、

いうのに目をつけたわけですね。」

人「そういうことだ。次にミーグル村と村の住人だ。」

「村」

名前：ミーグル村

特徴：雪山にある小さな集落

気候：気温は低く雪が降ることも多い

詳細：

雪山の中腹を利用して作られた小さな集落。

「ポツケ村」と似たような環境にあり、周辺にいるモンスターの生態も比較的近い。

温泉を水路を利用し集落全体に供給することで、生活に利用している。

ハンターのために集会所はあるが、それほど大きくは無い。

「キャラクター」

名前：？

性別：男

年齢：約100歳（見た目は40代後半）

種族：竜人族

身長：160cm

出身：管理外世界『ミオガルナ』

詳細：

ミーグル村の村長。

用事で集落の外に出ていた時、たまたま「ハガル」がイヤンクックを倒すところを目撃する。

この「ミオガルナ」でハガルの秘密を知る唯一の人物。

事情を知りハガルのことを「ラミア」に紹介する。

元ハンターでかなりの腕前らしい。

名前：ラミア

性別：女

年齢：？（見た目は20代後半）

種族：竜人族

身長：172cm

出身：管理外世界『ミオガルナ』

詳細：

ミーグル村の集会所のマスター。

集会所にくるハンター達からは「姐さん」と呼ばれている。

村長に紹介された「ハガル」を何かと気にかけている。

身体の起伏が激しい。（シグナム以上）

怒るとかなり怖い。

人「基本はモンハンのポケ村をイメージしてもらえば大丈夫だろう。」

霧「村長殿の名前がありませんね？」

人「村長が人に教えてないからだ。名前を知っているのはラミアくらいだ。」

ラミア（以下ラ）「あの人は村長であればそれでいい、と考えている人だからね。」

人「おう、来たのか姐さん。」

ラ「来ちゃったわ。これからしばらくは私も登場するのかしら？」

人「その予定だが、今のところ出てきてもミオガルナ編だけだ。」

ラ「あら、寂しいわね。まあいいわ。その間にハガルちゃんとフラグを立てればいいんだし。」

人「んゝそれでも精々姉弟程度だぞ？」

ラ「それでもいいわ。」

霧「そういえば本編のラミア殿は私の存在を知っているのですか？」

ラ「知らないわ。でも今後の展開ではわからないわね。」

人「それじゃあ今回はここまで。」

ラ「次回もよろしくね。」

<暗転>

第12話『決着と報告』（前書き）

ハ「それでは本編12話となる今回ですが。」

霧「マスターvsティガレックスですね。」

ハ「そう。それじゃあさっそくだけど本編いってみよう。」

霧「〜とある水使いの物語〜 第12話、ミッションスタート!」

第12話 『決着と報告』

大切な友達を助けるため。

大切な家族を守るため。

大切な約束を守るため。

俺は・・・

私は・・・

この力を使う。

今回のクエストは簡単なはずでした。

マスターの実力を考えればすぐ終わるはず……

そう……終わるはずだった。

しかし、何事にもイレギュラーというもの存在する。

そして今回それは私たちの前に現れた。

……暴虐の化身となって……





でも勢いまでは消せず、そのまま俺は吹っ飛ばされた。

体の痛みを耐え、すぐに体を起こしティガレックスを見る。

すると奴自身も着地の影響ですぐには動けなかったらしい。

こっちとしては救われたよ。

マスター撤退しましょう。

「いや、ダメだ!！」

何故です!?! 相手をするとしても、今のマスターでは危険です。

それはわかってる・・・でもね、今回ここに来たのは蒐集をするため。

そして蒐集は八神を助けるため。

そのためにザフィーラさん達も頑張ってるんだ。

だから・・・

「俺だけ逃げるなんてできるか!!」

・・・わかりました。なら私は全力でマスターをサポートします。

「ネーベル・・・ありがとう。」

そして俺は敵である相手を見据える。

向うもさっきのシールドが不思議だったのか警戒している。

だったら今のうちに。

「ネーベル、結界と身体強化の補助頼む！」

あとセンチネルをグロースにして。あれなら威力を稼げる。」

ネーベルがカートリッジを2つ使用し、一時的に体に魔力がみなぎる。

1つは結界、もう1つはセンチネルの形状変化に使用する。

g r o     S c h w e r t (グロース・シュヴェーアト)

結界展開及び身体強化完了。強化率は200%。

「んじゃ、行くぞー！」

グロース・シュヴェーアト・・・センチネルの第2形態で、形状は大剣。

俺よりも大きく武器としてだけではなく、その丈夫さを利用し盾としても使える。

ただし重量もあり、攻撃の際が大きくなるためクリンゲよりも扱いづらい。

俺は連駆れんくを使い高速でティガレックスへと向かう。

やつは俺に向けてその強靱な右前足を振るうが、俺はそれを上へジャンプすることでかわす。

そして突進の勢いとセンチネルの重量を利用し、縦の回転切りをする。

斬撃は奴の体にあたったが、その硬い鱗により表面しか傷つけることができなかった。

「GYAAA!!」

「んな!?!」

やつもただやられているだけじゃない。

体を横回転させ、体全体で俺を弾き飛ばしに来た。

それをセンチネルで受けるが、空中にいたこともあり軽々と吹き飛ばされた。

俺が着地した時に、すでにティガレックスは次の行動に移っていた。

「うお！？つて雪か！？」

前足で山肌を削り、雪と岩を同時に飛ばしてきた。

「シールド！！」

Schild

「うぐ……。」

くそー、あいつの攻撃全部がスキだらけだけど、大きな体と異常な力でそれをカバーしている。

なんとか動きを止めないと。

「ネーベル、バインドをあいつに！」

了解。  
Wasser ヴァッサー Fesseln フェッセルン

「GAA!？」

バインドで奴を捕獲した……

「よし！つてなにー!？」

……と、思ったら奴は単純に「力」だけでそれを突破しやがった。

どんだけ力が強いんだよ。

内心焦りながら奴と距離をとる。

が、その距離さえ奴からすれば少しらしく、一瞬で距離を詰められた。

スピードもなかなかある・・・やばいな。

すれ違いざまに左薙ひたつに斬りつけるも、あまりダメージを与えたように思えない。

あの鱗さえ突破できれば・・・ん？

内部にダメージを与えるなら、連楔砕か崩をすればいいんじゃないか！

そつだ、何も魔法やセンチネルを使わなくてもいいんだ。

そつとなれば・・・

「ネーベル、センチネルをいったん収納してくれ！」

武器を手放すなんて正気ですか！？

そつだよね。普通そつ思うよ。

でも俺は違うんだ。

「センチネルの扱い、特に大剣はまだ慣れてない。

だったら無手の方がやりなれてるからまだ戦い易いはずだ！」

しかし・・・

「身体強化を限界ギリギリまでしてくれ！」

そうすれば何とかできる・・・いや、何とかする!!！」

今の状態で、奴の攻撃をかわしながら戦うのは正直つらい。

だったらまだ戦い易い方に懸ける。

わかりました。私も全力でサポートします。

絶対にマスターは死なせません。

「ありがとう・・・」

センチネル収納。身体強化率上昇。



そのまま連続で攻撃しようとしたが、奴も曲りなりにも竜と呼ばれる種族だけある。

その異常な回復力で持ち直し、右前足で腹の下にいる俺をたたき出した。

しかし今までと違うことが発生した。

奴が連続で攻撃を仕掛けてこなかったことだ。

やはり今のは有効打になったのだろう。

だったら・・・

「倒せる、ね。」

ええ。ただし気を抜かずにいきましょう。

「もちろんだ!!」

「G A A A A A A A A A!!」

あれからどれくらいたったのだろうか？

結界はすでに解除している。

今、この雪山の頂上には俺とティガレックスしかない。

そしてそのティガレックスは俺の目の前で力無く横たわっている。

「や、やった・・・」

オートヒール

「ありがとう、ネーベル。」

あのあと俺が奴の右目にセンチネルを突き立て、視界を奪ったことで何とか勝利を得た。

ティガレックスもギリギリ息があり、これから蒐集を行うところだ。

「ネーベル、悪いけど……蒐集……代行してくれる？  
正直……い、ま……喋るのもきつい……」

了解。おそらく身体強化の反動と戦いの疲労、さらに怪我の影響  
でしょう。

「そう、か。」

ああ、やっぱり無理しちゃったか。

そうして俺とネーベルは蒐集をしたあと、予め渡されていた帰還筒  
(クエスト終了を知らせるもの)を

使って狩りが終わったことを知らせ、迎えを待つことにした。

結局ティガレックスから集まったのは5頁ほどで、イヤンクックと

ギアノスのものと、

あわせると合計で約8頁分もの魔力を集めることができた。

「えええええ!!」

ミーグル村の集会所で受付嬢で、看板娘のアーラさんの驚きの声が  
こだました。

「どうしたい、アーラちゃん？」

「あ、なんでもありません！お気になさらず。」

「そうかい。」

そのせいでこの場にいるハンターの人たちの視線が、俺とアーラさん、  
ラミアさんへと集中する。

しかし、それも一瞬ですぐさま各々のグループの会話へと戻っていた。

ちなみにアールさんの容姿は、栗色の髪に碧の瞳で少し垂れ目、顔は世間一般でいえば美少女で通るだろう。

腰まで届く髪は後ろで三つ編みに纏めている。

体はラミアさんほどじゃないしろ、かなりメリハリがある。

ちなみに年は16歳らしい。

・・・クロノさん、男女の差があるとはいえ、あなた身長負けてますよ・・・

「クエスト中に予想外のことがあるとわいえ、まさかドスギアノスの討伐クエストにティガレックスが出てくるなんてね。

私も長い間マスターをしているけど、こんなことは初めてよ。」

「しかもそれを討伐しちゃったんだよね！？すごい！すごいよハガール君！！」

今現在俺は、クエスト報告というものをしている。

そしてアーラさんとラミアさんは、今回のクエストにティガレックスが出てきたことに驚いている。

アーラさんは若干違う気がするが・・・

「でもよく倒せたね？怪我とか大丈夫？」

「ええ、まあ、なんとか。死ぬかと思いましたがね・・・」

「そうよね～。ハガルちゃん、いったいどうやって討伐したの？」

「あ、それ私も気になる！だってハガル君ってまだハンターなり立  
てで、しかも今回のクエストがはじめてなんでしょ？」

それなのにいきなりティガレックスを討伐しちゃうなんてすご  
きるよー！」

戦った俺が一番わかってたことだが、確かにアレは強かった。

それこそイヤンクックなんて目じゃなかった。

でもなあ・・・どうやって倒した、か。

魔法のことは言えないからな・・・

適当に誤魔化そうか。

「あのですね。」

「うん!!--」

受付のカウンターから体を乗り出して聞いてくるアーラさん。

というかね、顔が近いよ。

ラミアさんはラミアさんで、俺を後ろから抱きかかえてるし。

「お、落ち着いてください。ラミアさんも何してるんです!?!?」

「あら、だって抱き心地がいいんだもの。いいじゃない。」

「いいじゃない、って……頭に胸当たってるんですけど。」

「気にしない気にしない」

「で!どうなの!?!」

「わかりました!言いますから。ラミアさんも講義したところで止める気ないんでしょう?」

「あら解ってるわね」

それから下報告は真実半分嘘半分、といったところだろうか。

その場に居なかった二人は納得したようだ。

んで、報酬の話になったわけだが。

「ハガルちゃんには悪いんだけど、今回のクエストはドスギアノス討伐と同じだけしか出せないの。」

「……まじですか?」

「そうなの。ハガル君には悪いけど、今回はあくまでもドスギアノス討伐だからね。」

「ティガレックスはイレギュラー扱いなんだ。」

「だから追加報酬はないの。ごめんね・・・。」

「まあなんとなく予想はできてたけどさ。」

「その代わりなんだけど。」

ん？

「しばらく私の家で寝泊していいわよ。というか、あなた仮宿舎の登録して無いでしょ？」

「そつえば・・・。」

「ここミーグル村に派遣されたハンターは、自分の部屋として仮宿舎に登録する必要がある。」

もしくは集落の誰かの家に居候するか。

「それでね、今仮宿舎が全部埋まって空気が無いの。」

「ハガル君がクエストに行っている最中に、新しい人が来て埋まっちゃったんだ。」

「え？俺って村長さんのところに住むんじゃない？」

「ん〜、それは難しいわね。子供とはいえ村長さんの家に村の住人でない人が住むのは、ね。」

確かにそうだよな。

ん？ということば……

「俺に拒否権というか選択権ないじゃないですか!？」

「そうよ アーラちゃんの部屋も考えたんだけど、彼女の部屋は一人部屋だからね。」

「ごめんね、ハガル君。」

「……わかりました。よろしく願いします。」

「ええ、こちらこそよろしくね。」

親切でやってくれているのはわかる。

でも少し面倒なことになってきたな。

蒐集もしなきゃいけないのに……

じじいおじい

〜く〜じじい

第12話『決着と報告』（後書き）

ハ「そういえば作者どうしたの？」

霧「今回の話がなかなか纏まらず苦戦していたようです。

その影響か、現在燃えつきかけています。」

ハ「モンハンとクロスしたとはいえオリジナルの展開だったしね。

というか文才無いのによくやるよ。」

霧「たしかにそうですね。二日かけてこれですからね。」

二人の言葉がどこかへ刺さる音がする。

ハ「今後の展開としては、ミオガルナ編をあと少ししたら原作キャラ、  
ラ、

ザフィーラさんたちと合流するんだよね？」

霧「そのようです。そして一気にクライマックスまで行くらしいのですが……。」

ハ「どうしたの？」

霧「作者曰く、どんな形にするか決まっているけど文にできない、らしいです。」

ハ「なんとまあ……。そうだ。今回出てきた設定を紹介しないとね。」

〓 人物 〓

名前：アール

性別：女

年齢：16歳

種族：人間

身長：154cm

出身：管理外世界『ミオガルナ』

詳細：

ミーグル村の集会所の看板娘で受付嬢をやっている。

栗色の髪に碧色の瞳で若干垂れ目、髪は後ろで三つ編みにして纏めている。

世間一般で言うところの美少女といえる。

スタイルもいいがラミアと比べると……。 (16歳のアリサレベル)

人見知りをせず明るく、かなり押しが強い性格をしている。

〓 魔法 〓

名前：シルト (Schield)

系統：ベルカ式・防御・シールド

強度：術者しだい

詳細：

単純なシールド魔法。

名前：ヴァッサー・フェッセルン (Wasser Fessel

n) (水の束縛)

系統：古代ベルカ式・捕縛・バインド

発動：A

射程：C

詳細：

水の特性を持ったバインド。

といっても普通のバインドとなんら変わらない。

Ⅱ デバイスⅡ

・ センチネル追加情報

名前：グロースシュヴェーアト (gro Schwert)

詳細：

センチネルの形状変化の1つ。

大剣形態でその大きさは使用者よりも大きく、体が隠れるほどである。

全形状の中で最重量となる。

霧「以上ですね。オリジナルキャラ、また出てきましたね。しかも女性。」

ハ「そうだね・・・どうなるんだろ？」

霧「神、いえ。作者のみぞ知る、と言ったところでしょうか。」

ハ「・・・そうだね。作者も居ないし今日はここで終わろうか？」

ラ「それじゃあ読者様。またね。」

ハ・霧「ラミアさん(殿)！？」

< 暗転 >

## 設定資料・その2（12話までの追加分）（前書き）

今回は設定資料のみです。

前回同様、各話で紹介している設定を纏めただけのものです。

そのため見なくても、作品を読むことに影響があるわけではありません。

オリジナルの設定が、わからない・気になる、と思っただけで見られる程度で大丈夫です。

## 設定資料・その2（12話までの追加分）

Ⅱ 主人公Ⅱ

名前：海波うみなみ ハガル

性別：男

年齢：10歳

生年月日：11月6日

人種：地球人 日本人と北欧人のハーフ

身長：132cm

体重：身長に見合った程度

血液型：B

出身地：第97管理外世界（現地惑星名称「地球」）日本・海鳴

魔法術式：ベルカ式

魔導師ランク：A - （保有魔力はA + 相当）

魔力光色：鋼

好き、得意なこと：物作り（ジャンルは問わない）

好きな物：干し肉

嫌い、苦手なこと：人の死

嫌い、苦手な物：ゴージャ

使用デバイス：ネーベルリッター

詳細：

前回の設定資料を参考。

追加情報

「水」の魔力変換資質の持ち主。

空戦可能。

レアスキル魔力吸収を扱える。

長年、魔力吸収の影響下にありながら放出することをしていなかったため、

リンカー・コアに欠損が生じ攻撃魔法が使用できない。

防御・補助系の魔法は扱える。

使用バリアジャケット（騎士甲冑）

名前：クロイツリッター（十字騎士：K r e u z R i t t e y）

詳細：

ハガルが使用する基本のBJ。

基本色はグレー。

ハガルのイメージで「魔法使い＋騎士」という一見するとどちらともとれるデザインとなっている。

背中には赤い十字架が描かれている。

インナーは上下黒で上はノースリーブタイプ。

防御と動き易さに重点を置いて設定されている。

（イメージ：「MHP2G」にある「フルフルZ」の袖とマスクのないバージョン。）

デバイス

名前：ネーベルリッター

種類：インテリジェンス・デバイス

詳細：

通称「霧の騎士」、愛称「ネーベル」。

管理人格は女性。

両腕に装着する籠手型のデバイス。

普段（待機状態）は緑色の宝珠のついた羽根状のアクセサリとして首にかけられている。

特殊なカートリッジ・システムを両方に搭載。

片方8発のカートリッジを腕を包むように円形に配置して、外への排出機構をオミットしている。

これは魔力吸収を使用できる者用に生み出されたネーベルの特徴となっている。

吸収した魔力の一部を空のカートリッジに自動でまわす事で半永

続使用を可能としている。

過去の主をオールドマスター、現在の主ハガルをマスターと呼んでいる。

ECM機能が搭載されており並のセンサーでは感知出来ない。

古代ベルカ時代（聖王時代以前）のデバイスで、魔力吸収を扱える者用に生み出されたデバイス。

経緯は不明だが、管理局に保管されていた。

ミッド式を主流とする局員や数少ないベルカ式の使い手にすら反応せず、解析もできない状態で準ロストログア指定されていた。

本局にきたハガルに反応したため、グレアムの権限でハガルのデバイスとなり、以後専用のデバイスとなる。

ケーニヒ・フォルム（第1形態）  
国王：Konig

籠手型（イメージはMHP2GバサルX）で基本形態。

若干防衛よりになっているが全体のバランスが非常によく燃費もいい。

BJ：クロイツリッター（基本形態）

名前：センチネル

種類：アームド・デバイス

詳細：

片刃の双剣型デバイス。

待機状態ではネーベルに収納されており、展開すると腰に装着される。

クリンゲ<sub>ハ</sub>刀：Klinge

基本形態。

小太刀ほどの大きさだが刃がやや幅広になっている。

グロスシュヴェーアト<sub>ハ</sub>大剣：gro Schwert

センチネルの形状変化の1つ。

大剣形態でその大きさは使用者よりも大きく、体が隠れるほどである。

全形状の中で最重量となる。

## 魔法・技術

名前：崩くずれ

系統：帝護神一派・清心覇軍流戦場古武術

詳細：

中国拳法の浸透径のような内部破壊技。

「砕」と違い外部に攻撃の跡がつきにくい。

名前：魔力吸収

系統：古代ベル力式・特殊

詳細：

魔力吸収率を大幅に上げるスキル。

術式による発動と常時発動型の2種類がある。

術式型は適性があれば使用できるが常時発動型は先天的なものなのでさらに使用者が限られている。

常時発動型は呼吸と共に魔力素を吸収できる。

また意識することで、吸収できる量を変えることができる。

他者の魔法から吸収することもできるが、魔力運用と処理が難しく他の魔法との併用は厳しい。

どんな魔法でも吸収できるというわけではなく、物質加速式や魔力変換に使用された魔力は可能、物質や現象（電気など）は不可。

相手に触れることでも吸収ができる。

使用者によって魔力の吸収口（出入り口のようなもの）に差があり、その差が能力の差となる。

それでも反則といってもおかしくない能力をもつ。

ちなみに、魔導生命体は身体を吸収され消滅してしまう可能性もある。

名前：シルト（Schield）

系統：ベルカ式・防御・シールド  
強度：術者しだい  
詳細：

単純なシールド魔法。

名前：ヴァッサー・フェッセルン (W a s s e r F e s s e l  
n) (水の束縛)

系統：古代ベルカ式・捕縛・バインド

発動：A

射程：C

詳細：

水の特性を持ったバインド。

といつても普通のバインドとなんら変わらない。

「?????」

名前：仮面の男

性別：男

年齢：?

身長：約170cm

詳細：

シャマルを助けた仮面の男。

左半分に赤い龍の模様がある白い仮面を着用し、赤い外套を羽織っている。

外套は「F a t e」のアーチャーのものに似ている。

シャマル曰く、何者かの変装らしい。

また闇の書についてそれなりの知識をもっている。

「ミオガルナ」

名前：管理外世界『ミオガルナ』

特徴：自然豊かな世界

詳細：

「MH」の世界と似て非なる世界。

この世界の竜種や竜人族にはリンカー・コアが存在するが、魔法のことは誰も知らない。

管理外世界といわれているが、実際まだ管理局には発見されていない世界。

名前：ミーグル村

特徴：雪山にある小さな集落

気候：気温は低く雪が降ることも多い

詳細：

ミオガルナ北部にある、雪山の中腹を利用して作られた小さな集落。

「ポツケ村」と似たような環境にあり、周辺にいるモンスターの生態も比較的近い。

温泉を水路を利用し集落全体に供給することで、生活に利用している。

ハンターのために集会所はあるが、それほど大きくはない。

「ミオガルナの住人」

名前：？（村長さん）

性別：男

年齢：約100歳（見た目は40代後半）

種族：竜人族

身長：160cm

出身：管理外世界『ミオガルナ』

詳細：

ミーグル村の村長。

用事で集落の外に出ていた時、たまたまハガルがイヤンクックを

倒すところを目撃する。

このミオガルナでハガル」の秘密を知る唯一の人物。  
事情を知りハガルのことをラミアに紹介する。

元ハンターでかなりの腕前らしい。

名前：ラミア

性別：女

年齢：？（見た目は20代後半）

種族：竜人族

身長：172cm

出身：管理外世界『ミオガルナ』

詳細：

ミーグル村の集会所のマスター。

集会所にくるハンター達からは「姐さん」と呼ばれている。

村長に紹介されたハガルを何かと気にかけている。

身体の起伏が激しく、スタイルがいい。（シグナム以上）

怒るとかなり怖い。

名前：アーラ

性別：女

年齢：16歳

種族：人間

身長：154cm

出身：管理外世界『ミオガルナ』

詳細：

ミーグル村の集会所の看板娘で受付嬢をやっている。

栗色の髪に碧色の瞳で若干垂れ目、髪は後ろで三つ編みにして纏めている。

世間一般で言うところの美少女といえる。

スタイルもいいがラミアと比べると……（16歳のアリサレ

ベル)

人見知りをせず明るく、かなり押しが強い性格をしている。

第13話『温もり、第二の仮面』（前書き）

人「今回は前半がミオガルナ編、後半がハガルがミオガルナに居た時に起こった事、となっております。」

ハ「珍しく敬語だね？どうしたの？」

人「ちよいと思うところがあって・・・」

ハ「へえ。まあ何かは聞かないよ。」

霧「それでは、とある水使いの物語」 第13話、ミッションスタート。」

第13話『温もり、第二の仮面』

順調に進む蒐集。

騎士達の思いと魔導士達の思い。

すれ違うまま時は過ぎゆく。

ついに奪われた力。

その時俺は……

とある水使い物語

第13話『温もり、第二の仮面』

12月17日 PM 2:13 集会所

あれから十日たち、色々な竜を狩り、俺は順調に魔力を集めている。

「それにしてもたった十日で、ここまで成果を出すなんてね。」

「それもこれも、行くクエスト先で必ずイレギュラーと遭遇してるからだよね。」

「そうよね。普通ここまで連続しないわよ。」

「ハガル君ってもしかして運ない？」

「……………ですよね。」

そう、俺は行く先々で予定外のモンスターに遭遇している。

例えば…………

〓ケース1〓

ターゲット：リオレイア

実際に遭遇した個体：リオレウス亜種×2、リオレイア亜種

遭遇理由（予想）：雌をかけた争い

〓ケース2〓

ターゲット：イヤンクツク

実際に遭遇した個体：イヤンガルルガ×3

遭遇理由（予想）：縄張り争い

〓ケース3〓

ターゲット：バサルモス

実際に遭遇した個体：バサルモス×2、グラビモス、グラビモス亜種

遭遇理由（予想）：不明

最後のケース3は本当に死ぬかと思った・・・

グラビモスの熱線とか下手な砲撃魔法より強力だろ。

しかもあいつの体表って、それこそ鎧竜の名の通り超堅かったし。

それでもなんとか全部討伐、もしくは捕獲してたんわけだ。

もちろん蒐集目的で、だよ？

それに修行も兼ねていたこともあって、いくつか新しい魔法も覚えられた。

毎回こんなクエスト内容で、生きて帰ってきてさらに狩ってくるモンスターがすごいから、

この集会所じゃちょっと話題になりつつある。

・・・というかなってる。

「おお、坊主。今回はまたえらい目にあったらしいな？」

「ええ・・・まあ、死ぬかと思いました。」

「俺だったらリタイアしちまうな。」

「今回遭遇したやつはチームで行ったとしても相当手こずるからな。」

「そうなんですか。」

「そうだな、うちの集会所のトップでもかなり厳しいんじゃないか？」

「いやいや、あいつ等なら難なくクリアしそうじゃね？」

「ちがいねえ。」

「ガハハハハ！！！」

皆まだ昼だというのに、俺話題にお酒を飲みながら話している。

俺はというと、カウンター席で遅めの昼を食べながら時折相槌をついている。

” 順調といえば順調にたまりましたね。 ”

” その代償として、俺は毎回ボロボロになってるけどね・・・ ”

” やはり無理をしすぎではありませんか？ ”

” そろそろ一度合流し、経過報告をした方がいいと思います。 ”

” そうだね。あとシャルマルさんに治療してもらおう。 ”

” ネーベルも専門じゃないし、俺の応急処置も限界あるからね。 ”

そう、順調に集まっているが俺の体はボロボロだ。

怪我也治りきっていないし、打撲に切り傷も少なくない。

今もオートヒールと痛覚緩和の魔法で何とか誤魔化しているだけ。

あとあと影響ありそうで怖いよ。

「そういえばハガルちゃん、村長さんからそろそろ村を発つって聞いたけど本当なの？」

「え！？そつなのハガル君！？」

「元々旅の途中でしたし、そろそろ次の目的地に行こうかになって。」

勿論嘘。俺の秘密を知る村長さん以外には、俺はちょっとした事情で旅をしていることにしている。

なのでここを離れるには次の目的地に行くということにしなけりゃいけない。」

「そうなんだ・・・、寂しくなっちゃうね。」

「アーラちゃん、そんな顔しないの。別に今生の別れじゃないんだから、ね?」

「そうですよ。またこっちに来ることが会ったら必ず寄りますから。」

「うん!絶対だよ!」

「だから顔近いです。」

「あらあら。ハガルちゃん、次はどこに行くつもりなの?」

「あ、それはですね。海を渡って別大陸に行こうかと思ってるんです。」

だからとりあえず大きな船のある町を目指そうかと思ってます。」

「となると、ここから一番近いのはトレスフォーかしらね。」

結構大きな港街だし、そこだと定期的に貿易船も来るはずよ。」

「地図もあるからあとであげるね。」

「ありがとうございます。」

うん、やっぱりここはいいところだ。

自然が豊かで、なにより人が温かい。

うん、また今度来よう。必ず。

俺はこの時あんなことが起こっていたなんて知らなかった。

ヴォルケンリッターとアースラ勢との戦い。

そして仮面の戦士……

〈12月11日 とある管理外世界・密林地帯〉

私はここでヴィータちゃんがいるということでお話をしにきました。

でもヴィータちゃんは私の話を聞いてくれず、結局戦う形になりました。

そして、久しぶりに超長距離砲撃をしたのですが……

「あ……」

直撃ですね

「・・・ちょっと、やりすぎた？」

いいんじゃないでしょうか

もしかしてレイジングハート、前の戦闘のこと根に持ってるのかな？

ヴィータちゃんに壊されちゃったし。

それよりもヴィータちゃん。

そろそろ爆煙が晴れてきたので、私は煙をじっとみていました。

「あ。」

そこには無傷のヴィータちゃんと、前とは違う仮面の男の人が居ました。

やばい！

そう思った瞬間、突然目の前に変な奴が転移してきた。

そしてそいつはあたしを守るようにシールドを張った。

「あ、あんたは？あいつか？いや、ちげーな。誰だお前？」

「逃げる。闇の書を完成させるのだろ？」

その言葉にあたしは我にかえった。

そつだ。あたし達の目的は闇の書の完成。

こいつにかまってる暇なんかねーんだ。

だったら管理局がいるここには用はねえ、さっさと転移して次の獲物を探さねーと。

転移しようとした時、高町なんかが砲撃をしようとしてきたけど、仮面の男がバインドをして動きを封じた。

あの距離を一瞬で……ただもんじゃねえな。

「バインド！？そんな。あんな距離から、一瞬で？」

しかも結構強力。あ、ヴィータちゃんが転移しちゃっ！

「くっくっくっくっ。」

なんとかバインドを解除したけど、もうそこにはヴィータちゃんも、そしてあの仮面の男の人も居ませんでした。

すみません、マスター

「ううん。私の油断だよ。」

そう、レイジングハートは悪くない。

今回は私の油断と、あの仮面の人の乱入でこうなっちゃったんだ。

でもあの仮面の人。なんだか前の人と違う気がする。

うまくいえないけど雰囲気違った。

なんでだろう……

〈同日 砂漠地帯〉

フェイト・テストロッサ。

今私の目の前にいる若きミッドの魔導士。

蒐集目的でこの地に来たがまさか管理局に見つかるとはな。

いや、それほど躍起になって私たちを、いや主を探していたのだから。

それにしても・・・あのスピード。

ここにきて尚速い。目で追えない攻撃が出てきた。

早目にきめないとまずいな。

シュツルムファルケン、当てられるか・・・

「えあ！！」

「はあ！！」

お互いほぼ同時に踏み込んだ。

その時だった、テストロッサの背後に突如仮面の男が現れ、テストロッサの胸から腕を貫通させていた。

「な!?!」

私もテストロッサもその光景に、何が起こったかわからず驚愕していた。

テストロッサにいたっては、自身の体から腕が突き抜けているのだ。

その驚きと戸惑いは私の比ではないだろう。

「テストロッサ・・・」

「あああ・・・。ああああああ!?!?!」

奴が何かしたのかテストロッサが突然苦しみだした。

「貴様！！」

そして、奴の手の中にあるものを見て、私は再び驚いた。

奴の手の中にはテストロッサの物であろうリンカー・コアがあったのだから。

「さあ。奪え。」

「……」

「闇の書の完成のためだ。迷うな。」

「くっ！」

そうして私はテストロッサのコアを蒐集した。

仮面の男は蒐集が終わったと同時に転移していった。

あの男、あいつとは違った。

奴はいいたい・・・

くじくく

### 第13話『温もり、第二の仮面』（後書き）

人「以上、第13話でした。いかがでしたでしょうか？

今回はゲストとしてミーグル村よりラミアさんに来ていただきました。」

ラ「どうも〜ラミアです。」

何時ものノリのラミア。

ハ「お世話になりました。しかし、ミオガルナの人はいいい人だったな〜。」

霧「そうですね。」

人「ミオガルナの人がっていうか、ミーグルの人がなんだけどね。」

ラ「ありがとう。うれしいわ。」

ハ「それにしてもさ。」

人「ん？」

ハ「俺のクエスト状況ひどくない？ありえないでしょ、普通！」

人「お前の運が無かったただけだ。」

ハ「それにしても異常だつて!!」

注意：実際のMHP2Gではこのようなクエストは存在しません。

人「それはいいとして」

ハ「いいのかい!？」

ラ「ハガルちゃんの運のなさよ、きつと。」

人「そうですね。と、話を戻しますけど、今回の後半は少し時間をさかのぼってみました。」

ラ「原作でフェイトちゃんが蒐集されちゃうところね。」

人「あとなのはが初めて仮面の戦士に遭遇するところですよ。」

ちよつとネタバレになります。この段階ではアースラ側は仮面の男と仮面の戦士は仲間だと思っっています。」

ハ「まあ両方仮面着けてるし、ヴォルケンの手助けしてるからね。」

人「実際は違うんですけどね。さて、話は変わりますが設定の紹介です。」

ラ「トレスフォーのことね。」

名前：トレスフォー

特徴：海が近い街  
気候：日本に近い

詳細：

ミオガルナ中部にある貿易で栄えた港街。

冬がなく、夏もそれほど暑くならずとても過ごし易い。

人の出入りが激しく犯罪も多く、そのためギルドナイトの支部がある。

ハンターも多く在住し、集会所はミオガルナでも有数の大きさ。

人「まあ名前だけなんですけどね。今後ミオガルナの話を書くときに登場するかもしれませんが。」

ラ「私としては、番外編でもいいから書いてほしいわね。」

人「一応考えてはいますよ。」

霧「次回ですけど、どういう風になっているのですか？」

人「とりあえずヴォルケンスと合流、あとはアースラ側を書くころかと思ってる。」

ハ「思ってる、ってことはまだ書いてないんだね？」

人「うん……。しかも番外編を書き始めたからまだかかりそうだね。」

「ちなみにその番外編は10年後、つまりStrikersの話です。」

ハ「とりあえず本編進めようよ……。」

人「つい思わず……」

ラ「まあ作者さんも息抜きが必要だからいいんじゃない？」

ハ「まあいいか。んじゃ、ネーベルメよろしく。」

霧「それでは、次回をお楽しみにお待ちください。」

<暗転>

番外編『10年後の春』（前書き）

この話には作者が息抜きに執筆したものです。

いくつもギリギリもしくは完全なネタバレがあり、それがいやな方は読むことをお勧めしません。

あと、この話はいくつもある未来の結果の一つです。

今後の進行しただいではキャラクターの関係性などが変化するかもしれない。

それでは番外編、どうぞ。



「ああ、そうだ。今日は六課解散の日か。」

マスター、おはようございます。

「おはよう、ネーベル。」

時空管理局古代遺物管理部機動六課は、広域次元犯罪者ジェイル・スカリエツティが起こした通称JS事件。

その事件の解決にもっとも貢献部隊。そしてその部隊が本日解散となる。

六課を存続させるという話もあったが、その部隊を指揮するよう八神に話がいつていたが八神がそれを辞退。

結果、機動六課存続は無くなった。といっても一時的だと思う。

八神が辞退したのは自分の能力の低さを知ったためであり、部隊長をすることがいやだったわけではない。

いずれ六課は復活する、それも近いうちに。俺はそう思っている。

八神 はやて・・・幼馴染の一人で、この機動六課の部隊長を務め

ている。

最近は悪巧みするようになったことが増えたが、基本は昔と同じで家族思いで優しい奴だ。

俺の料理のライバルでもあり、理解者でもある。

「そついや解散式が終わった後イベントがあるって八神が言ったな。

ネーベルは何か聞いてるか？」

いえ、私は何も。

昨日の様子からしてリヒトは知っているようでしたが、レイスン雷隼、テイル、

遊斗の三人は知らないようですね。

「ふむ、たぶん口の堅いリヒトには教えた、もしくはリヒト自身が絡んでるかってところか。」

リヒト、雷隼、テイル、この三人は俺の大切な家族。

リヒトと雷隼・・・俺の義妹、たまに六課に来ては高町とヴィータの教導の手伝いをしている。

二人とも普段は地球でバイトをしているか、俺の助手をしている。

ちなみに助手をしているのはリヒトだけで、雷隼は危なっかしくて任せられん。

んで勿論地球の家で暮らしている。

テイルル・・・俺の義弟、本人の希望もあり六課で俺とシャマルさんの手伝いをしている。

六課に居ることもあって男性寮のほうで寝泊りをしている。

海馬かいば 遊斗ゆうと・・・俺が偶然保護した次元漂流者の少年。

その特異能力のせいで、善からぬ組織に狙われると思ひ俺の家で匿っている。

たまに俺の仕事を手伝ってくれて、六課にもよく顔をだしていた。

朝の準備をしていたらもう6時を過ぎていた。

「ちょっと早いけど医務室に行つて、そのあと訓練場にいこうかな。」

今日は早朝訓練はないはずですが？

「最後の日だからね。誰かしらいるだろ。」

そうして俺はまず医務室へと向かった。

〈医務室〉

「あれ？おはようございます。シャマルさんもういたんですか。」

「あ、おはようございます。ハガル君こそ。」

「俺は何時も通りですよ。シャマルさんはどうしたんですか？」

「私は、たぶん見納めに、かな。一年とはいつてもここは私の職場だったんだし。」

「私達の、でしょ？俺を忘れてません？」

ここ六課の医務室のトップはシャマルさんだが補佐として俺も働いていた。

といつても俺は毎日いたわけではなく、週4〜5日とシャマルさんの2/3ぐらいしか居ない。

「ごめんなさい。」

「もう、俺だってそれなりに思い入れはありますよ。」

「わかってるわよ。それにハガル君には色々と助けてもらって、本当に感謝してるわ。」

「ほとんどは俺が居なくてもできたでしょ？」

「そんなことないわ。特に新人フォワード達のことには任せっきりだったし。」

「あれはたまたまスバルが居たからですよ。俺はあいつの主治医ですから。」

スバル・ナカジマ・・・ひょんなことから知り合った俺の患者。

まあ彼女と彼女の姉のギンガは少し特殊だ。

んで、俺のことをどこからか知ったゲンヤさんに、診てくれと言われたのがことの始まり。

ギンガ・ナカジマ・・・スバルの姉で以前派遣された陸士108部隊の一員。

もともと知り合いだったこともあって、派遣先ではよく話をしてい

た。

ギンガとスバル・・・その特殊な体のせいでかなり食うんだよな。

「そついえば今日はこれからどうするの？荷物は昨日のうちに纏め終わってみたいだけだ。」

「ああ、軽く機材点検したあと訓練場に行こうかと思ってます。」

「え？でも今日は早朝訓練はないんじゃないかなかったかしら？」

「そうですね、きっと誰か居ますよ。あ、そうそう今日はリヒトと雷隼、遊斗も来ますよ。」

「でもなんであいつらまで？また八神の企みですか？」

「ん、今回は少し違うかな。理由は後になれば解るわ。」

「そうですね。」

その後雑談をしながら俺たちは機材点検を行った。

シヤマル・・・六課を支える縁の下の力持ちの一人。

俺が尊敬する人でもある。勿論医者としてね。

料理の腕は俺と八神が頑張りが実ったのか、結構うまいが、たまに

やらかす。

「それじゃあ俺は行きますね。」

「ええ、また後でね。」

〈AM7:11 訓練場前〉

「ハガルせんせーい!!」

「ん？スバル達か、おはよう、こんなに早くどうした？今日は早朝訓練はないはずだろ？」

「「「「おはようございます!」「」「」」

相変わらず新人フォワード達は元気だな。

いやもう新人じゃないか。こいつらも立派なフォワードだ。

「早く起きちゃって、つい。」

「私も似たようなものです。」

「僕も。」

「私も。」

「くきゅ〜」

「そうか、まあ寝坊よりはマシだな。」

「ハガル先生こそどうしたんです？私たちと同じ理由ですか？」

「こらスバル！失礼なこと言わないの！」

「はは。まあ、俺は習慣かな。それよりも今日はほどほどにしとけよ。」

「このあとの解散式と二次会に響かないようにな。ティアナもしっかりで見張っとくんだぞ。」

「わかってます。エリオやキャロはともかく、スバルはやりすぎるかもしれないからね。」

「ひどいよ、ティア〜。」

ティアナ・ランスター・・・俺が新人フォワードで一番注目してい

た人物。

自身の能力を把握し、それを勝利へと組み立てる戦術はすばらしい。  
俺もいくつか手助けになる方法を教えなっけな。

エリオ・モンディアル・・・スバル同様俺の患者で特殊な境遇の持ち主。

その年齢としては十分すぎる能力をもった期待の新人。

ベルカ式の使い手とあって、俺も何度か手ほどきをした。

キャロ・ル・ルシエ・・・竜召喚士という珍しい魔導士。

キャロもエリオ同様期待の新人。

竜召喚士ってこともあるし、今度ミオガルナを案内しようかと思っている。

フリードにもいい刺激になるだろうしな。

「そつだ、訓練場には誰かいたか？」

「なのはさんが居ましょ、何かやっていたみたいですけど。」

「そつか、ありがとう。」

「そういえば、ハガル先生がディードとオットーの保護責任者になるって

聞いたんですけど本当なんですか？」

「「「え？」「」」

あれ？その話はまだ俺と数人しか知らないはずだけど・・・

ゲンヤさんあたりがバラしたのか？

「よく知ってたな。誰から聞いたんだ？」

「お父さんとギン姉が話してたのを偶然聞いたんです。」

「なるほどね・・・」

バラしたんじゃないかって、バレたのか。それならしょうがないか。

「でもなんでハガル先生があの人を？」

「どちらかというとディエチの保護責任者になると思ってました。」

「まあティアナの言うことももつともだ。」

ん〜なんつつか、デイドの方からギンガに申請したらしいんだよ。

たぶんだけど、六課の中で双剣を扱えるのが俺だけだからじゃないかな？

オットーはデイドが俺のところにくるからって理由だろうし。」

「それなら納得できます。」

デイド・・・戦闘機人の一人で双剣型の武装を扱っている。

事件中一度だけ俺と戦う事があり、その時俺がセンチネルを使用したのがきっかけかな。

もし更生したなら俺は剣術の手ほどきをしようと思っている。

オットー・・・デイドの双子として生み出された戦闘機人。

無表情で感情がわかりにくいといわれているが、実は結構恥かしがりやだったりする。

デイド同様うちに来るならちゃんと面倒をみるつもりだ。

ディエチ・・・もう一人の「俺」が最も可愛がっていた存在。

本人も、もう一人の「俺」を兄のように慕っていたらしい。

正直保護責任者に立候補するか悩んでいる。

「デイドさんが少し羨ましいです。」

「エリオ君どうして？」

「ベルカの騎士見習いとしては、ハガル先生ほどの腕を持つ人に教えてもらうことができるのが、羨ましいんだ。」

そついうことか。確かにそうなかもな。

俺自身、そこまで腕がたつとは思ってないんだけど周りがそう思っ  
てないみたいだな。

「エリオ、俺は槍は専門じゃないが一応扱える。  
時間ができたら模擬戦の相手ぐらいはしてやるよ。」

「本当ですか！？ありがとうございます！」

「良かったね、エリオ君。」

「くきゅる〜」

本当にうれしそうな二人と一匹。こうしてみると二人ともまだまだ子供だよな。

「と、そろそろ俺は行くよ。またあとでな。」

「」「」「はい！」「」「」

さてと、訓練場に行きますかね。

〈AM7:30 訓練場〉

「おはよう、高町。」

「あ、おはようハガル君。」

「今は先生だ。勤務中に俺を君付けしていいのはシャマルさんだけだ。」

「少しぐらい、いいんじゃないの？」

「だめだ。その辺はちゃんとしたいからね。それに今日は最終日だからなおさらね。」

「そうだね。もう一年たっちゃうんだよね。  
なんか時間があつという間にたっちゃったね。」

「何を年寄りみたいなこと言ってたんだ。」

「ひどい！私まだ二十歳だよ！！」

「んなこたわかってるよ。ま、その時間のことはわかるけどね。」

「ハガル先生も一緒じゃない。」

「俺は自覚してるからいいんだよ。」

高町　なのは・・・俺の幼馴染の一人で、今回のJS事件で最も貢献したと思われる人物。

事件中に保護したヴィヴィオの正式な母親になるらしい。

ちなみにこいつも俺の患者で、問題児でもある。ちったー仕事休め  
ってんだ！！

ヴィヴィオ・・・今回の事件のキーとなった少女。

高町とテッサの二人を「ママ」と読んでいる。ちなみに俺は「先生」と呼ばれている。

すでに高町から主治医になってほしいと頼まれている。

フェイト・T・ハラオウン・・・今回の事件の主犯を捕まえたエリート執務官。

解散後はティアナを補佐官として迎え入れるらしい。

俺の患者で問題児の二人目。こいつも休めよ！！ちなみに俺だけが彼女をテッサと呼んでいる。

「そうそう、訓練場で何してたの？」

「秘密 後でわかるよ。」

「それってリヒト達も絡んでんだろ？」

「そうだよ。まあ、少しネタバラしするなら、この後の下準備かな。」

「ふ〜ん。なんか手伝おうか？」

手伝いつつあわよくば情報を聞き出そう・・・

「大丈夫だよ。もう終わるから。」

「……さいですか。」

ぬぬ、一足遅かったか。まあ待つとしますかね。

「んじゃ、俺は一度部屋に戻ってくるよ。また後でな。」

「うん、またあとでね。」

食堂は今日の二次会の準備とかあって使えない。

そのため部屋で簡単に朝食を作るしかないわけだ。

さっさと作って食おうかな。

〈AM 9:47 六課隊舎廊下〉

解散式は無事に終わりこのあとの二次会まで時間ができてしまった。

しかしあっさりと終わったな。

俺がどう時間をつぶそうか考えていると後ろから声が聞こえた。

「兄さん!」

「ん? ティールか、それに皆。どうした?」

「その様子だとあなたにも連絡がいつてないようですね。」

「連絡?」

「このあとすぐに訓練場に集合だつてさ。僕達も呼ばれたんだ。」

「お前らもか? 高町が何か準備していたが何をやるんだ?」

「僕もさっきリヒト姉さんから聞いたんだ。雷姉は何か聞いてる?」

「僕もさっき聞いたんだ。遊斗もだよな。」

「はい。リヒトさんが知ってるんじゃないですか?」

「それは秘密です。まずはここから移動しましょう。」

「確かにそうだな。」

「あ、そういえばハガル。僕さちょっとした話をスバルから聞いたんだけど。」

「なんだ?」

雷隼がスバルから聞いた話・・・まさか・・・

「デイドとオットーって子を引き取るって話、本当なの？」

「・・・私は聞いてませんよ？」

「「僕（俺）も。」」

やっぱりか。というかスバルは何いってんだよ。

「ああ、まあ、あくまでまだそういう話があるってだけだ。

実際に二人はまず更生プログラムを受けなくちゃいけないからな。話はそれが終わってからだし、近々家族会議にあげようと思っ

たんだよ。」

「なんだ。僕らに黙ってたわけじゃないんだね。」

「まあ結果的に黙ってたことになるかな。すまん。」

「いえ、気にしていません。まだ話す時期ではない、あなたがそう判断したのですから。」

「ありがとう。んじゃそろそろ移動しようか。」

「そうですね。」

しかしスバルの奴勝手に話しやがって……

あとで御仕置きだな。

〈AM10:00〉

「ああ。」

「この花、たしか。」

「私やなのはちゃんやハガル君の故郷の花。」

「お別れと始まりの季節に、付き物の花なんだ。」

「……桜か……これを設定してたのか。」

まさかこんなことしてたなんてな。うん、なかなかいい演出だ。

「おし、フオワード一同、整列！」

「くくくはい！」「くくく」

「さて、まずは四人とも、一年間訓練も任務もよく頑張りました。」

「この一年間、私はあんまり褒めたこと無かったが……。うん、お前ら、随分強くなった。」

「くくく！」「くくく」

「つらい訓練、きつい状況、困難な任務。だけど、負けずに頑張つて一生懸命クリアしてくれた。」

皆ほんとに強くなった。四人とも、もう立派なストライカーだよ。」

このタイミングでそんなこといったら皆泣いちゃうぞ？

あゝあ、案の定四人とも泣いてる……。ってヴィータや高町もか！

「ああゝ、泣くな！馬鹿たれどもが！」

「くくくはい！」「くくく」

雷隼とテイルが貰い泣きしてるよ。

まあテイルは、フォワードとも仲良かったから解らんでもないが、雷隼なんでお前が？

「さて。せつかくの卒業、せつかくの桜吹雪。湿っぽいのは無しにしよう！」

「ああ。」

「自分の相棒、連れてきてるだろうな？」

そついいながらレヴァンティンとグラーフアイゼンを取り出す二人。  
つてヴィータはいきなりギガントかよ！！

「「「「え！？」」」」

「え？え？」

「・・・はえ？」

フォワード四人はびっくり、テッサは何がなんだかわからず戸惑っている。

俺にしたってそうだ。思わず間抜けな声を上げてしまった。

っーかうちの連中はリヒト以外なに？って顔してんだけど。

「なんだ。お前達は聞いていなかったのか？」

「全力全開！手加減なし、機動六課で最後の模擬戦！！」

一瞬、何のことだかわからないといったフォワード四人だが、理解できたらしく。

「「「「はい！」「」「」」

うん……元気なのはいいけどさ、こっちはまだ戸惑ってますよ。

「全力全開って、聞いてませんよ!？」

「俺も今知ったぞ!なんだ模擬戦って!？」

「まあやらせてやね。これも思い出だ。」

「ああ、もう!グイータ!なのは!」

「堅いこというな。せつかくリミッターもとれたんだしよ。」

「心配無い無い、皆強いんだから。」

「ああ〜・・・」

「まあ本人達がいいならいいんだけどさ・・・」

「フェイトママ、先生。大丈夫。」

「「え?」」

「皆、楽しそうだもん。」

「ん〜・・・」

なんつつか、ヴィヴィオのいう通りかもな。

てか、隊長陣vsフォワードなら俺ら要らなくないか?

「フェイトさんお願いします!」

「頑張つて勝ちます!」

「あゝもう〜。」

「がんばつて」

しょうがないな、という顔をしながらもどこか嬉しそうなテッサ。  
やっぱやりたいんじゃないか。

「そついやチーム分けはどうすんだ?あと俺らは見学か?」

「もちろんハガル君たちも参加してもらおうで。」

八神、もちろんってなんだよ、もちろんって・・・

しかもこの状況で断つたら完全にKYじゃないか。

「チームはまず隊長&副隊長のチーム。次はフォワード四人+テイルを入れたチーム。」

最後に海波家+遊斗君のチームだよ。」

「3チームあるからサバイバル戦だな。」

「俺もですか!?!」

「らしいな。遊斗、あきらめろ。」

「俺が一番不利じゃないですか……」

「いや、お前の能力は十分チートだから!」

はあ……まあ、いいか。やるなら本当に手加減抜きでいくぞ?

そして各自デバイスを起動、BJを纏い配置に付く。

「それでは……」

ギンガが合図をだす。

そして俺たちは、互いを見据え構える。

「レディー……」

「ゴーーーー!!」

そして俺たちの最後の模擬戦が始まった。

……まあ結果、どのチームが勝ったかは伏せておこう。

途中から他の六課の人たちが見学、というか観戦していた。

メカニック連中は賭け事もやってたらしいが、今回は無礼講ということ目も瞑ってもらった……

わけなく、シグナムさんと俺が絞めといた。

ちなみに訓練スペースに咲き乱れた桜は全て散った。

元の風景が嘘のような有様で、かなり酷く正直やりすぎた感がある。

うん……まあ、俺たちらしくていいか。

最後に皆で写真を撮り、六課での最大のイベントは終わった。

そして、皆それぞれの未来に向かって進み始めた。

くおわりく

番外編『10年後の春』（後書き）

以上、特別番外編でした。

すでにStrikersまでのキャラクター案はできているので、それを基に構成しました。

ギリギリの範囲での公開にしたのでオリジナルキャラに関しては、「誰だこいつ？」という状態だったかもしれません。

何人かは近いうちに登場予定なのでそれまでしばしお待ちを。

## 第14話『違いと痛み』（前書き）

人「本編14話、A・S編は後半へと移り行きました。」

ハ「前回テツサが蒐集されたってことは原作の8話あたりか。」

人「ああ、んで予告通りヴォルケンと合流するぞ。」

ハ「やつとか。でもこのサブタイトルはなんだ？」

人「まあそれも本編を読めば解るかな。んじゃま、タイトルコールよろしく！」

ハ・霧「〜とある水使いの物語」 第14話、ミッションスタート  
！」

第14話『違いと痛み』

つかの間の安らぎと温もり。

その影で起きていた思想の交差。

すれ違い交わることの無い気持ち。

それでも想いは届きそうになる。

しかしそれは阻まれまたすれ違う。

それでも俺たちは進まなければいけない。

「12月11日 アースラ内」

今僕たちはさっきあった戦闘の報告会をしている。

「フェイトさんは、リンカーコアに酷いダメージを受けているようだけど、命に別状はないわ。」

「私と同じように、闇の書に吸収されちゃったんですね。」

「アースラが稼動中でよかった。なのはのとき以上に救援が早かったから。」

「だね。」

そのおかげで今回、フェイトの被害は思ったほどではなかった。

それでもリンカーコアを吸収されたため、しばらくは戦闘を避けるべきだな。

「二人が出動してしばらくして、駐屯所の管制システムがクラッキングであらかたダウンしちゃって・・・」

それで、指揮や連絡が取れなくて、ごめんね。あたしの責任だ。」

それもおかしい話だ。駐屯所の機材はそんな簡単にクラッキングされるものじゃない。

「んなこたないよ。」

エイミーがすぐ復帰させたからアースラに連絡が取れたんだし、仮面の男の映像だってちゃんと残せた。」

そうして空中ディスプレイに仮面の男が表示される。

前回の男とは外見が違ふことから別人と考えることもできるが・・・

「しかしおかしいわね。向うで使っている機材は管理局で使っているものと同じシステムなのに。」

それを外部からクラッキングできる人間なんているものなのかしらっ。」

「そうなんですよ!」

エイミイが母さんの意見に賛同し、その勢いで席をおもわずたってしまった。

でもすぐに座りなおし、説明を再会する。

「防壁も、警報も全部素通りで、いきなりシステムをダウンさせるなんて……。」

「ちょっと、ありえないですよね。」

そう、普通じゃありえない。

絶対とはいえないまでもそんなことできる人間なんて、少なくとも僕の知る限りでは

広域時限犯罪者に指定されているジェル・スカリエツィぐらいしか思い浮かばない。

「ユニットの組み換えはしてるけど、もっと強力なブロックを考えなきゃ。」

「それだけすごい技術者がいるってことですか？」

「ん〜・・・もしかして、組織だってやってるのかもね。」

それもありえない話じゃない。が、気になる点はいくつかある。

「君の方から聞いた話も、状況や関係がよくわからないな。」

「ああ。私が駆けつけたときには、もう仮面の男はいなかったけど、あいつが。シグナムがフェイトを抱きかかえてて。」

言い訳はできないが、すまないと伝えてくれた。」

「ここが気になることの一つだ。仲間がやったことなのに何故謝るのか？」

そして始めから蒐集が目的なら謝る必要もないはずだ。

「アレックス。アースラの航行に問題は無いわね？」

「ありません。」

「ん、では予定より少し早いですが、司令部をアースラに戻します。各員は所定の位置に！」

『はい！！』

「と、なのはさんはお家に戻らないとね。」

「あ、はい、でも・・・」

「フェイトさんのことなら大丈夫。私たちがちゃんとしておくから。」

「……………はい。」

とある水使いの物語

第14話『違いと痛み』

12月12日 八神家

「助けてもらった、ってことでいいのよね？」

「少なくとも、奴が闇の書の完成を望んでいるのは確かだ。」

私たちは今、昨日あったことについて会議をしている。

昨日ヴィータちゃんとシグナムの前に現れた仮面の男。

あの男は彼じゃない。彼なら少なくとも、あんな方法で蒐集したりはしない。

「完成した闇の書を利用しようとしているのかもしれんな。」

「ありえねー!!!」

だって、完成した闇の書を奪ったって、マスター以外には使えないじゃん!」

そう、確かにマスター以外に使えないけど、使えるようにする方法はないわけじゃない。

でも・・・

「完成した時点で、主は絶対的な力を得る。脅迫や洗脳に効果があるとは思えんしな。」

「まあ、家の周りには嚴重なセキュリティも張ってるし、彼のデバイスのおかげで以前からあったおかしな結界は解除されてるわ。」

だから、万が一にはやてちゃんに危害が及ぶことは無いと思うけど……」

「念のためだ。シャマルはなるべく主のそばから離れん方がいいな。」

「うん。」

そうね。蒐集活動に参加できない私が常に居ないと。

彼が戻ってくればまた状況が変わるのだけど……

「ね……闇の書を完成させてさ、はやてが本当のマスターになつてさ、それではやては幸せになれるんだよね？」

「なんだいきなり？」

「闇の書の主は大きな力を得る。守護者である私たちは誰よりそれを知っているはずでしょ？」

いきなりどうしたの、ヴィータちゃん？

そんな当たり前のことを急に聞いて・・・

「そうなんだ・・・そうなんだけどさ、あたしはなんか大事なことを忘れてる気がするんだ。」

それにあいつも言ってる？あなたたちは何故本当の名で呼ばないのか、って。

あたしはこれがずっと気になってるんだ。」

「んん・・・」

確かに彼と彼のデバイスはそんなことを言っていた。

けど私たちは闇の書の守護騎士。私たちが闇の書のこと知らないことなんて無いはず・・・

無いはずなのに、なぜか違和感を感じる。何故？

そのときだった。二階から何か倒れる物音がした。

それにこの感じ、もしかして！

「あ!?!はやて!?!」

「はやてちゃん!?!」

二階の寝室に行くと、はやてちゃんが胸を押さえ苦しそうにつづくまっていた。

こっちの呼びかけにも反応できないほど苦しんでいる。

はやく、はやく病院につれていかないと!?!

僕はユーノからの調査報告を聞き、これからの方針を決める話し合いをしていた。

しかし、あいつにこんな取柄があったとはな。さすがスクライアってところか。

それにしても・・・

「エイミィ、仮面の男の映像を。最初に確認されたのも頼む。」

「はいな。」

「なにか考え事？」

最初に確認した赤い男はS2Uに映像が残っていたのでそれを表示する。

「まあね。少し気になることがあって。」

そしてモニターに映像が映し出される。

青の仮面の男に赤の仮面の男。同一人物とは思えない……

「この人たちの能力もすごいというか、結構ありえない気がするん

だよな。

まず今回出てきた仮面の人。この二つの世界を最速で転移するとしても20分はかかりそうな距離なんだけど、

なのはちゃんの新機バスターの直撃を防御、長距離バインドをあつさり決めて、それからわずか9分後には、

フェイトちゃんに気付かれず、後ろから一撃。」

「かなりの使い手ってことになるね。」

「そうだな、僕でも無理だ。ロツテはどうだ？」

「ああ・・・むりむり。あたし長距離魔法とか苦手だし。」

「アリアは魔法担当、ロツテはフィジカル担当できっちりしてるもんね。」

「そうそう」

ロツテとアリアは本当に極端に能力が分かれている。ただ・・・

「昔はそれで、酷い目にあわされたもんだ。」

「その分強くなっただろ。感謝しろってーの！」

「あはは、んじゃ次は最初の仮面の人だね。たぶんだけど、この二

人は別人かな。

最初の赤い人はアースラのモニターにも映像が残ってなかったし、リーダーにも捉えられなかった。

そのことから考えても、赤い人と青い人は別人かなって思うんだ。赤い人は何が何でも隠そう、って感じがするしね。

まあ、クロノ君のS2Uに何とか映像が残っていたからよかったけどね。」

「それについては僕も同意権だ。おそらくこの二人は別人だろう。なにより魔力光がちがう。」

「たしかに」

もう一度僕らはモニターを確認する。

青の男の魔力光は青白かったのに対して、赤の男は灰色、いや鋼のような色をしていた。

〈12月13日 教室〉

「入院？」

「はやてちゃんが？」

「昨日の夕方に連絡があったの。」

「そんなに具合は悪くないそうなんだけど、検査とかあってしばらく掛かるって。」

「・・・そっか。それじゃあ放課後、みんなでお見舞いとか行く？」

「そうして皆ではやてちゃんのお見舞いの話をしていました。」

「そして話はハガル君のことへと移りました。」

「そっぴゃあの馬鹿は今日も休みらしいわね？どっぴゃことなの？最近怠けてるんじゃない？」

「あ、それ私も気になったの。ハガル君、最近図書館の方にも来てないみたい。」

「図書館って、ハガルが何時も行ってるいう、あの図書館？」

「うん。昨日行ったら司書さんが、最近ハガル君を見かけないって教えてくれて。」

「なんですかちゃんに？」

「わたしとはやてちゃんとハガル君が話しているのを、見ていた人がいるの。」

「それで私に教えてくれたの。」

「あいつ連絡もつながらないのよ。ほんと、何してんだか！」

引越しの日からアリサちゃん、ハガル君のことになると最近機嫌が悪いかな。

”なのは、もしかしてハガル、また巻き込まれたのかな？”

”でもそうだとしたら家族の人が搜索願とかだしてるはずだよ？

一応学校には休みの連絡がきているみたいだけど、フェイトちゃん、心配？”

”う、うん……あの時なのは守ってくれたわけだし、それに友達だから……”

うん、ハガル君本当にどうしたんだろう？

12月18日 PM 3:31 八神家

「そんなことがあったんですか・・・」

「ええ・・・まさかはやてちゃんの友達に管理局の魔導士がいるなんて、思いもしなかったわ。」

「それについては俺にも落ち度があります。月村さんと八神が友達という時点で俺が気付くべきでした。」

「うーん、そんなことないわ。これは本当にしょうがないことだもの。」

「それよりも、あなたは大丈夫なの？相当無理をしていたみたいだけど。」

「今俺は八神の家にいる。こっちに帰ってきてからシャルマルさんに連絡をいれたら、すぐに来てほしいといわれた。」

「それから家に着いてから、この数日中お互いにあったことを報告し

ていた。

「まあ、大丈夫ですよ。」

どこが大丈夫なのですか！  
今もオートヒールと痛覚遮断魔法で、なんとかなっているだけで  
わありませんか！

「え！？ハガル君、それは本当なの？」

「ええ、まあ……」

シヤマル殿、もし良かったらマスターを診ていただけませんか？  
私は専門外ですし、何よりマスターの今後に関わるので。

「ええ、私としても助けてもらっているし、はやてちゃんの友達だ  
から断る理由は無いわ。」

ハガル君、まずは上着を脱いでちゃんと体を診せて。」

「だ、大丈夫です……あ！！があ……うぐう！」

俺が大丈夫と言おうとした瞬間、ネーベルが痛覚遮断を切りやがっ  
た。

そして痛覚遮断が無くなった俺に、今体に起こっている異常、つまり怪我による痛みが襲い掛かってきた。

俺はギリギリ意識を保ち、ソファアの上に倒れた。

「あ・・・が・・・ああ・・・」

どこが大丈夫なのですか！！今にも気を失いそうじゃありませんか。

「ハガル君、診せなさい！本当に手遅れになってしまつかもしれないのよ？」

「う・・・わ、わか、り、まし、た。」

上着を脱いだ時シャマルさんがすっげー驚いていた。

だって服の下には、包帯で肌が見えない状態の俺の体があったのだから。

ミオガルナでも治療はしていたけど、正直気休めだった。

それに俺の医療知識は役立つたけど、まだ技術がたりず半端な処置になってしまっている。

「一応応急処置はできているみたいだから、その分まだマシというところかしら。」

あとはオートヒールのおかげね。逆に痛覚遮断の影響で体に負荷が掛かりすぎているわ。

しばらく安静にしないとだめね。」

「はい・・・」

しばらく安静、か。八神もやばいのに俺が休むわけにもいかないだろ。

「でも。」

「え?」

治癒魔法をかけながら、シャマルさんが俺の頭を撫でる。

「この怪我は全部はやってちゃんを助けるため、そして私たちの手伝いをした結果なのよね。」

「……」

「ありがとう。ヴォルケンリッターを代表してお礼をいうわ。」

「そんな・・・俺は、俺はただ俺がやりたいからやっているだけです。」

「それでもありがとう。それにあなたはまだ魔法を知って間もないのよ？」

本来ならこんな危険なことはさせられない。

それなのにこんなになるまで手伝ってくれた、それも一人で50頁も稼いでくれた。

ありがとう。」

「皆さんのほうが集めてますし、危険な目にあっているとと思いますが？」

「それでも、よ。」

シャルルさんが俺に向かって微笑んだ。

それを見た俺は思わず顔をそらしてしまった。

きっと今の俺の顔は真っ赤なはずだ。

シャルルさんに微笑まれるなんて・・・綺麗な人だから正直恥ずかしいよ。

それに優しいし、あたたかい。

俺がそんなことを思っていると。

「そうだ！ハガル君、あなたこれからどうするの？

家に帰るわけにもいかないんでしょう？それに管理局側と接触もできないだろうし。」

そう、俺は今家に帰ることができない。

お婆ちゃんに無理をいい、闇、いや夜天の書の完成まで帰らないと約束したからだ。

これで完成前に帰ったらそれこそ俺の命は尽きるよ。

それに管理局と敵対している夜天の書側にいる以上、下手に高町やテッサに会うこともできない。

「んゝまた野宿「だめよ！！」ね・・・」

「だめ！ちゃんと栄養をとって安静にしないと治らないわよ。」

「じゃあどうすればいいんですか？」

「そうね・・・」

考えてなかったのか・・・

「この家にしばらくいたらどうかしら？もちろん制限はつくけどね。今はやてちゃんも病院だし、シグナム達もほとんど居ない。シグナム達と相談してからになるけど、どうかしら？」

「え？いいんですか、俺なんかがこの家に居て・・・」

俺は彼女たちからすればイレギュラーなはず。

その俺を・・・

「私としては全然大丈夫よ。少しでもお礼がしたいから。」

「・・・じゃあ、みんなの許可が下りればお世話になります。」

「大丈夫、きつと皆了承するわ。」

「そうですかね・・・あ。」

やば、なんか気がぬけたら眠たくなってきた。

体の痛みも大分ましになってきたのもあるんだろう。

溜まりに溜まった疲労が、睡魔となって襲ってきた。

「あ……すい、ま……せん、すこし、ね……ま……」

そうして俺は眠りについた。完全に意識が途絶える瞬間「お休みなさい」という声が聞こえた気がした。

やっと眠ったわね……

今、私の目の前には全身をボロボロにしたハガル君が眠っている。

どうしたらここまですなるのかしら？

「ネーベルリッター、教えて。あなた達はいつたいどんな方法で魔力を集めていたの？」

集めてきた魔力を闇の書に移したとき、私は思わず自分の目を疑った。

51頁・・・つい最近魔法の存在を知った子供が集めれる数じゃない。

話を聞く限り、大型生物からしか蒐集は行っていないらしい。

先ほどマスターと話した通り、ミオガルナに存在する竜達から蒐集しました。

ただ、いくら竜といっても私たちが蒐集した竜は、それほど魔力が高いわけではありませんでした。

「だったら尚更わからないわ？」

そうです。ですからマスターは、質で足りないなら量で補えばいい、と考えました。

もちろん現在のマスターの実力を考えれば非効率的です。

「そんな・・・こんな短期間でそんなことしたら体が・・・」

ええ。結果マスターは痛覚遮断という最終手段を使い無理矢理体を動かしていました。

ヴォルケンリッターの足手まといにならないよう、そして……八神殿のために。

「……」

私は何もいえなくなった。

はやてちゃんと同い年の小さな男の子がそんな無茶を……

ありがとう……本当にありがとう……

シヤマル殿？

「うん、なんでもないわ。……ハガル君、今はゆっくり休んで。」

「

くっくくく

第14話『違いと痛み』（後書き）

人「とまあ、こういうわけです。」

ハ「……俺また死に掛けてるのか……」

人「大丈夫。主人公補正で生き残るから！」

作者、それはもう見事なサムズアップを決めている。

ハ「何が大丈夫なんだよ！！」

人「んで話を次回以降のことに進めるが。」

ハ「おおい！！」

霧「マスター静かにしてください。」

ハ「ネーベル！？」

霧「無茶した罰です。大人しくしててください。」

人「んでだ、今回は一気にラストあたりまで行くぞ。それもいきなり。」

霧「それはまた何故？」

人「それも含め次回を待つてほしい。」

霧「そうですか。」

人「それでは、次回をお楽しみに。」

霧「本日もありがとうございました。」

<暗転>

## 第15話『運命と災い』（前書き）

人「さーラスト、闇の書の覚醒。つまりリインフォースが出てきますよ」

ハ「やつとここまで来たのか。んで俺は起きるんだよね？」

人「そりゃ勿論。あと今回は色々と新情報満載となっております。ハガルの魔法とかね。」

ハ「でも攻撃魔法は使えないんだよね？」

人「まあそこは設定通りしょうがないのよ。んじゃ本編いってみよう！」

霧「〜とある水使いの物語」 第15話、ミッションスタート!!」

## 第15話 『運命と災い』

今まで死ぬことは怖くないと思ってた。

ずっと一人でいたからかもしれん。

だけど今は違う。

守りたい日々があって、大切に、幸せにしてあげなあかん子達がある。

それに大事な友達もできた。

みんなのために私は生きて、笑顔で居よう、強く居ようと思った。

だからこんなところで死ねない、死にたくない。

誰か……助けて……

〔12月22日 PM4:45 八神家〕

「ええ、ここまでほうまくいつてるわ。」

私はクラーヴイントを使い、シグナムとの定時報告をしていた。

はやてちゃんの容態と闇の書の進行状況、そしてハガル君の状態。

「ああ、そつちに戻らなくなった分、管理局もこちらを追えていないようだ。」

「主はやては寂しがつていないか？」

「私には一言も。でも、お友達はよく来てくれているみたいなの。すずかちゃんたち。」

「そうか。だが心配させてもいけない。数日中に一度戻る。」

「うん、気をつけて。」

「ああ……。そういえばあいつはまだ起きないのか？」

「そうなの。まだ意識は戻らないの。」

そう、あの日、ハガル君が戻ってきてきてうちに来た日。

彼はあれ以来ずっと眠ったまま。たぶん疲労に加え、痛覚遮断による無理な戦闘の影響だと思う。

「何か変化があったらまた連絡を頼む。」

「ええ、わかったわ。」

そうしてシグナムとの通信を切り、闇の書のことを考える。

ハガル君のおかげで残り55頁まで来た。

あともう少し、もう少しではやてちゃんを救える。

でも何故だろう・・・何か違和感がある・・・この違和感の正体はなんなの？

〜とある水使いの物語〜

### 第15話『運命と災い』

〜12月24日 PM6:33〜

・・・おき・・・マター・・・

なんだ？誰かが呼んでいる・・・誰だ？

マスター！起きてください！マスター！！

ネーベル？どうしたんだよそんな大声出して・・・

なんだ？ここは・・・そうだ俺は八神の家で寝ちゃったんだ。

そろそろ晩御飯なのかな？

マスター！！緊急事態です！！シグナム殿達と連絡が取れません  
！！

「・・・ええ？どういうこと？家に居るんじゃない・・・」

寝ぼけてないで聞いてください！今の状況を説明します。

現在12月24日の午後6時36分、マスターが寝てから六日経過しています。

「はあ！？え！？」

話を続けます！

あ、あれから六日も寝てたのか？でもなんで？

俺が混乱していると・・・

いいから聞いてください！現在鳴海市街地にて大きな魔力反応を  
確認。

反応から見てシグナム殿、シャマル殿、ヴィータ殿、高町殿、テ  
スタロツサ殿と断定。

戦闘に突入した模様です。

「な！？なんであいつらが！？」

さらに先ほどから通信妨害が発生し、その異変に気付いたザファイ  
ーラ殿が援護に向かわれました。

また通信妨害が発生している地域に、魔導士が二名侵入。おそら  
くあの仮面の男と思われる。

例のテッサとシグナムさんの邪魔をした奴か。

たしかあいつ、クロノさんからシャマルさんを助けた時にも居た奴  
だ。

・・・て、まてよ。だとしたらやばいんじゃないか？

あいつらの目的は夜天の書の完成が目的のはず。だったらシャマルさんたちが危ない！

「ネーベル、すぐに現場にい、．．．ううああ．．．」

マスター！？まさかまだ傷が？

「いい、から。ネーベルリッター、セットアップ！」

Set up

まず転移で家の外にでて、変身魔法を使って変装をする。

その姿はあの龍の仮面の男。

そう、あれは俺が変身魔法を使って居た姿、管理局側にはわからないようにするための隠蔽工作。

バレるとしても時間稼ぎにはなるしね。

「翼を！」

マハト  
Macht  
フリーゲル  
Flügel

そうして俺の背中には、上が大きく下が少し小さい、まるで天使の翼のような形をした鋼色の二対の翼が現れる。

これは飛行魔法に慣れてない俺が、操作のイメージをし易い様に考えたもの。

「ブリッツもだ!!」

ブリッツ  
Blitz

リーニエ  
Linie

さらに高速移動魔法を使い速度をあげ、反応があつた場所へ向かった。

いやな予感がする。間に合ってくれ!

もう少し、もう少しで反応があつた地点に着く。

そのときだった。

マスター、妨害反応消失。それにこれは・・・

「どうした!?!」

ヴォルケンリッターの反応がありません。しかし八神殿の反応はあります。

「な!?! いったい何があったんだよ!?!」

本当に何がなんだかわからない。

シヤマルさん達の反応が消えて、代わりに病院に居るはずの八神の反応がある。

八神殿の反応消失! 夜天、いや、闇の書起動を確認!

「なんだって!?!」

その時だった。空へ魔力が立ち上る。

そしてそこからは今まで感じたことのない、強大な魔力を感じる。

「これはやばい・・・」

ようやく見えたその場には高町にテッサ、青の仮面の男が二人、そして漆黒の翼を持つさながら墮天使のような格好をした女性が居た。最後の守護騎士と思われる女性の近くには、闇の書として覚醒してしまった夜天の書があった。

間に合わなかったのか・・・

「八神――！！！」

「！！！」

「・・・お前は主の・・・そうかお前も。」

「八神は！八神はどうしたんだ！？」

「主は今、私の内にいる。」

「な!?!？」

内だって？ということとは吸収されたのか？

だとすればどうやって助ければ・・・

「あの、あなたは・・・」

「後にしろ、来るぞ！！」

高町たちが俺に話しかけてくるがそんな余裕はない。

「デアボリック、エミッション」

そしてあの守護騎士が溜めていた、強大な魔力がさらに圧縮されていった。

まさかこれは！？

「空間攻撃!？」

「闇に、染まれ。」

その瞬間、内側に限界まで圧縮された魔力が爆発し、俺たちに襲い掛かってきた。

R o u n d   S h i l d

フィール  
v i e l   シールド  
S c h i l d

「くっ、くっ……」

高町はテッサを庇うようにシールドをはり、俺は翼で体を覆いさらに多重シールドで何とか防ぐ。

でも、これは正直きつい……

とうとう闇の書が完成してしまった。くそ！

なんとしてでも阻止しようとしたのに……

まさかあの人たちが加担していたなんて。

僕が現場に向かっていると、大きな魔力爆発がおこった。

そして近くのビルに例の仮面の男が二人いた。そう、二人いたのだ。

これで僕の中の疑惑は確信へと変わった。

そして僕は二人にバインドをかけた。そう……特別なバインドを。

「なあ！？」

「うあ！？」

二人ともバインドを抜けようとしているが無駄だ。

「ストラグル・バインド。」

「「な！？」」

「相手を拘束しつつ、強化魔法を無効化する。  
あまり使い所ない魔法だけど、こついう時には役に立つ。」

バインドにさらに魔力を籠める。すると二人が苦しみだした。

「「ぐうああ！」」

「変身魔法も強制的に解除するからね。」

そう、このバインドは発動に多少時間が掛かるなどの欠点はあるが、こついう使い方ができる。

そうして変身魔法が解け、僕の目の前に現れたのはアリアとロツテだった。

やっぱりそうだったのか・・・

そしてバインドが掛かった二人はこつちを睨みつけていた。

「クロノ、このお!!」

「こんな魔法、教えてなかったんだけどな。」

そう、僕はこの二人から魔法と体術を教わったが、この魔法は教わっていない。

でもそれは。

「一人でも精進しろと教えたのは君たちだろ。アリア、ロツテ・・・」

なんで、どうしてこんなことを・・・

あの攻撃に耐えた俺たちは、いったん奴から離れて今はビルの陰に隠れている。

「い・・・！」

「大丈夫、なのは？」

「大丈夫。それよりも、大丈夫ですか？」

「・・・ああ、なんとか。」

正直やばい。いくつか傷口が開いてしまった。

マスター、もう変身魔法を解除し、その魔力を回復にまわします。

「あ！おい！！！」

「え？」

そうしてネーベルは俺の答えを待たずに魔法を解除した。

・・・バレちゃったよ・・・

「は、ハガル（君）！？」

「……よお。」

「なんでハガル君が仮面の人に!？」

「今はそんなことはどうでもいい!それよりもあいつだ。」

あの守護騎士はおそらく広域攻撃型だ。避けるのも、近づくのも難しい。」

「うん。バルディッシュ。」

Yes, sir. バリアジャケット、ライティングフォーム

このままではやばいと判断したのか、テッサはBJを変えた。

多分こっちの方が防御力は高いのだろう。

「はい。」

高町はテッサに預けていたレイジングハートを受け取るがどこか様子がおかしい。

「高町、どろしたんだ？」

「うん・・・」

事情を聞こうとしたときだった後ろから。

「なのはー！」

「フェイトー！」

「ユーノ君、アルフさん。」

「あれ？あんたはたしか・・・」

「どうも、ハガルです。」

「なんでここに？」

「それは後で話す。」

この二人が来たってことは、クロノさんも来るってことか。

正直戦力としてはまだ不安だ。

あの守護騎士から感じる力、アレが闇の書の破壊の力なのか？

「主よ、あなたの望みをかなえます。」

こんなにも悲しき世界。

「いとおしき守護者たちよ。傷つけた者たちよ。」

このような世界は私が……

「今、破壊します。」

ゲフェングニス  
デア  
マギー  
G e f a n g n i s d e r M a g i e

封鎖結界展開。傷つけた者たちよ。逃がしはしない。

ん、これは!?

「うわぁ。」

「なに?」

「前と同じ閉じ込める結界だ!」

「やっぱり、私たちを狙ってるんだ。」

いったい何したんだよ。

俺らを狙うってことは、何かしら恨みを買ったことになる。

俺には覚えが無いし、ということは一人が? いや、それは考えにく  
いか。

だとしたら・・・

「今クロノが解決法を探してる。援護も向かってるんだけど、まだ時間が。」

「それにこの結界だ。そう簡単に入ることも抜けることもできないんじゃないか？」

「そうなる私たちで何とかするしかない、か。」

「うん。」

「そうだな。」

ネーベルに調べてもらったがこの結界、かなり強力で抜けるには時間が掛かるらしい。

それに逃げたって意味はない。

八神を助けなくちゃいけないんだから！

「なのは？」

「どつした高町？」

高町は守護騎士のほうを向いたまま何か考えているようだった。

どうしたんだ、さっきから様子がおかしいぞ？

「あ、うん。大丈夫！」

本当に大丈夫なのか？

不安はあるがとにかく彼女を、あの守護騎士を止めないと。

空中でテッサと守護騎士が何度も交差する。俺も隙を見てセンチネルで攻撃するが全て防御されてしまう。

「はあ！」

「ふうん！」

スクライアとアルフさんがバインドで動きを止めるが、それも一瞬のこと。

「砕け。」

B r e a k e r

すぐに解除されるが、その一瞬の隙さえあればこちらも攻撃できる。

468

P l a s m a S m a s h e r

「ファイア!!」

D i v i n e B u s t e r E x t e n s i o n

「シュート!!」

両サイドからテッサと高町が砲撃魔法を放つ。しかし……

「盾……」

P a n z e r   s c h i l d

それもシールドによって止められる。あの二人の砲撃を止めたことは正直驚いた。

だけどそれもある程度予測済み！

動きの止まった守護騎士へと正面から斬りかかる。

「はあ……！」

が、それも新しく展開したシールドに阻まれる。しかも堅い……！！

「刃<sup>やいば</sup>以て、血に染めよ。」

B l u t t i g e r   D o l c h  
ブルーティガー   ドルヒ

「な!？」

「穿<sup>うが</sup>て、ブラッディダガー。」

そして血の様に赤い短剣が俺たちに向かって発射された。

それぞれ三箇所で爆発が起こるが、高町もテッサも防御したらしくと外傷は見当たらない。

俺は一発防御し損ねたのが左腕に当たった。

「うっ……」

「くっ……」

「い、っっ……」

「ハガル君、大丈夫!？」

「これぐらい問題ない!」

正直言うと問題大有りだ。今ので完治していなかった傷が完全に開いた。

こりゃ早いとこ決着つけないとやばいかもな・・・

俺がそんなことを思っていると守護騎士はすぐさま次の行動へ移った。

「咎人達に、滅びの光を。」

しかもなんだこの魔力！？それに魔方陣がミッド式、誰かから得た魔法か？

その魔方陣の中心へと魔力が星のように光ながら収束していく。

471

「まさか！」

「あれは・・・」

俺以外、皆この魔法を知っているのか顔が驚きに染まっている。

「星よ集え、全てを撃ち抜く光となれ。」

「スターライト、ブレイカー!？」

「高町、なんだその魔法は!」

「なのはの最強の砲撃魔法だよ。それを彼女は・・・」

そなこと言ってる暇ないか。もう魔法はチャージが完了しそつだ。

「アルフ、ユーノ。」

「あいよ!」

全員でこの場を一時離れるため移動するが、この魔力量、逃げ切れるとは思えない。

「貫け!閃光!」

ユーノはアルフさんに、高町はテッサにとそれぞれ抱えられ三手に分かれて移動している。

「なのはの魔法を使うなんて!」

「なのはは一度蒐集されてる。その時にコピーされたんだ。」

「ちょ、フェイトちゃんこんなに離れなくても。」

「至近でくらったら防御の上からでも落とされる。回避距離をとらなきゃ!」

「ちょ!どんな魔法だよそれ!」

「高町、お前どついう魔法使ってただよ!」

「防御の上からでもって、ドンだけ凶悪なんだよ。」

「そついや前に映像で見せてもらった、あの結界を破壊した砲撃、ア  
レがそうなのか?」

「だとしたらどんだけだよ。」

問題が発生したのはある程度離れた時だった。

左方向300ヤード、一般市民がいます。

こちらも捕捉、右方向320メートル一般市民。これは・・・

「「「え!?!」「」」

まさか一般市民が、しかもこれ・・・

いったい何がおこったんだろう・・・

アリサちゃんと塾が終わって外に出た瞬間いきなり世界が変わった気がした。

それに人も居なくなつて・・・

「やっぱり誰も居ないよ!急に人が居なくなつちやつた。」

「・・・」

何が起きたの？私たちがだけが残っているのも気になる・・・

「辺りは暗くなるし、なんか光ってるし！  
いったい何が起きてるの!？」

「うん・・・」

「とりあえず逃げよう！なるべく遠くへ。」

「う、うん!」

私たちはその場から移動しました。

そしてこの後、予想もしていなかった出来事が私たちを待っていました。

どこだ？アリサと月村さんはどこにいるんだ？

そのビルを右です。

「了解！」

そうしてビルを曲がるとそこにはアリサ達だけでなく高町達もいた。

「アリサ、月村さん、大丈夫か！？」

「え？あんな、何でここに……」

「ハガル君？それにその格好……」

その時だった。後ろで限界まで収束された魔力が……

「スターライト・ブレイカー！」

全てを飲み込む破壊の力となって発射された。

なんだあの爆発は！？非常識のもほどがあるぞ？

”フェイトちゃん、アリサちゃん達を”

”うん！”

D e f e n s e r P l u s

カートリッジを2発使った後、テッサが二人を覆うようにバリアを発生させ、自身はその前に行きシールドを展開。

高町もカートリッジを2発使用。

「レイジングハート！」

W i d e A r e a P r o t e c t i o n

さらにテッサの前に立ち、強力なシールドを展開するがこれじゃ足りない。

そう思った俺はカートリッジを4つ使用、高町の前に立ち。

「ネーベル、シールド多重展開！！翼を限界まで強化！！」

ファイール  
V i e l      シルト  
S c h i l d

俺はシールドを三重に展開し、翼を広げ後ろを護る。

「ハガル君！」

「俺のことはいいから防御に集中しろ！！」

後ろの高町に激をとばしつつ前を見る。すると桃色の壁がどんどん迫ってくる。

正直怖い……

そしてその壁は俺を先頭に直撃した。

「う……うぐああああ……！」

” なのは、なのは、大丈夫？ ”

” フェイト！ ”

” う、くう、ハガル君のおかげで私たちは大丈夫ではあるんだけど。

”

” アリサとすずかが、結界内に、取り残されてるんだ。 ”

” わかった、すぐにエイミーさんに連絡する！ ”

ようやく余波が収まりシールドを解除する。

後ろの二人、アリサと月村さんはよほど怖かったのか抱き合っている。

「もう、大丈夫。」

「すぐに安全な場所に送ってもらおうから。」

「あの、なのはちゃん、フェイトちゃん、ハガル君。」

「ねえ、ちょっとハガル、あんた・・・」

アリスが何か言おうとした瞬間、二人の足元に転送の魔法陣が現れ二人を転送した。

これで一応は二人は安全なはずだ・・・

もっともこのあとの結果によるけどな。

「みられちゃった、ね。」

「うん・・・」

「今更気になるな。後でちゃんと話せばきっと解ってくれる。」

「そう、だよな・・・」

”ユーノ君、ごめん。二人のほうを守ってくれるかな？”

”アルフもお願い。”

”でも、フエイト・・・”

納得してくれないよな・・・でもね、二人を守ってもらわないといけないんだよ。

”アルフさん。二人のことを頼みます。じゃないとテツサも高町も全力で戦えない。

きつと二人のことが気になってミスをしてしまう。”

”・・・わかった。フェイトを頼むよ！”

”ああ、絶対に守るよ。”

さてと・・・ところでテツサよ。なんで顔を真っ赤にしとるんだ？

しかも高町は高町で、なんかあきれているというか何言ってるの？  
って感じの顔してるし。

俺変なこといったか？

するとエイミイさんから通信が入った。

『なのはちゃん、フェイトちゃん、ハガル君。クロノ君から連絡  
闇の書の主に、はやてちゃんに投降と停止を呼びかけてって。』

”わかりました。元々おれは八神を助けるために来たんですから。”

そう、今俺がどうなってもいい。今は八神を助けることが最優先だ。

そのためにはまず、あの守護騎士に話を聞いてもらわないと。

”はやてちゃん、それに闇の書さん、止まってください！”

ヴィータちゃんたちを傷つけたの、私たちじゃないんです！”

”シグナム達と私達は！”

「わが主は、こんなことがあった世界は、夢であってほしいと願っている。

ならば私はそれをかなえるだけ。

主には、穏やかなる夢のうちで、永久の眠りを・・・

そして愛する守護騎士たちを傷つけた者に、永久の闇を。」

な！何ふざけたこといつてるんだ？

そうなったら八神はずっとそのまま、このままだと死んでしまうじゃないか！

・・・そんなことさせるか。させてなるもんか。

それに傷つけた奴に永遠の闇だって・・・

「ふざけんな!!」

「!!」

俺が突然大声をあげたせいで二人はびっくりしている。

「ふざけてなどいない。私はただじじつw」それがふざけてるって  
言ってるんだ!!」・・・」

「何でもしようとしななんだ!? 守護騎士はお前の一部だろ!  
だったらなぜ復活させない!そしてなぜ一人で決める!？」

「しまったようなことを言うな。我は・・・闇の書は壊れている。  
一度蒐集が完了すれば、あとは破壊と暴走に向かうしかない。」

「え!？」

さすがに高町たちは知らなかったようで、今の守護騎士の発言に驚いている。

「ならばせめて、私の意志があるうちに主の願いをかなえるだけだ。」

「会話ができるだろ！何故話し合わない！？」

それにあんたにだって心があるだろ！だからそんな悲しそうな顔をしてんだろ！！」

もう敬語なんて気にする余裕がない。ぶっちゃけキレそうだ。

なんだこの分からず屋は・・・

「・・・我は魔導書、ただの道具に過ぎん。

ならば道具は道具らしく、主の願いをかなえるだけ・・・」

そうして守護騎士が手を前にかざした。

すると俺たちの足元が急に揺れ始め、道路が割れるとそこから何か、生物の触手のようなものが出てきた。

そしてそれは俺たちを捕まえ縛り上げた。

「な!?!」

「きゃああ!?!」

「くそう!?!じゃあなんであなたは泣いてるんだ!?!  
泣いてるなら悲しい、辛いつてことだろ!?!」

「これは主の涙。道具である私が涙を流すわけがない……」

こいつは……くそう!?!この触手硬い!?!思ったより丈夫だ。

だったら無理矢理突破してやる!?!

「ネーベル!」

クラオエ  
K l a u e      フォーム  
f o r m、      シュタール  
S t a h l      ドラッハ  
D r a c h e

「バルディッシュ、バリアジャケット、パージ!?!」

S o n i c   F o r m

俺は身体強化特化のクラオエで、テッサと高町はパージを利用し触  
手から逃れる。

クラオエ・・・伸縮式の鉤爪をもつ近接攻撃特化の形態で、ネーベルの第2の姿。

シユタールドラッへ・・・鋼竜の名を持つ防御無視で身体強化と機動性を特化させたバリアジャケット。

上半身は「クロイツリッター」のコートを取り、黒のノースリーブでタートルネックのインナーの背中に、

グレーの龍が絡みついた赤い十字架が描かれたものを着用。

下半身もほとんど変わらず、ブーツが竜の脚を連想させるデザイン  
のグレーのメタルブーツに代わった程度。

俺と高町は一度下がりがり体制を立て直す、テッサはその場に居たま  
ま守護騎士を見据えていた。

「悲しみなどない？そんな言葉を、そんな悲しい顔で言ったって、  
誰が信じるもんか!!」

「あなたにも心があるんだよ！悲しいって言っていていいんだよ！  
あなたのマスターは、はやてちゃんはきつとそれに答えてくれる  
優しい子だよ。」

「だからはやてを開放して！武装を解いて！！」

「そつだ！まだ間に合うかもしれないんだぞ！！」

その時だった。突然地震と共に地面から火柱が上がり、結界内部の雰囲気が変わった。

もしかして！

「早いな・・・もう崩壊が始まったか・・・

私も時期意識を失くす。そうなれば、すぐに暴走が始まる。意識のあるうちに、主の望みをかなえたい・・・」

ブルーティガー  
Blutiger  
ドルヒ  
Dolch

守護騎士が右腕を前に突き出すと、俺たちの周りにさっきくらった赤い短剣が現れる。

「闇に沈め・・・」

それを合図に短剣は俺たちへと襲い掛かり、俺たちのいた場所に爆煙が充満する。

だが俺もテッサも高町も交わり、ダメージは受けていない。

高町はテッサが助けたみたいだが。

「……この、駄々っ子!!」

「いいかげんにしろよ……いいかげん……」

S o n i c  
D r i v e

B l i t z  
L i n i e

「「ゆじ」と……」

i g n i t i o n

「「きけ……!!」

俺とテッサは同時に守護騎士に攻撃を仕掛ける。

しかも高速形態で高速移動まで使って。

「・・・お前も、我が内で、眠るといい。」

「はああああ!!」

「ああああああ!!」

しかしそれはやつの障壁により止められ、そして・・・

「な、なんだ!？」

「え!?!え!?!」

「フエイトちゃん!ハガル君!」

吸収

「全ては、安らかな眠りのうちに・・・」

そして俺とテッサは、闇の書へと吸収された・・・

~<UJ~

## 第15話『運命と災い』（後書き）

人「以上第15話でしたがいかがでしたでしょうか？」

ハ「・・・」

人「どうした？」

異様に落ち込んでいるハガル。そしてゆっくりと作者の方を向き睨みつけながら。

ハ「なんで俺が吸収されてんの!？」

人「ああ、それね。うん。」

ハ「俺ってどつちかというと吸収する側じゃん!なんでされてんのさ!？」

人「そこはね、俺もギリギリまで悩んだのよ。それも3パターンぐらい考えて。」

ハ「その3パターンってのを聞こうか。」

人「まずは今回のパターン。フェイトとお前が吸収されるのだ。2つ目はなのはとフェイトの二人が吸収されるパターン。3つ目はフェイトのみ吸収されるパターンだ。」

ハ「なんで1つ目にしたんだよ？」

人「まあ理由はいくつかあるが、それぞれ大きな問題というか難点があつてな。まず2つ目だが、これだとお前とリインフォースとのガチバトルをかけるからいいかな？つて思ったのよ。けどどな、どうやってでかい魔力ダメージを与えるか。その方法が思い浮かばなかった。まあ設定にそぐわない形で方法があるといえはあるが、それはまだ出したくなかつたのよ。」

ハ「2つ目は、まあ、一応わかつた。んじゃ3つ目は？」

人「バランスの問題だ。いくらリインフォースでも2対1だとしても分が悪い。しかもお前となのはだとフロントとバックスでバランスもいいしな。まあ、結局3つ目はなんかシツクリこないからやめたんだ。」

ハ「それも確かにわかるが・・・」

人「納得いかんだろうがまあ我慢してくれ。次回16話はお前にとつて嬉しいことがある予定だ。いや、考えようによつては悲しいのかな。」

ハ「何だよそれ。そついや今回の設定はどうするんだ？」

人「今回は多いから別枠を取る。少しは早いけど設定資料第3弾だな。」

ハ「そうか。まあいいや。そついやさ、GWはなんか特別なことするの？」

人「まあ、考えていないわけではない。気が向いたらルート別のその後を1つ書こうかと思ってる。」

ハ「ルート別のその後？」

人「つまり、誰かと付き合ったり結婚したりした後の話ってことだ。」

ハ「ああ、なるほど。でもその場合誰を選ぶの？」

人「希望があればそれを書く、複数の場合は一番多いのだな。そうでない場合は完全に俺の気まぐれだ。」

ハ「何時も通りってわけね。」

人「それにGW中にあげれるかもまだ不明だ。そもそも書くか決めてもないからな。」

ハ「そりゃそつだ。」

人「んじゃま、今回はここで終わりにしようか。」

ハ「そつだね。それでは皆様、次回をお楽しみに。」

<暗転>

設定資料・その3 (15話までの追加分) (前書き)

タイトル通り設定のみです。

見ると作品が少し解り易くなしますよ。

## 設定資料・その3 (15話までの追加分)

〓 主人公〓

使用バリアジャケット

名前：シュタールドラツへ（鋼竜：Stahl Drache）

詳細：

主にクラオエ・フォルムの際に使用するBJ。

上半身はクロイツリッターのコートをとり、黒のノースリーブでタートルネックの背中に、

グレーの龍が絡みついた赤い十字架が描かれた状態。

下半身もほとんど変わらず、ブーツが竜の脚を連想させるデザイン  
のグレーのメタルブーツに代わった程度。

両腕は肘辺りから指先まで黒いインナーのようなもので覆っているが  
ネーベルを装着すると見えなくなる。

防御無視で機動性特化の形態。

フェイトの真ソニック・フォーム以上の装甲の薄さとなっているが、  
最低限環境変化に対応できるように設定はされている。

ネーベルリッター追加情報

クラオエ・フォルム（第2形態）へ鉤爪：Klaue

鉤爪型で攻撃・スピードの近接戦闘重視の形態。

鉤爪は伸縮式で邪魔にならないよう収納できる。

BJ：シュタールドラツへ

魔法

名前：ブリッツ・リーニエ（Blitz Linie）へ閃光の

線

系統：ベルカ式・補助・移動

加速：AAA+

速度：S（ハガルの最大値）

詳細：

ハガルが使用する高速移動魔法。

6段階の最高速度設定が存在し、設定を変えない限りいくら魔力を込めようと最初に設定した速度以上にはならない。

6段階目は速度の上限がなく理論上どこまででも速くなる。

名前：マハト・フリューゲル（Macht Flügel）  
「力の翼」

系統：ベルカ式・特殊・複合

制御：AAA

強度：S（最大値）

詳細：

ハガルが元々空中移動補助目的で組んだものだが、その強度から防御にも使われている。

見た目は鋼色をした二対の翼。（WガンダムゼロEW）

魔力変換を行えば水の翼になる。

名前：フィール・シルト（Viel Schild）  
「多くの盾」

系統：ベルカ式・防御・シールド

強度：AAA+（シールド1つの数値）

詳細：

薄くて強度の高いシールドを何重にも重ねて発動するシールド魔法。

1層目が破壊されても2層目が、それがだめなら次がというふうに確実に攻撃の勢いを殺す。

対物理だけでなく魔法防御力も高い。

ハガルは最初3層までしか発動できなかったが今後増える。

「ミオガルナ」

名前：トレスフォー

特徴：海に近い街

気候：日本に近い

詳細：

ミオガルナ中部にある貿易で栄えた港街。

冬がなく、夏もそれほど暑くならずとても過ごしやすい。

人の出入りが激しく犯罪も多く、そのためギルドナイトの支部がある。

ハンターも多く在住し、集会所はミオガルナでも有数の大きさ。

第16話『束の間の夢』（前書き）

人「今回は前回と比べると少し短いかな。」

ハ「今回はどうゆう話なんだ？」

人「今回は闇の書の中の夢、原作ではフェイトが体験したあれだ。」

ハ「あれか・・・ん？それを俺でってことは・・・。」

人「予想できるかもしれないが、結構フェイトと似たり寄ったりだ。んで勿論彼らも出てくる。」

ハ「そっか・・・。」

人「んじゃサクッと本編突入！」

## 第16話『束の間の夢』

〓?月?日 AM7:00 ハガルの部屋?〓

眠りから覚めると俺は自分の部屋のベッドで寝ていた。

「ここは・・・俺の部屋?でもなんで?

俺は確か夜天の書の最後の守護騎士と戦っていたはず。え?え?  
ネーベルもないしあれだけあった怪我もなくなってる。」

訳がわからなかった。

さっきまで魔法を使い、夜天の書をめぐる事件に関わっていたはず。  
状況に対応できず俺が混乱していると部屋の外から声が聞こえた。

「ハガル。ハガル、起きてるの?」

「え?」

その声を聞き、俺の思考は混乱により完全に停止した。

だってその声は、もう聞くことができない俺の大切な人の声。

なんで、何でこの人が。

「入るわよ。あらやっぱり起きてるんじゃない。」

「おかあ、さん……」

「どうしたの？」

これは夢なんだろうか？

だって……お母さんは4年前、事故で死んだはずなのに……

気付けば俺は、無意識に涙を流していた。

く  
とある水使いの物語

第16話『束の間の夢』

「ああ、皐月ハガルは起きたのかい？」

「ええ母さん。でも何時もと様子が違うのよ。

私の顔を見るなり急に泣き始めちゃったの。」

「お前が怖い顔でもしてたんじゃないのかい？」

「母さんじゃないんだからそんな顔はしません！！」

あのあと、とりあえず落ち着いた俺はお母さんと一緒に居間へ移動していた。

さっきのことをお母さんとお婆ちゃんが、朝食の用意をしながら話している。

……途中から文句の言い合いになっているけど。

いまだ困惑気味の俺は居間の入り口で立ち止まっていると、後ろか

ら懐かしい声が聞こえた。

「お義母さん、臯月。二人が言い合ってるからハガルが戸惑ってるじゃないか。」

朝なんだし、二人とも少しは落ち着いたらどうなんだい？」

さっきと同じだ。この声はもう聞くことがないはずの声。

俺は声の方を振り向くとそこには死んだはずのお父さんが居た。

「お父さん……」

「おはよう、ハガル。」

「あ、おは、よう……」

「あ、おはよう、ヴァイゼン。」

「ヴァイゼンさん、おはよう。」

「おはようございます。お義母さん、臯月。」

「聞いてよヴァイゼン！母さんがね」「落ち着いて！せっかく皆休みなんだし朝から喧嘩はやめよう、ね？」「……うん。」

「それじゃあ朝ごはんにするよ。ほら、皆座って!」

俺は言われるまま座り、朝ごはんを食べ始める。

皆で今日の予定を話ながらの朝食。

お父さんとお母さんの笑顔。もう見ることでできない笑顔。

理想の日常、俺にとってはまさに望んでいた日常だった。

そうか・・・これは夢。俺が望んでいた夢。

そう、何度も何度も望んで、二度と手に入ることのない夢。

俺とお婆ちゃん、そして死んだお母さんとお父さんの四人で過ごす未来。

でも・・・だからここに俺は居ちゃいけない・・・

「じゃあ今日は午前中は何時も通りで稽古。午後からは散歩に出かけようか。」

俺が考え事をしている間に決まった今日の日程をお父さんが確認していた。

……この日常をもっ少し過ごしたい……

そう思う俺の心は弱いのだろうか？

疑問の答えは返ってくるはずもなく、俺の心の中へと消えていった。

～海波家道場～

「はああ!」

「でやあ!」

目の前でお婆ちゃんとお母さんが組み手という名の模擬戦をしてい

る。

お婆ちゃんは太刀ほどの大きさの木刀を1本、お母さんは小太刀サイズの木刀を2本使っている。

お母さんはお婆ちゃんの攻撃を捌きつつ、攻撃に回る隙を狙っている。

「そこだ！」

お母さんが一瞬の隙を狙い、左の木刀でお婆ちゃんの攻撃を払いつつ右の木刀で攻撃を繰り出す。

が・・・

「ふん！甘い、ね！！！」

「え？きゃ！！！」

お婆ちゃんは払われた木刀に力を込め、力技でお母さんを木刀ごとなぎ払った。

そのまま道場の壁へと飛ばされたお母さんにお婆ちゃんが木刀を突き立てる。

そこで勝負は決まり、お父さんが判定を下した。

「そこまで!」

「まだまだだね。あんたにやまだ力が足りないよ。」

「いてて・・・母さんは力が強すぎるんですよ!普通こんなことできませんって!」

「連駆が使えりゃそうでもないんだけどね。そっぴゃあんた、連駆が苦手だったね。」

お母さんって連駆が苦手だったっけ。そっぴゃ前にお婆ちゃんが言ってたな。

「そんなんでよく学校の看護師が務まるね。」

「普通の看護師は連駆なんてものつかいません!」

「まあまあ二人とも、今度は僕とハガルがやるから下がって。」

次は俺とお父さんの模擬戦。

現実では叶わなかった俺の夢に一つ。

「最近ハガルは頑張ってるからね。そろそろヴァイゼンさんでもやばいんじゃないかい？」

「まだまだ息子には負けませんよ。いくら体力作りが目的の参加といつてもね。」

「体力作りが目的の人間に負けるなんて、うちの娘は才能がなかったのかね？」

「そんなこと言わないで！私の才能が無いんじゃないくて、ヴァイゼンがすごいだけだから。」

「確かにそうかもしれないね。ああ、私はさきに母屋のほうに戻ってるよ。」

そういってお婆ちゃんは母屋の方へと行ってしまった。

そして俺とお父さんは中央で向かい合い、お互いに武器を持って構える。

俺はお母さんと同じで小太刀サイズの木刀を2本、お父さんは日本刀サイズの木刀を1本。

お父さんは木刀を腰に差し居合いの構えをとる。

そっぴいやお婆ちゃんが言っただけな、お父さんの居合いはかなりすげえ。

「はじめ！」

「は！」

お母さんの合図とともに俺は連駈を使って接近した。

それを見越していたお父さんはすぐさま抜刀、しゃがんでギリギリ回避しそのまま右横を通り過ぎ、すぐさま体勢を立て直す。

お父さんもすぐに居合いの体制になりこちらを見据える。

俺はまた駆け出すが、今度はお父さんを中心に円形に回り隙を探る。

「今度は様子見か？まあ妥当なせんた。

しかし、正直さっきのかわされたときは驚いたよ。」

「・・・ありがとう。」

「どうした？今日は元気が無いな。」

「そんなことないよ。」

そんなことあるもんか。お父さんと手合わせできるなんて、本当に夢のようで嬉しいんだ。

いや、実際は夢なんだけどさ・・・

でも・・・いや、だからこそ、この時間が終わってしまうのが辛い。

八神の事もある。早く戻らないと助けられなくなってしまつてしまつ。

それは避けなきゃいけない。

俺がどうしようか悩んでいる時だった。

「稽古中にほかの事を考えるのは感心しないな。」

一瞬の隙を突いたお父さんが俺に攻撃を仕掛けてくる。

それをギリギリで受ける、するとお父さんはすぐに離れてまた同じ

体制をとろうとする。

だけど今度は俺がそれを許さない。

離れようとするお父さんに突っ込んでいき、そのまま胴へと一太刀入れる。

「でやあああ！！」

「あぐ！？」

「それまで！」

お母さんの合図で俺とお父さんの模擬戦は終了を迎えた。

「いや、負けちゃったな、ははははは。」

「.....」

終わりたくない、でも終わらせなければいけない。

そんな複雑な感情で俺がうつむいていると。

「どうした？……八神はやてちゃんのことか？」

「!！」

それを聞いた俺は顔を上げた。

たぶんその時の顔は何故それを？という顔だったと思う。

「僕たちだってここが夢の世界だということはわかっているぞ。」

「お父さん、お母さん……」

お母さんの方を向くと辛そうに頷かれた。

「せめて夢の世界であろうとも、少しでもお前と共に過ごしたかったんだ。」

僕も、それに臯月もね。こんな状況なのに駄目な親だな、僕達は。

「

「そんなことない！そんなことないよ。」

俺だってもっと一緒に過ごしたい！過ごしたいけど……

「お前にもやらなければいけないことがある。」

「だから、行かなきゃいけないのよね。」

そういつて近づいてきたお母さんの手の中にはネーベルがいた。

512

「ネーベル！」

マスター、大丈夫でしたか？

「ああ、俺は大丈夫だよ。ネーベルはどう？」

私も問題ありません。いつでも戦闘に復帰できます。

お互い無事を確認していると。

「ハガル……いくのか？」

「お父さん……うん、俺、行くよ。」

「ハガル、今回のことはしょうがない。けど今後、こんな無茶はしないよね？」

あなたは……私たちの大切な息子だから。」

「お母さん、お父さん……。」

「僕達はそろそろ行くよ。」

そついうとお父さんたちは道場から出て行った。

最後に見えた二人の顔は、涙にぬれていた。

マスター……

「ネーベル、大丈夫。俺は大丈夫だ。」

はい

「いくぞ！ネーベル、セットアップ！」

Set up ケーニヒ König フォーム Form

バリアジャケットを纏うと、さっきまでのポロポロの俺に戻る。

はは、痛みまで戻ってきたよ。でもそんなことは言ってもらえない。

「センチネル、グロースシュヴェーアト。」

gro      Schwert

「いけるな、ネーベル？」

いつでも

俺はセンチネルを右薙になるように構える。

そしてセンチネルの剣先に極限まで薄く圧縮、硬くした水のシールドを高速回転させ固定する。

攻撃魔法が使えない俺が考えた斬撃魔法。

殺傷設定の切り替えなんかはできないが、切れ味だけは本物。

カートリッジを4発使用し、さらに強度と回転をあげていく。

「ベルカ、清心流複合剣技……」

……おようなら、お父さん、お母さん。

そして……行ってきます！

「まごつえんじん魔光円鞠！！」

右薙ぎに斬ると世界がまるでガラスのように割れた。

そして俺は、もとの世界へと戻っていった。

くっくくく

第16話『束の間の夢』（後書き）

人「まあ、こんな感じですよ。」

八「……………」(号泣)

人「うお！」

霧「それほどご両親と合えたのが嬉しかったのでしよう。」

人「それは俺もわかるな。死んだ家族に会えるって、結構くるからね。」

霧「今回はオリジナルの話ですが、やけに短いですね？」

人「ああ、まあなんつうか微妙にスランプ？」

霧「なんですかそれは……………」

人「ん〜うまく形にできないんだよね。形にできてもなんか納得できなかつたり。今回はまだいいんだよ。ただ次の話がね。ここ乗り切ればまたかわるんだけどさ。」

霧「また息抜きで番外編でも書けばいいんじゃないですか？前回の後書きでもそんなこと言ってましたし。」

人「そうするかね……………」

霧「まあそんな作者は放って置いて設定行きますか。」

人「ひどくね!？」

名前：海波 ヴァイゼン

性別：男

年齢：29歳（享年）

生年月日：7月7日

人種：スウェーデン人

身長：183cm

体重：78kg

血液型：O型

出身地：スウェーデン

魔導師ランク：E-

魔力光色：不明

好き、得意なこと：医療（外科）

好きな物：家族

嫌い、苦手なこと：水泳

嫌い、苦手な物：納豆、梅干

詳細：

ハガルの父親で、旧姓はアンスール。

海波家に婿養子としてきた。

外科医で将来を有望視されていたが、4年前（ハガル5歳）交通事故で他界している。

アリサの父親と友人でかなり仲が良かった。

先祖にベルカ人がいたらしく、ヴァイゼンも魔力を少量ながら持っているが、魔法の存在を知らない。

名前：海波 皐月

カウチ

性別：女

年齢：27歳（享年）

生年月日：5月2日

人種：日本人

身長：163cm

体重：????

血液型：B型

出身地：日本・鳴海

好き、得意なこと：家事全般

好きな物：ヴァイゼン、ハガル

嫌い、苦手なこと：連駆、球技

嫌い、苦手な物：母親（苦手）

詳細：

ハガルの母親。

海波家の頭首になる予定だったが、余りにも腕が上達しないので看護師になった経緯を持つ。

留学先でヴァイゼンと知り合い、そのまま恋愛結婚した。

ヴァイゼン同様4年前に交通事故で他界している。

ハ「おと〜〜さ〜〜ん！！おか〜〜さ〜〜ん！！」

人「ええい、落ち着け！」

ハガルに麻醉銃を撃つ作者。強力だったのか速攻で寝るハガル。

霧「これがマスターのご両親ですね。しかし驚きなのはヴァイゼン殿ですね。まさか先祖にベルカ人がいるとは。」

人「ハガルが魔法、魔力吸収を使えるって、そのための設定だ。まあヴァイゼンは魔法が使えない上に存在を知らないんだけどね。」

霧「なるほど・・・あ、設定紹介も終わりましたし、そろそろいい時間なのでここで区切りますか？」

人「そうだね。んじゃメよろしく。」

霧「それでは皆様、次回をお楽しみにお待ちください。」

人「では〜。」

< 暗転 >

番外編 『起こりえる未来での日常・アリサ編』

ここはミッドチルダ東部の山岳地帯にある、医療機関『ユートピア』の研究所の一室。

俺はそこで書類のチェックをしていた。

この研究所で俺は新しい医療技術や、薬品開発の研究を行っている。ちゃんと医師としても活動をしているが、今はこっちがメインになりつつある。

まあ、そうなった経緯は端折らしてもらうが、一言で言うならスカリエッティの影響、だろうな。

書類もひと段落つき、少し冷めてしまったコーヒーを飲み一息つく。

そして机の上にある三つの写真のうち一つを見る。

「そっか、もう7年になるんだな・・・」

JS事件、その事件があったのはもう7年前になる。

俺は写真を見て昔を思い出していた。

ちなみに写真はあのサバイバル模擬戦の後の写真だ。

六課解散後はいろいろ合った。

俺個人として、一番驚いたのは高町とユーノの結婚だろうか？

これには皆驚いていたと思う。特にテツサと八神がね。

ちなみにこの二人ははまだ独身で、仕事に明け暮れる毎日。

ぜってー婚期を逃すと思うのは俺だけだろうか？

俺？俺はもう結婚してるよ。

JS事件の1年後だったかな、結婚しましたよ。

二つ目の写真。

そこには白いタキシードを着た俺と、純白のウェディングドレスを着て、

顔を真っ赤にしながらも幸せそうな笑顔を浮かべているアリサの姿があった。

くとある水使いの物語

番外編『起こりえる未来での日常・アリサ編』

現在の俺の名は、ハガル・U・バニングス、見てわかると思うが、バニングス家に婿養子として入った。

ちなみに「U」は海波の「U」ね。

んで、なんで婿養子になったかというと、アリサのお父さんのデビットさんは世界的に活躍している大企業の社長なわけよ。

そのバニングス家の唯一の跡取りがアリサなわけよ。

で、結婚相手はしがない医者俺。

どっちの性を残すかって話になったとき、俺はバニングスの性を残すことを真っ先に提案した。

うちには義理とはいえ、義弟も義妹もいるからね。

ただこの話をしているとき、アリサがボソッと「海波の性を名乗りたかった。」って、言っていたのは俺の心の内に秘めておこう。

ま、とにかくだ。俺とアリサは結婚した。

「ちょっと、何時までどこに向かって喋ってんのよ？」

「ん？アリサか、お約束事だよ。」

こんにちわ、アリサ殿。

「何よそれ？あ、こんにちわ、ネーベル。」

いつの間にか我妻アリサが部屋に入ってきていた。

ちなみにアリサはバニングス家の経営する会社の、ミッドチルダ支社の副社長をしている。

アリサに経験を積ませることと、ミッドでの商売をつてのがデビッドさんの当初の計画だったが、

アリサは予想以上に成果を出し、実力で副社長まで上り詰めた。

まじこいつの頭脳と行動力はすごい。

「今日の仕事は午前中までっていったじゃない？  
連絡もないからこっちから来てやったわよ。」

「すまん。緊急の書類が合ってさ、まあそれも終わったとこだ。」

現在午後1時前・・・完全に待たせちゃったな。

「ならさっさと準備する！レディを待たせてるんだからそれ相応の  
対応をしてもらおうよ?。」

「ま、しょうがないな。連絡を入れなかった俺が悪いわけだし。」

そういつて俺は出かける準備をする。

準備といっても、着ていた白衣を脱いで財布と通信機を持つだけな  
んだけどね。

「んじゃさっさと行きますか。どこ行く?。」

「エスコートぐらいしなさいよ。」

「はは、了解、まずは昼でも食べようか。最近できた店でもいいか？」

「かまわないわ。」

そうして俺たちは手を繋いで店へと向かった。

私達はハガルの言う最近できたお店へと車で移動中。

運転しているのはもちろんハガル。

それにしてもこの馬鹿は、他人のこと、それも命に関わることだと自分を省みないのは結婚しても変わらない。

いや、息子のレオスが生まれてからは少しマシになったのかしら？

さっきの書類、少し見えたけど例の心臓移植手術にまつわるものだった。

大方代えの心臓を待つよりも作ってしまおう、って考えなのだろう。

で、あの書類はその手続きのもの。

ハガルらしいといえぱらしいんだけどね。

「で、そのお店っていつのはどこにあるの？」

「あと10分ぐらいかな、湖が近くにある店なんだ。  
なんでも地球の料理をミッド風にした店らしいんだ。」

「また微妙な店ね・・・」

「味は評判いいぞ。」

こいつはよく変な店を探しては食べに行っている。

本人曰く、新境地開拓とのことらしいが・・・

たまに私やレオスも連れて行ってもらうが、その時はたいてい当たりらしい。

本人が言うにはハズレの方が多いとか。

「それにしても休みが重なるなんて久しぶりよね？」

「といっても私のほうがなかなか休めないんだけどね。」

「まあそれはしょうがないだろ？」

アリサは副社長やつてるわけだし、そもそもミッド支社ってまだ軌道に乗ったばかりだし。」

お互いに仕事は忙しいのだが、ハガルは意外と休みを取れている。

医者が本職じゃなくなったのと、ユートピアの研究職は期日までに結果を出せば家で仕事をしてもいいからだ。

そのおかげでハガルは自宅で仕事をするが多くなった。

だけど私はそうもいかず、朝早くに家を出夜遅くに帰ってくるということを繰り返している。

527

「秘書にリヒトがいるんだし、少しは任せるのもいいんじゃないか？」

「そう思ってるんだけど性分かしらね、どうしても自分でやっちゃうのよ。」

「それじゃあ人材が育たないのは解ってるんだけどね。」

私の悩みの種の一つ。自分でやったほうがいいからと自分ひとりで仕事をしてしまう。

それを思い出し悩んでいると。

「解ってるならいいんじゃないか？」

まあ人材を育てないと社会的にはやばいんだろうけどさ。

それに人材教育は基本リヒトや他の人たちがやってんだろ？  
なら問題ない、お前はお前のやり方でいけばいい。」

「ハガル・・・」

「それにな。」

「え？」

「どこのワーカーホリック三人に比べたら全然マシだ。」

「あの三人が異常なのよ。・・・まさかまたなの？」

「ああ・・・」

ワーカーホリック三人とは、なのは、フェイト、はやての三人のこと。

またかっていうのは、定期健診をすっぱかしたこと。

この三人は私たちの幼馴染でもあり、ハガルの患者でもある。

そして定期健診にこない問題児でもある。

「……今度俺の権限で強制入院させようか……」(小声)

なんか企んでるみたいね。

まあ、あの三人が悪いんだから自業自得よね。

そんな会話をしていると目的地に着いたようだ。

外見は普通のレストランのようだけど中はどうかしら？

ま、味はいいらしいから大丈夫でしょう。

俺たちは遅めの昼食を食べ店をでた。結果を言おう。

確かに味は良かった。良かったんだが……

「あの見た目と味のギャップはどうにかならないのかしら？」

そう、見た目と味が一致していなかったのだ。

解り易く説明しよう。カレーというのは一般的に辛いか甘いかのどちらかだ。

だがこの店のカレーは酸っぱいのだ。匂いも普通、見た目も普通、しかし味は酸っぱい。

いや美味いんだよ、美味いんだけどね……

アリサはペロンチーノを頼んでいたが、その味はケーキのように甘かった。

「あれは別物として食べれば美味いが、地球の感覚で食べると食べないな。」

「そうね。納得いかないのはそれでも美味しいってところね。」

「確かに、味は評判通りだったな。」

「この後はどうするの？まだかなり時間があるわよ。」

「街に戻って買い物しようかと思ってるが、どうだ？」

「OKよ。それじゃあさっさと移動しましょう。」

そうして俺たちはまた車に乗り、今度は街へと向かった。

移動中に暴走族と出くわし、イチヤモン付けていたのでサクッと潰しといた。

もちろん死なない程度に。

ただいま夜の8時過ぎ。買い物は順調に終わり現在バーで乾杯中。

買い物中はいろいろ合った。

服を試着したアリサを褒めると顔を真っ赤にし、「当然よ！」っと未だに初々しい反応を見せていた。

俺がその反応を楽しんでいると、仕返しとばかりにランジェリーシヨップへと俺を連れ込むアリサ。

だが俺は下着ごときではうろたえたりせん。

なんたつて義妹の一人がずぼらで、よく下着姿で家をつろつき回ってたから態勢がついているのだ。

そんな俺を見て不機嫌になったアリサを宥めたり、今度は不良集団に絡まれたりと色々あった。

ちなみに今回の買い物で使用した額は日本円にするときつと50万ほどかな。

俺は高収入なくせに、普段余り金を使わないからたいして痛手というわけではない。

まあさすがに毎日続けばきついが・・・

「ねえ、ハガル。レオスは大丈夫かしら？」

「大丈夫だつて。さすがに雷隼<sup>レイスン</sup>だけだと不安だけど、今回はディー  
ドやオットーもいるから大丈夫だつて。」

「あの二人がいるなら安心ね。」

「それよりも、今は二人の時間を楽しもう。  
久しぶりに二人きりになれたんだからさ。」

「ふふ、それもそうね。」

その後気分が良かったため、二人してかなりの量を飲んだ。

俺は酒に強いので大丈夫なのだが、アリサはそうでもない。

なので現状かなりやばい・・・アリサがやばい！

「らからあいつむかつくのよ・・・て、きいてんろ？」

「聞いているから少し落ち着け、な？」

「おちついてえるわよ」

「もう今日は止めとけ、な？・・・あ、こら！それ俺の・・・」

そして俺の制止を聞かず、飲んでいたウイスキーを一気飲みするアリサ。

これだけ酔ってるのかそんなものを一気飲みしたらどうなるか。

勿論つぶれます・・・

「ああ・・・寝ちゃったか。」

その後会計を済ませ、転移魔法で家に帰った。

車はどうしたかって？

店の人に頼んで置かせてもらってる。

さすがに飲んだ状態で運転するわけにもいかんし、何よりアリサをちゃんと寝かせないといけないからね。

「ただいま。」

「お帰りなさい・・・って、どうしたんですか？」

「ああ、ディードか。いや、見ての通りアリサがつぶれたんだ。」

「そうですね。でもアリサさんがつぶれるまで飲むなんて珍しいです。」「

「よっぽどストレスが溜まってたんだろ。レオスはどうしてる？」

「オットーと一緒に寝てます。今日一日、二人で遊んでましたよ。」

「あいつオットーに妙に懐いてるからな。あ、俺は寝室にこいつを連れて行ってそのまま寝るから。」

「デイドも、もう寝なよ。」

「はい。お休みなさい。」

「ああ、おやすみ。」

二階の寝室へ行き、アリサをベッドに寝かせる。

するとアリサがいきなり抱きついてきた。

「ア、アリサ？」

「……………うふふふ」

な、何故だろう……いやな汗が背中を流れる。

そして俺はアリサの顔を見る。そこには何故か狩る者の眼をしたアリサがいた。

気付けば俺はアリサの下になり、アリサは俺の腹に馬のりしていた。

「あ、アリサさん。ナゼフクラヌイデラッシャルノデショウカ？」

「そんなの簡単じゃない。」

えらく艶かしい表情をしながらんなことを言う。

気付けば俺も服を脱がされていた。

何時の間に!?

これはあれだね、うん、俺食べられちゃっつね……

「いただきます」

「いただかれまーす!!」

こうして俺たちの夜が始まった……

その数カ月後、バニングス家に新たな命が誕生したとか。

く  
終  
わ  
り  
く

## 第17話『聖夜の決戦』（前書き）

人「やってまいりました、原作で有名なトリプルブレイカーの回です！」

ハ「やっとここまでできたのか。でもさ、俺ってこの回役に立たないかな？ 攻撃魔法が使えるわけじゃないし。」

人「安心しろ！ちゃんと見せ場はつくってるから。」

ハ「作者の安心はイマイチ信用できないんだけど・・・」

人「んじゃさつさと本編行こうか。」

霧「〜とある水使いの物語」 第17話、ミッションスタート！」

## 第17話 『聖夜の決戦』

あの夢の世界から脱出することはできだが、現状はあまりよくないようだ。

高町はボロボロだし、目の前には黒く輝く魔力の球体と白く輝く小さな球体がある。

たぶん黒い方が闇の書の闇と呼ばれているのじゃないかな？

その黒い球体から地鳴りのような音が聞こえる。

なんかいやな予感がする……

『皆、下の黒い淀みが暴走の始まる場所になる。』

クロノ君が着くまで無暗に近づいちゃ駄目だよ！』

「はい！」

……これはやばいんじゃないの？

とある水使いの物語

第17話 『聖夜の決戦』

それは突然だった。

白い球体を中心に四つのさらに小さな球体が現れたと思ったら、急に白い球体から光と共に魔力が放出された。

そしてその光の中から、四人の守護騎士が白い球体を中心に現れたベルカの魔方陣の上に立っていた。

「あ。ヴィータちゃん！」

「シグナム！」

「ザフィーラさんにシャマルさんも！」

「我等、夜天の主の下に集いし騎士」

「主ある限る、我等の魂尽きることなし」

「この身に命ある限り、我等は御身の下にあり」

「我等が主、夜天の王、八神はやての名の下に！」

そして白い球体は砕け、中から八神が出てきた。

「はやてちゃん！」

高町の呼びかけに笑顔で答える八神。そして。

「夜天の光よ、我が手に集え！」

祝福の鐘、リインフォース、セーッとアップ！！」

掛け声と共に八神はは騎士甲冑を纏い、さらに髪の色も変わった。

これがネーベルの言っていた、ユニゾンってやつなのか。

やっと八神も助かり、家族が揃いその嬉しさにヴィータは八神へ抱

きつき泣き始めた。

よかったな、八神、それに騎士の皆。

俺たちは八神のもとへ向かい、魔方陣の上に立つ。

「なのはちゃんとフェイトちゃん、ハガル君もごめんな。  
うちの子たちが色々迷惑かけてもうて。」

「ううん。」

「平気。」

「気にするなうて。」

「すまないな。水をさしてしまうんだが・・・」

俺たちの後ろに現れたクロノさん。あなたそんなじゃ、将来KY  
って言われますよ？

まあ、仕事だから仕方ないのかもしれないけど。

「時空管理局執務官クロノ・ハラオウンだ。時間が無いので簡潔に  
説明する。」

あそこの黒い淀み、闇の書の防衛プログラムが後数分で暴走を開始する。

僕らはそれを何らかの方法で止めないといけない。  
停止のプランは現在2つある。」

やっぱそんなに時間があるわけじゃなかったんだな。

そしてクロノさんは、そのプランとやらの説明を始める。

「1つ、極めて強力な氷結魔法で停止させる。

2つ、軌道上に待機している艦船アースラの魔導砲、アルカンシエルで消滅させる。

これ以外に他にいい手はないか？

闇の書の主と、その守護騎士の皆に聞きたい。」

この2つ以外、か。何か無いもんかな？

俺が考えているとシャマルさんをはじめ守護騎士の四人が提案、と  
いうか指摘をした。

「えーっと、最初のは多分難しいと思います。

主のない防衛プログラムは魔力の塊のようなものですから。」

「凍結させてもコアがある限り再生機能が止まらん。」

話には聞いてたけど、凍結させても再生するとか、防衛プログラムって凄過ぎだろ。

「アルカンシエルも絶対駄目！」

こんなところでアルカンシエルぶっ放したらはやての家までぶっ飛んじゃうじゃんか！」

「そ、そんなにすごいのか？」

「発動地点を中心に、百数十キロ単位の空間を歪曲させながら反応消滅を起こさせる魔法。」

「そういえばわかる？」

「あの、私もそれ反対！」

「同じく、絶対反対！」

高町やテッサも同じく反対。当たり前だ！

そんなもんここでぶっ放したら鳴海市がだけじゃなく地球がやばい！

「僕も艦長も使いたくないよ。」

どうやらリンディさんも使いたいとは思ってないみたい。

でもなあ・・・

「でも、あれの暴走が本格的に始まったら、被害はそれより遙かに大きくなる。」

「暴走が始まると、触れたものを吸収して無限に広がるから。」

「アルカンシエル撃つなら被害は地球のみ、そうしないなら被害は次元世界全体に広がるってところですか？」

「そういうことだ。」

「それなら、俺の能力を使って魔力を吸収し消滅させる、っていう手もありますか・・・」

その場合、マスターが負荷に耐え切れず内側から魔力爆発を起こし、

周囲に被害を及ぼすでしょう。

なによりマスターが死んでしまいます。

「それはだめー！ー！ー！！！！」

「もちろん却下だ！！」

俺が粉々になるところを想像した数名が苦い顔をしている。

というか俺だつてする気はない

しかし他に案ねえ・・・うん・・・こりゃ本格的にやばいな。

なにかいい手はないかな？

被害が無くアルカンシエルの撃てる場所・・・

なんか引つかかっているんだけど出てこない。

『はい皆！暴走臨界点まであと15分を切ったよ！

会議の決断はお早めに！』

もうそれだけしか時間が無いのか。

「何か方法はないか？」

クロノさんは改めて騎士たちに聞くが・・・

「すまない。あまり役にたてそうもない。」

「暴走に立ち会った経験は、我等にもほとんどないのだ。」

「でも、なんとか止めないと、はやてちゃんのお家が無くなっちゃ  
うの嫌ですし！」

「いや、そういうレベルの話じゃないんだが・・・」

シヤマルさん、こんなところで天然を發揮しなくても・・・

それにしてもやっぱりいい案はないか。

「戦闘地点をもっと沖合いにできれば。」

「海でも空間歪曲の被害はでる。」

答えはなかなか出ない。すると痺れを切らしたのかアルフさんかともんでもないことを言い始めた。

「あゝ、なんかゴチャゴチャ鬱陶しいなあ！  
皆でズバつとぶつ放しちゃうわけにはいかないの？」

「あ、アルフ、これはそんなに単純な話じゃ。」

「んんん。」

ズバつとぶつ放す・・・アルカンシエルをぶつ放す・・・

アルカンシエルはアースラに付いてる・・・アースラは今軌道上にいる・・・

軌道上、つまり宇宙空間・・・宇宙には特に何も無い・・・

「あ！これだ！」

「うわ、どうしたんだ急に声を上げて？」

「クロノさん！アルカンシエルって発射場所に制限とかありますか？」

「制限というと？」

「例えば、今アースラがいる場所。つまり宇宙空間とか。」

『管理局のテクノロジー、なめてもらっちゃ困りますなあ。撃てますよ。宇宙だろうが！どこだろうが！』

「おいちょっとまって！ハガル、君はまさか！？」

「そういうことです。」

俺の言っている事が解ったのか、高町たちもやる気をだしたようだ。

あとは、皆の力しだいでとこだな。

ハガルさんの言っていること、解るけどかなり無茶でもある。

というか恥ずかしい話、私は思い浮かばなかった。

「なんとまあ、すごいことを思いつくわね。」

「計算上では実現可能っていうのがまた怖いですね。」

クロノ君、こっちの準備はOK！暴走臨界点まであと10分！」

皆、頑張っつて。ここが正念場よ。

というわけで、アースラの準備もできた。あとは……

「実に個人の能力で、ギャンブル性の高いプランだが、まあやってみる価値はある。」

「というか、やらないと駄目なんですけどね。」

「防衛プログラムのバリアは魔力と物理の複合四層式。まずはそれをやぶる。」

「バリアを抜いたら私たちの一斉砲撃でコアを露出。」

「そしたらユーノ君たちの強制転移魔法でアースラの前に、転送！」

「んで、アルカンシエルで消滅させる。まあ、作戦自体はシンプルだね。」

「ああ、それじゃあ各自準備に入ってくれ。」

これで最後だ。もってくれよ、俺の体。

そして……

『暴走開始まで、あと2分!』

時間が迫るにつれて、防衛プログラムから感じる魔力が黒く、澱んだものになっていく。

これは2分もかからないんじゃないか？

「あ、なのはちゃん、フェイトちゃん、ハガル君。」

「ん？」

「シャルル。」

「はい。三人の治療ですね。  
クラールヴィント、本領発揮よ。」

Ja

「静かなる風よ、癒しの恵みを運んで！」

シャルルさんの回復魔法、それにより俺たち三人の魔力と体力、そして怪我は回復していった。

すごいな。BJの損傷まで直ってるよ。

そしてその時だった。

術を発動していたシャルルさんと回復対象の俺たち三人は完全に無防備だった。

そこへ防衛プログラムからの砲撃。

「シャマル！」

だれが叫んだかはわからない。

俺はすぐシャマルさんと砲撃の間に入り、シールドを展開する。

皆が援護にしようとするがそれも遅かった。

「うぐうぐうああああ……！」

「ハガル君！」

カートリッジを全部使い、シールドを強化するがその均衡も一瞬。

ガラスが割れるような音と共にシールドは壊れ砲撃が俺に直撃した。

「ハガル！」

「いやああああ……！」

直撃の衝撃で後ろへ吹き飛んだ俺をユーノがギリギリで受け止めた。

あ、やばいね。治りかけてた傷も全部開いちゃった。

しかも今ので完全に魔力切れだよ。

こりゃもう無理かな・・・

魔力が切れたことで痛覚遮断も停止、それによりハガルの体を激痛が襲う。

しかし、皮肉にもその激痛のおかげで、ハガルは意識を保っていた。

「ハガル！ひ、ひどい・・・」

ユーノはハガルの体を見て思わず目を背けた。

ハガルのBJは上半身が完全に消失、ハガル自身も両腕を骨折。

胸は砲撃による怪我で血が止まらず真っ赤に染まっていた。

ネーベルリッターも損傷が激しくひび割れと欠損が目立つ。

「お、おれ、よりも・・・ぼ・・・えい、ぷ・・・プログラムを・・・」

「黙って、傷に響く！今回復魔法をかけるから！」

「シヤマル、お前も頼む！シヤマル？」

「あああ・・・」

シヤマルは目の前で起こったことが信じられず動揺していた。

「い、いか・・・ら。くるぞ。」

砲撃によって開いた穴、それを中心に罅が入り黒い球体は碎け散った。

その中から現れたのは、様々な生物が混合した防衛プログラムだった。

六つの脚のうち、前二つは竜の腕のようで残り四つはどこか昆虫を  
思わせる形状をしている。

胴体には3対の翼を持ち、2対は漆黒の鳥のような翼、残りは漆黒  
の竜を髣髴させる翼さらに長い尻尾。

頭部にあたる部分には8本の大きな角に大きな口をもち、さらにそ  
の上に女性の上半身のようなヘッドパーツが付いていた。

「え、エイミーさん・・・お・・・れ・・・じゃまにな・・・から・・・  
てん、そう、おねがいします。」

『わかった、すぐに転送するから！医務室は準備してて！』

「ハガル君・・・」

「き、しないで・・・みんな。」

「なに？」

誰がどう見ても重症だがそれでもハガルは喋った。

「ぜ・・・りょくぜ・・・かいで、いけ！」

それを告げると同時に意識を失い、転送された。

皆彼を心配していたが、そんな中意外な人物が戦闘再開を指示した。

「皆、今は防衛プログラム破壊に集中して！今ここで」

「シヤマル・・・」

「今ここで防衛プログラムを破壊できなかったらどうするの？  
ハガル君が心配なのはわかる！でも今は！」

「ああ、そうだ。今は防衛プログラムを優先だ。行くぞ皆！」

「」「おっ！」「」

クロノの掛け声と共に皆が戦闘体勢になる。

そして闇の書の闇。それを破壊するための作戦が始まった。

「チェーンバインド！」

「ストラグルバインド！」

「縛れ、鋼の軛！ てえやああー！！」

まずはユーノとアルフ、ザフィーラのバインドにより周辺の触手を切断していく。

これにより、一先ずは攻撃が通り易くなった。

次にバリアを打ち破るため、ヴィータとなのはが構える。

「ちゃんと合わせるよ、高町なのは！」

「ヴィータちゃんもね！」

「鉄槌の騎士ヴィータと、鉄の伯爵グラーファイゼン！」

そしてカートリッジを使用し、グラーファイゼンの姿を変える。

G i g a n t f o r m

「轟天爆砕！」

その姿は八角形の円柱が二つついた巨大なハンマー。

ヴィータが振りかぶることですさらに巨大になる。

その大きさはとても対人用とは言えず、まさに巨大生物を叩き潰すための形態といえた。

「ギガントシュラーク!!」

グラーファイゼンの直撃により、バリアの第一層目、物理障壁が破壊された。

その攻撃のすぐあとになのはもつづく。

「高町なのはとレイジングハート・エクセリオン、行きます!!」

なのはがレイジングハートを天に構えると、レイジングハートはカートリッジを4発使用。

そしてその矛先に魔力の翼を宿した。

「エクセリオンバスター！！」

それをさっした防衛プログラムが、再生した新たな触手を向けてくるがそれも無駄に終わった。

B a r r e l S h o t

この攻撃により触手は動きを妨害され、さらに不可視のバインドが動きを止めた。

そしてその隙になのはは魔力を溜め、その魔力を開放した。

「ブレイク……」

四条の桃色の砲撃が魔力障壁に激突するが、それだけでは突破することはできない。

だがエクセリオンバスターの真価はここからだった。

「シュート!!」

更なる砲撃を放ち、先に発射していた砲撃を飲み込むことで威力を増した。

その強大な砲撃により、魔力障壁となる二層目が破壊された。

「次、シグナムとテストアロツサちゃん!」

シャマルの指示のきいたシグナムは、すでに防衛プログラムの後方に位置どっていた。

「剣の騎士シグナムが魂、炎の魔剣レヴァンティン。刃と連結刃に続くもう一つの姿。」

シグナムは鞘と柄頭を連結させカートリッジを1発使用、弓を形成し矢を構えた。

B o g e n   f o r m

「翔けよ、隼！」

S t u r m f a l k e n

極限まで魔力が籠もった矢を放ち、障壁を突破した。

フェイトがそれに続く。

「フェイトテストロッサ、バルディッシュ・ザンバー、行きます！」

フェイトは大剣と化したザンバーフォームのバルディッシュを構え、魔力を籠め始めた。

カートリッジを3発消費し、さらに魔力を籠め体を回転させ衝撃波を放つ。

その衝撃波により、再生しかけていた触手を切断、さらにバルディ

ツシユの剣先を天に掲げ雷の力をも加える。

「撃ち抜け、雷神！」

Jet Zamber

振り下ろされた魔力の刃はそのまま伸び、最後の障壁ごと防衛プログラムを両断した。

防衛プログラムは苦しみの咆哮をあげながらもすぐに再生をはじめ、さらに砲撃用の触手を展開、

そのまま発射しようとしたが。

「盾の守護獣ザフィーラ！砲撃など撃たせん！」

その触手もザフィーラによって生み出された鋼の輓によって阻止された。

「はやてちゃん！」

「彼方より来たれ、やどりぎの枝。銀月の槍となりて、撃ち貫け。」

はやての詠唱により、防衛プログラムの頭上にベルカ式魔方陣と六つの魔力スフィアが展開される。

「石化の槍、ミストルティン！」

光の槍は突き刺さると、刺さった場所から徐々に石化が始まっていく。

それにより一度は石化するも、すぐに再生しその姿は先ほどよりもグロテスクなものに変わっていた。

それはもはや生物と呼ぶのは難しいほどの姿だった。

「うわ、なんだ!？」

「なんだか、すごいことに・・・」

『やっぱり並の攻撃じゃ通じない、ダメージを入れたそばから再生されちゃうー』

「それでも攻撃は通ってる、プラン変更はなしだ！  
行くぞ、デュランダル！」

O k B o s s

「悠久なる凍土、凍てつく棺のうちにて、永遠の眠りを与えよ。」

クロノの詠唱と共に、クロノ周辺の気温が急激に低下し空気中の水分が結晶化、

それによりあたかも雪が舞っているような錯覚を起こさせた。

さらに防衛プログラムを中心に海までも凍り始めた。

「凍てつけ！」

E t e r n a l C o f f i n

詠唱完了とほぼ同時に防衛プログラムは完全凍結し崩壊を始めた。

が、それも一瞬で崩壊した場所からすぐに再生し、また活動を再開した。

それでも効果はあるらしく、先ほどよりも再生速度は多少なりとも落ちていた。

「いくよ、フェイトちゃん！はやてちゃん！」

「うん」

この作戦、最後にして最大の攻撃。

その準備へとなのは、フェイト、はやての三人は取り掛かった。

S t a r l i g h t   B r e a k e r

「全力全開！！スターライト……」

なのはは、大気中の魔力素をまるで星のように輝かせ集め放つ最大の魔法のチャージへ。

「雷光一閃！プラズマザンバー……」



そして三人それぞれの最大攻撃魔法は放たれた。

それはまさしく「破壊神<sup>ブレイカー</sup>」の名を持つに相応しい威力を発揮し、防衛プログラムの身体を破壊した。

「本体コア露出！」

シャマルは旅の鏡を使い、本体のコアを強制的に露出させた。

「つかまえ、た!!！」

「長距離転送!!！」

「目標、軌道上!!！」

「「「転送!!!!」」」

シャマル、アルフ、ユーノの三人でコアを衛星軌道上、つまり宇宙空間へと転送した。

しかし転送したものの、コアはその驚異的な再生能力発揮。

転送中も生体部品を修復し、より強力な姿へと変わろうとしていた。  
が、それはすでに遅かった。

「アルカンシエル、発射！！」

アースラによって発射されたアルカンシエルが、再生を始めたコアに直撃。

その後コアは生体部品と共に消滅した。

.....欠片をのこして.....

~U~U~

## 第17話『聖夜の決戦』（後書き）

人「さて、ちゃんとみせり」どこがじゃー!!」「・・・なんだ？」

ハ「どこが見せ場じゃ！しかも途中で退場してんじゃん！」

今回ハガルは途中で退場しました。

それもいつも以上の傷を負って・・・

人「お前の見せ場はシャマルを助けること、だ。いいじゃん、フラグ強化できて。」

ハ「いやいや、そせいで俺死にそうになってんだけど。」

霧「マスターは補正で生き残るので大丈夫として。」

ハ「おい！」

霧「今回はほとんど原作と同じですね。特に後半は。」

ハ「ネーベルが・・・最近ネーベルが後書きで冷たいよ・・・」

人「この馬鹿は放っておく。原作とほとんど同じっていうのは簡単な理由がある。」

霧「簡単な理由とは？」

人「俺の考えた展開が、どれも原作よりも面白くなかったからだ。ストーリーとかでなく演出面だな。」

霧「書き手としては情けない理由ですね。」

人「それは俺も自覚してるよ。ただね、ここからは原作と変わっていくぞ。」

霧「最後に伏線張ってましたね。あれはいつたい？」

人「察しのいい人、というかりりカルファンはわかると思うよ。」

霧「なるほど。」

人「今日はここいらで終わりにしよう。」

霧「早いですね？何かあったのですか？」

人「いやね、今日(5/9)近くのショップで遊戯王の大会があんのよ。でれたら参加しようかなって。無理でも野試合だけはしようと思ってるのよ。」

霧「つまりそのためのデッキ調整をしたい、と。」

人「そういうこと。」

霧「はあ・・・それじゃあ今回はここでメます。それでは、次回をお楽しみに。」

人「勝つぞー！！！」

< 暗転 >

第18話『戦いのあとに残るもの』（前書き）

オリジナル展開に入りますがご都合主義や無理な設定が増えるかもしれません。

誤字脱字・感想など何時でも受け付けていますのでよろしくお願ひします。

## 第18話『戦いのあとに残るもの』

闇の書の闇、防衛プログラムとの戦闘は終わった。

その直後、はやては意識を失ってしまい、アースラへと転送された。アースラの艦医の診断によれば、急激な魔力の覚醒に加え慣れない戦闘、さらにユニゾンを行ったための疲労とのこと。

しかし、問題ははやてではなくハガルにあった。

ここではまともな治療ができないため、急遽本局に移動することになった。

しかし、このままではハガルが持たないため現在医務室で、シャマルとユーノの回復魔法と艦医による応急処置を行っている最中である。

医務室の外では今回の事件に関わった魔導士達がいるのだが、皆暗い表情をし誰も言葉を発しようとはしなかった。

「ハガル君、大丈夫だよね・・・」

そんな中なのはは喋るが、それは誰かに向けて発したわけではなく、どちらかというと自分に言い聞かせるようにも聞こえた。

「大丈夫・・・きっとハガルなら大丈夫だよ。」

フェイトもなのはに続くが、やはりどこか自信がないように聞こえる。

その時だった。医務室からシャマルとユーノが出てきた。

「ユーノ君！シャマルさん！」

「ハガルは、ハガルは大丈夫なの!?!」

「シャマル！あいつは無事なんだろう!?!」

真っ先に二人の下へ向かったのが、はのはとフェイトとヴィータの三人だった。

他の者達も三人に続いて質問を投げかける。

「皆!!!落ち着いて!!!大丈夫!!!大丈夫だから!!!」

それを聞き皆安堵のため息をつく。

「では海波は助かるのだな。」

「とりあえず命に別状はないわ。」

ただ、あくまで応急処置は済んだだけで、まだちゃんと治療でき  
たわけじゃないの。」

「なら回復魔法を使って・・・」

その言葉にシャマルは首を横に振り、ユーノは俯いた。

その反応をみた全員はまた表情を暗くする。

「これ以上回復魔法をかけるとかえって危険なの。」

だから後は外科処置と自然治癒に任せるしかないわ。」

「大丈夫。さっき言った様に命に関わる傷は何とかしたから。」

あとは本局でちゃんとした治療をするだけだよ。」

・・・命に別状はない・・・

その言葉に全員、再び安堵のため息を吐くのだった。

くとある水使いの物語く

第18話『戦いのあとに残るもの』

その後リインフォースより重要な話があるということで、食堂へ移動することになったのだがシャマルは医務室に残るといい動こうとしなかった。

しかしこの話はリインフォースだけでなく、夜天の書に関わることで全員の参加することとなった。

艦医にハガルを任せ、はやてを除く全員が食堂へと移動した。

各々席に座り、クロノが話を切り出した。

「それで、話というのは？」

「主と私についてだ。」

その後リインフォースからはやてと自身、夜天の書の変化について説明があった。

はやてへの侵食の停止。

リインフォースの能力と資質を全てはやてが受け継いだこと。

それにより自身の力がほとんど無くなったこと。

守護騎士プログラムの解放。

そして最後に。

「最後に私のことなのだが、私の残り時間は半年、もって一年というところだろう。」

「「「え！？」「」」

もって一年。これを聞いた全員は驚きを隠せなかった。

「なんで！なんでなんだよ！？」

「ヴィータちゃん……」

「やっと……やっと全員揃ったのに……こんなのねーよー！！」

「鉄槌の……」

「ヴィータちゃん落ち着いて。」

「だって、だてさ……」

シヤマルに宥められ少し落ち着くが、やはり納得ができないのか苦い顔をしている。

リインフォースの消滅。これも理由があつてのことなのだ。

「リインフォース、理由はなんなのだ？」

「我等は残り、お前だけ消えるというのも納得がいかん。」

「教えて、リインフォース。」

ヴィータほどではないにしろ、他の三人の守護騎士も納得がいかないという顔をしている。

「原因は防衛プログラムの切り離しだ。」

「防衛プログラムの切り離し？」

「ああ。まず夜天の書の守護騎士プログラムは防衛プログラムとは別の物として登録されている。

そのため切り離しても夜天の書や防衛プログラムには影響はない。

「

「あえて挙げるなら主を守護する存在がいなくなる、といったところか？」

「ええ。しかし防衛プログラムは違う。

あれは度重なる改変によって私から生まれた、いわばもう一人の私。

今回のことでそれを無理矢理切り離し消滅させてしまった。

そしていくつか重要なデータも同時に消滅してしまっている。

夜天の書の原型や私を構成・維持するためのプログラムだ。」

プログラムの欠損と原型の消失。

先ほど半年から一年といったが、実際は今すぐ消滅してもおかしくない状態だ。

しかしリインフォースは余計な心配をかけないよう、そのことは黙っているのだった。

「そのプログラムを直す方法っていうのはないんですか？」

誰もが思ったこと、それをなのはが訊くが・・・

「無理、ではないにしろ数年単位の時間が掛かるだろう。」

数年単位、その言葉を聴き皆沈痛な面持ちになる。

それから数分は誰も何も発しなかった。

その時エイミーから通信が入った。

『皆、本局に到着したよ。』

皆も一度アースラを降りて。それからクロノ君はこっちに来て、艦長が呼んでるから。』

「わかった、すぐ行く。」

そしてクロノはリンディの下へ行き、他の全員はアースラを降りるのだった。

しかし足取りは重く、事件解決の喜びはすでないに等しかった。

（12月25日）

翌日、はやてが目を覚ましリインフォースの話聞き大泣きした。

落ち着いた後、それでも共に過ごせる時間を大切にしよう、諦めずに何とかしてみようという話になった。

その後、はやては海鳴大学病院に戻ったのだが、無断外泊をしてい

たことになり保護者ということになっているシグナムとシャマルは  
かなり怒られた。

この日、ハガルはずっと眠ったままで目を覚まさなかった。

（12月26日）

はやては、海鳴大学病院を退院することとなった。

そのさいなのはとフェイトが迎えに来ており、八神家に向かう途中  
三人で今後のことについて話をしていた。

魔法と管理局について、アリサとすずか、高町家に話すということ。

その日取りを何時にするかなどを話しているところにクロノから通  
信が入った。

ハガルが目を覚ました。

これを聞いた三人は声を上げて喜んだ。

その場にいたシャマル、シグナム、ヴィータも喜んでいた。

この六人の中で一番喜んでいたのはシャマルだったとか……

『これから彼に状況説明と事情聴取を行う。』

そのあとこちらから連絡を入れるように言っておくが、何か伝えることはあるか？』

「私たちも O H A N A S H I があるっていうのを伝えてほしいの。」

「うん。あとで絶対にちゃんとはなそうってハガルに伝えて。」

「うちはハガル君に、ありがとう、て伝えてもらえるかな？」

『了解した。それじゃあ。』

クロノからの通信が切れたあと、その場にいた全員でハガルの無事を喜んだ。

しかし、このときシャマルがないことに誰も気付いていなかった。

目を覚ますとそこはどこかで見たことのある病室だった。

身体を動かそうとしたら激痛が走った。

「いでえええええ!!」

首だけ動かして自分の身体を見ると酷い有様だった。

両腕はギプスで固定されてるし、検査着から見えるところは包帯が巻かれ自分の肌がほとんど見えなかった。

首下にネーベルが無いことに気付いた俺は周りを見渡し、ベッドの横にある棚の上にあるネーベルを見つけた。

待機状態なのに全体に罫が入っている。

かなり無理をさせちゃったからな・・・

「じめんな・・・」

俺のその言葉に反応するように、ネーベルは弱々しく点滅した。

そのときクロノさんが部屋に入ってきた。

「あ、ハガル目を覚ましたのか。」

「ええ、まあ・・・その、今の状況を教えてもらえますか？」

当たり前だが防衛プログラムとの戦いするとき、途中から記憶がない。

砲撃からシャマルさんを守ったところまでは覚えているけど、その後が曖昧なんだよな。

だから結果がどうなったか非常に気になる。

「そのことはこれから話す。

まずは君が起きたことを連絡しないといけないから少しまってくれ。」

「わかりました。」

クロノさんはまず医師に連絡、次にリンディさん、そして高町たち

に連絡を入れていた。

んで、高町たちとの通信なのだが。

「これから彼に状況説明と事情聴取を行う。

そのあとこちらから連絡を入れるように言っておくが、何か伝えることはあるか？」

『私たちもO H A N A S H Iがあるっていつのを伝えてほしいの。』

『うんな。あとで絶対にちゃんとはなそうってハガルに伝えて。』

『うちはハガル君に、ありがとう、て伝えてもらえるかな？』

「了解した。それじゃあ。」

そういつて通信をきり、クロノさんがこちらを向いた。

「と、いうことだ。」

「ええ、わかりました。でもクロノさん。」

「なんだ？」

「高町のお話って、なんか違う意味に聞こえたのは気のせいですよね？」

「……………気のせいだ。」

そういつて俺から目を背けるが、いやいや、その間はいつたい何！？  
なんかすっげー嫌な予感がする。

「それじゃあ早速現在の状況を教えよう。」

教えられたのは防衛プログラムがあのと皆の力とアルカンシエル  
によって消滅したこと。

はやてが目を覚まし、侵食が完全に停止したこと。

俺の怪我の状態。

そして……リインフォースの残り時間。

「なんか、素直に喜ばせんね。」

「ああ、しかしこれ以上闇の書の起こす悲劇は起きない。そう思えばいいんじゃないか？」

それに、ロストロギアが関わる事件というのは何時もこんな感じだ。

大きな力が関わり、解決したとしても傷が残るものさ。」

そうだとしてもなあ・・・

俺が俯いていると、病室にリンディさんが入ってきた。

「リンディさん。」

「お待たせ、クロノ、状況説明は終わったのかしら？」

「ええ、ちょうど今終わったところです。」

「そう。ハガルさん、いきなりだけどあなたにはいくつか聴かなければいけないことがあるの。」

理由は解るわね？」

理由、ね。そりゃ俺がヴォルケンリッターに協力したからでしょ。

あと一度クロノさんを妨害してるしね。

「その顔は解ってるを取っていいわね？」

「ええ。」

「そう・・・では訊きます。  
今回なぜシグナムさん達に協力していたのですか？」

「・・・理由は簡単です。八神を助けたかったからです。」

「それなら管理局と協力する方法だってあったはずだが？  
グレアム提督ともアースラに協力するよう約束していたはずだが？」

確かにそうだ、俺はグレアムさんとアースラに協力するよう約束をした。

だけど・・・

「アースラに協力するって話ですけど、たしかに協力するとは言いませんでした。

でもそれはそちらから頼まれたらの話です。  
もし協力要請があればそちらに協力したかもしれません。」

「たしかにこちらからは協力依頼をしていない。」

「それにですよ、今回のことに関わりはしましたが、俺は一般人。自分で言うのもなんですが、まだ小学生のガキです。

高町やテッサ、ユーノも今回のことに協力していたとはいえ、本来こういった事件は大人が解決するものでしょう？

たとえ人材不足だとしても。」

「それを言われると耳が痛いわね。」

俺の言葉にリンディさんは苦い顔を、クロノさんはどこか納得いかない顔をしている。

実はこのこと、管理局の就職年齢の低さに俺はずっと疑問に思ってた。

能力があるとしてもまだ子供、それも小学生を戦場に出すなんてどうかしてる。

これは俺が管理局をイマイチ信用できない原因の一つだ。

「それと、俺はもともと八神とは友達でしたし、引越しの次の日にシグナムさん達と会いました。

八神の家の前だね。そのあと事情を聞いて協力することにしたんです。

それにですよ。もし管理局に教えたとします。

管理局は八神をどうしてましたか？

八神を捕まえヴォルケンリッターを、家族を引き離していたでしょう。」

「そんなことはない！保護して事情を聞きその後しかるべき対処をしたはずだ！」

「それはあくまでアースラでの話です。

管理局全体で考えると逮捕し、監禁もしくはそれに近いことをしたはずです。

ロストログアっていうのは知らなくても持っているだけで罪に問われるものだ。

しかも今回は局が長年探していた闇の書だったからなおさらですよ。」

クロノさんは別として、リンディさんは局に勤めて長いはず。

だからそうなっていたかもしれない、という可能性はわかっていると思う。

「色々言いましたが、結局は俺が八神を助けたくてヴォルケンリッターに協力した。

それでいいんじゃないですか？

そういえば理由はどうあれ俺はクロノさんの邪魔をしたこともありましたけどあれは？」

「そうね、それについては公務執行妨害ということになるのだけど・・・」

「管理外世界だから局のほうは適用されないはずですよね？」

それをいうと二人は押し黙った。

管理外世界、つまり管理局が「管理」していない局の法が適用されない場所。

存在の知らない世界の法を押し付け、もし逮捕でもしたらそれは誘拐と変わらない。

たとえ俺が存在をしていたとしても、俺を逮捕することはできない・・・はず。

「それも踏まえて俺の今後の処分はどうなってるんですか？」

この後の対応によっては、俺は今後局を信用できなくなる。

高町たちはどうか知らないが。

「そうね、今回の事件解決に少なからず関わったこともあるので、クロノ執務官への公務思考妨害は無かったことになるわ。」

あとは嚴重注意ね。無断でロストログアに関わったんですもの。」

お、それだけで済むんだ。

「怪我のこともあるから後二日は局にいてもらって、そのあとは海鳴市の病院に転院という形になるわ。」

手続きについてはこちらでするから気にしなくて大丈夫よ。」

「そうですか、ありがとうございます。」

それからどこでどうやって蒐集をしていたのか？という話になったが、適当なことをいってミオガルナについては黙っていた。

さすがに蒐集につかったデバイスについては説明した。

名前がない魔導書型のストレージデバイス。

シヤマルさんと合流したときに蒐集機能は外されていて、本当にただの魔導書の形をしたデバイスになっている。

あとは俺の魔法についてとか訊かれたが、これもいくつか言っていないことがある。

たとえば魔光円鞆のこととかそのほかに考えた魔法とかね。

んで、リンディさんは高町家に魔法と管理局についての説明をしにいくとかで部屋を出て行った。

クロノさんも仕事の続きがあるとかで一緒に出て行った。

そのときネーベルの修理も頼んで渡しておいた。

コア部分は無事なので外装だけだしそんなに時間は掛からないといわれた。

それからしばらくは暇だった。

なんせ部屋には俺だけ。

ネーベルもいないし両腕も使えないから何もできない。

「・・・暇だな。

ネーベルがいないからワクチンプログラムも手を着けられないし、どうしよう。」

独り言を呟いていると急に病室のドアが開いた。

そこには肩で息をしているシャマルさんがいた。

なんでここにシャルルさんがいるんだ？

たしかさっきまで八神たちと一緒にいたはず。

そんなことを考えているとシャルルさんは急に泣き始めた。

「え？あ、シャ、シャルルさん？

どうしたんですか？」

「ハガル君、よかった・・・本当によかった・・・」

「あ、あの・・・！！！」

俺は言葉を続けられなかった。だってシャルルさんがいきなり抱きついてきたんだもん。

んで痛覚遮断や麻酔が効いてるわけじゃないから・・・

「いでええ！！！」

「あ、ごめんなさい！大丈夫！？」

「だ、大丈夫ですよ・・・」

正直いうとかなり痛い！

でもここはシャマルさんを安心させるためにやせ我慢。

「私心配で、だってこの怪我は私を庇ってできた怪我だし、それで・  
・・」

泣きながら慌てるシャマルさんを落ち着かせてさっきリンディさん達とした話を伝えた。

するとシャマルさんはほっとしていた。

なんでも自分達のせいで犯罪者として見られたんじゃないか、管理局に捕まってしまうんじゃないかと心配していたらしい。

それも無くなって安心したとか。

俺は俺で安心したシャマルさんの顔を見たら気が抜けて眠たくなってきた。

「あ、すみません。ちょっと、寝ます・・・ね・・・」

「あ、すみません。ちょっと、寝ます・・・ね・・・」

そういつとハガル君はすぐに寝てしまった。

ハガル君が目を覚ました。

それを聞いた私はすぐに管理局へ向かい、ハガル君がいる病室を指した。

部屋についてハガル君を見たとき思わず泣いてしまい、抱きついてしまった。

あわてる私を彼が落ち着かせようとしたのだけど、これじゃあどっちが年上か解らないわね。

そのあと話を聞いて安心しました。

彼が私たちのせいで捕まることはないそうだ。

話し終わるとハガル君は寝ちゃった。

彼の寝顔を見ながら私は考えた。

どうすれば彼に恩返しができるだろう。

今回のことで彼には何度も助けられた。

最後の戦いでは私の代わりに攻撃を受けてこんな大怪我を負って・

私にできること……それは……

くっくくく

第18話『戦いのあとに残るもの』（後書き）

人「というわけで18話でした。」

霧「そして私はしばらく退場ですね。」

人「コアは無事とはいえかなり破損したからね。まあすぐに復帰するから大丈夫だよ。」

霧「そしてマスターはなのは殿とO H A N A S H I フラグが立ちましたね。」

ハ「それって死亡フラグだよね！？しかも俺の状況考えたらやばいよね！！」

人「安心しろ。骨は拾ってやる。」

ハ「そんな問題じゃねー！！」

霧「マスターは置いといて、新しく出た設定を紹介しましょう。」

人「そうだね。」

後ろでハガルが騒いでいるが二人は完全に無視している。

名前：魔光円鞠まこうえんじゅん

系統：ベルカ＋清心流・攻撃・シールド？

詳細：

攻撃用斬撃魔法。

武器の先に、円形の水のシールドを薄く圧縮。それを縦に固定し、高速回転させ斬りつける。

使用しているのが水とシールドなので非殺傷設定への切り替えが不可能。

霧「これはたしか16話で闇の書の夢から脱出する時に使った技です  
ね。」

人「そそ。んでこれはあくまでも攻撃用魔法。攻撃魔法とは違って殺傷設定とかの切り替えはできないんだ。それに使用しているのは水という自然現象だからなおさらね。」

霧「なるほど。これはフェイト殿の雷と同じですね。」

人「そうだね。んじゃ次はこれだ。」

名前：？（現在は名前がない）

種類：ストレージデバイス

詳細：

ハガル発案、ネーベル設計、シャマル監修、ハガル&シャマル作成の魔導書型デバイス。

待機状態は銀のプレスレット。

闇の書（夜天の書）をみたハガルが情報記録用として造ろうとして開発された。

急造ながらオリジナルと同じく蒐集機能が付いている。

事件終盤で蒐集機能はシャマルによってオミットされている。

現在は何かのワクチンプログラムのみ保存されている。

人「実は11話で少し出てるんだよね。本当に少しだけ。」

霧「たしかに3行ほどですがありますね。それがこれだったのでね。」

人「うん。ちなみにこれは今後重要な役割をするデバイスなんだ。」

霧「また伏線ですか。」

人「すぐに回収するけどね。そんじゃま、今日はここまでにしますか。」

霧「そうですね。それでは次回をお楽しみにお待ちください。」

<暗転>

第19話『転院』（前書き）

今回は少し短めで台詞も少なくなっています。

## 第19話『転院』

どれくらい寝たんだろう。

目を覚ますとそこは病室だった・・・当たり前だけど。

脚に重みを感じたので上半身を起こすと、そこには椅子に座り俺の脚を枕代わりにして寝ているシャルさんがいた。

そういえばシャルさんがいる時に寝ちゃったんだっけ。

時間を確認するため部屋の時計をみると、夜の8時をまわっていた。

結構寝てたみたいだな。

「と、それよりシャルさんを起こさないと。

たぶん八神も心配してるだろうし。」

何度か声をかけると起きてくれた。

「あ、ごめんなさい。いつの間にか寝ちゃってて。」

「いえ、気にしないでください。シャルさんだって疲れが残って

るんでしょ？

毎日皆のカートリッジを作ったり、家事をしてたんですし。」

「私はサポートが専門だから。」

それに家事ははやてちゃんと一緒にしてたから。」

「それでも疲れはあるでしょ？

今は休める時だからしっかり休んでください。」

「ありがとう。そうだハガル君。」

「なんですか？」

シヤマルさんは何時もより真剣な顔で俺を見詰める。

なんだろう、何か大事な話なんだろうか？

「私、あなたに恩返しをしたいの。」

だから腕の怪我が治るまであなたのお世話をさせてもらえないかな？」

「………えー！！」

とある水使いの物語

第19話『転院』

12月27日

昨日は時間も遅かったのから、あのあとすぐにシャマルさんは帰った。

お世話の件はお願いしました。

まあ、両腕使えない人間が断るのもおかしいしね。

今日は午前中からシャマルさんがお見舞い、というか世話に来てくれる。

んで今は昼食の時間なんだけど、俺は両腕が使えない。

どうやって食べる？てなっていると、シャマルさんが「私が食べさせてあげる。」といい、

現在はいわゆる「はい、あーん。」というカップルがやりそうな行

為を体験している。

正直恥かしい。途中でシャマルさんも気付いたのか顔を赤くしてたな。

食後はしばらく二人で話をしていた。

事件中のことや今後どうして行くかてというのが話のネタだった。

2時ぐらいになると高町から通信がはいった。

そういえば今日だけ、アリサと月村さんに魔法の話をする日。

俺は話し合いの席となる場にいけないので通信で参加することに。

モニター越しに5人を見たが全員驚いていた。

なんせ両腕はギプスで固定、入院着の下は包帯で肌が見えない状態だったのだから。

「大丈夫？」と皆に言われたので「問題ない。」と答え、早速本題へと移った。

離している間、アリサと月村さんの二人は質問もせずずっと聞いていた。

それにしても、4月ごろからあった変な事件は高町とテッサが関わってたのか。

うん、これは知らなかった。

話し終わってからは二人、というか皆で質問タイム。

八神もそこまで知っているわけではないし、俺もジュエルシールドだつて？

その事件は知らないし、今回の事件も途中違う世界にいたから知らないこともあるしね。

俺への質問はかなり多かった。

まあ、お互いにその意思はないとはいえ、途中まで高町たちと敵対関係だったから。

あとは俺が休んでいる間はどうしていたのか、とか。

これは正直に「他の世界で修行していた。」と話した。

嘘は言っていないよ？

全部本当のことではないけどね。

怪我や俺の能力についても説明した。

高町たちには悪いが全部教えたわけじゃない。

教えられない魔法の使用は必ずこいつらが反対するだろうからだ。

そんだけ物騒な魔法を考えちゃったんだよな・・・どうしよう・・・

（12月28日）

海鳴大学病院へ転院の日。

高町とテツサ、ザフィーラさんとシャマルさんの4人が迎えに来てくれた。

本局の医師曰く、魔導士として本局でしなないといけない治療は一応終了とのこと。

あとは定期的に通院して様子を見るだけらしい。

まあリンカーコアに異常はないし、怪我の酷いところは両腕と胸だから、あとは自然治療でいいたろうとのこと。

どうやら本局で俺の担当になった先生は自然治癒を推奨する人だったらしい。

なんでも、魔法による治療は人間の自然治癒力を弱める可能性がある、とか。

それが理由らしい。

途中クロノさんと合流し、ネーベルを返してもらった。

外装を少し修理するだけでよかったので思ったより早く終わったらしい。

よかった・・・

その後本局から転移しテツサの家へ。

そこで待っていたのは、八神に守護騎士の3人、アースラ組にユノ、アリサと月村さんと今回関わった人のほとんどがそこに居た。

なんで?と思っている俺にきたのは。

「お帰りなさい、ハガル(君、さん)。」

という皆の言葉だった。

正直泣いたよ。感動して思わず泣いたよ。

でもその涙はすぐに引いたんだよね。

なんでかって?それは簡単なことだよ。

皆の後ろにお婆ちゃんがいたからさー!!

それもすごい怒気を纏って。

お婆ちゃんの怒気に皆苦笑いと冷や汗を浮かべている中、俺はなんとか「ただいま。」といったが、

その直後思いつきり拳骨を食らった。

しかも「この馬鹿孫が!!」という言葉つきで。

そのあと病院にいつても大変だった。

岡倉先生や石田先生にはすっげー心配された。

ちなみに岡倉先生と石田先生はお父さんの医師仲間でその関係で俺も面識があるのよ。

石田先生なんて「はやてちゃんが退院したと思ったたら今度はあなたなの?」といわれた。

そんなこと言われてもなあ・・・

入院してすぐ検査をしたが、思ったほど怪我は酷くないとのこと。

検査や経過を見るために一週間ほどの入院が必要らしい。

まあそれぐらいで済むならいいか。

病室に戻ってからはお婆ちゃんの説教をくらった。

まあ、これも予想の範囲ないさ！！

なんだかんだで夜の7時を回っており、面会時間は過ぎていた。

お婆ちゃん達は皆帰って今部屋にいるのは俺とネーベルのみ。

「ネーベル、無茶しちゃってごめんな。

そのせいでお前がボロボロになって・・・」

お気になさらずとも大丈夫です。

むしろ私のほうこそ申し訳ありません。

私が不甲斐無いばかりに・・・

「いや、俺の腕が未熟だったから・・・」

私の性能がもう少し高ければ・・・

「俺の！」

私の！

と、しばらく続いたがお互いに無駄と判断し、この話は止めにしようとし、最後に。

「お互い強くなるうな。」

はい。我が主。

という形で終わった。

今回のことはまだ俺が魔法に不慣れだったのと、ネーベルが俺について詳しく知っていなかったから起きたこと。

今後その辺りを見直せば問題ないはず。

暇なのでネーベルと共にワクチンプログラム制作の続きを始めた。

もう使うことはないだろうが、もしもの為に完成はさせておこう。

そうして夜は更けていった……

~UN~

第19話『転院』（後書き）

人「・・・はあ・・・」

ハ「ため息なんてついてどうした？」

人「いやね、小説書くときに台詞は出てくるのよ。だけどね、モノローグ部分、キャラクターの動きや周りの状況の説明なんかがなかなかうまく書けないんだ。」

ハ「それで今回投稿が遅れたのか。」

人「そういうこと。後書きみたいに台詞だけならバンバン出てくるんだけどね、やっぱり小説って難しいわ。」

ハ「そりゃそうだろ。作者みたいに文才ないやつが書こうとすればそうなるよ。作者って小学生のころ読書感想文を3行で終わらせて再提出くらったことあるんだよね？」

人「俺の恥かしい過去をさらすな!!!」

ハ「いいじゃんべつに。」

人「うううう」

霧「そういえば最近シャルさんが多く登場しますがこれは何か理由が？」

人「ああ、それね。なんかね、構成考えてたり書いてるうちにヒロ

インシャマルでよくないか？って思えてきたのよ。てか現状一番フラグがしっかりしてるのがシャマルだしね。」

霧「今回もどこのカップルですか、っていうことをやってましたね。」

ハ「あれは俺が両腕使えないからだ！」

人「ああ、あれは俺がああの描写を少しでも書きたいからお前の両腕を骨折にした。」

ハ「おおい！！！！」

人「いいじゃん。お前だって嫌じゃなかったろ？」

ハ「う・・・まあ、そりゃね。」

人「ヒロインがシャマルになったとしても、フラグはどんどん立っていくぞ。ちなみに恋愛フラグだけじゃないけどね。」

ハ「まじかよ・・・」

人「マジだよ。んじゃ、今回はここまで。」

霧「それでは皆様、次回をお楽しみにお待ちください。」

<暗転>

第20話『事件、闇の残滓』（前書き）

9日ぶりの更新。

その割に分量は少ないけど・・・

## 第20話『事件、闇の残滓』

あれから三日経ち、現在大晦日。

今年は病院で年越しをしそうです。

解っていたが検査結果は酷いものだった。

両腕の骨折もそうだが左足の骨にひびが入っていて今はまともに歩けない状態。

そんな状態なので移動には八神が使ってたのと同じ車椅子を使っている。

「そついや今日は皆で年越ししようって言ってたよな。まあ俺は出れないけど。」

マスター、まずは怪我を治すことに専念しましょう。

それに通信を使えば皆さんと話せるではありませんか。

「そつなんだけどね。」

ま、こればかりはしょうがないよね。

ちなみに今日はシャマルさんもない。

八神家の大掃除やらで忙しいんだと。

「暇だし例のプログラム、もう少しだし完成させようか？」

そうですね。では記録の書（仮）を起動します。

すると俺の右腕についている銀色のブレスレットは一瞬光った後、目の前に魔導書が現れた。

見た目は夜天の書を少し薄い色合いにした感じで、表紙には一切装飾がない。

これは前にも言った事件中俺が使っていた魔導書で、今は記録の書（仮）と呼んでいる。

現状でも理論上は機能するはずですが・・・

「まあこれは保険だね。

最悪の場合、今組んでるプログラムを使ってデータの消去と追加をするようになるけど、正直したくない。」

私も気が進みません。さすがにこれは・・・

「だよね〜・・・」

それにしても・・・暇だ！！

〜とある水使いの物語〜

第20話『事件、闇の残滓』

なんだかんだいいつつ年を越し、現在は1月10日。

結局病院で年を越しました。

んで1月3日に無事退院したのだけど、腕のギプスはしばらくつけたまま。

脚はもう大丈夫だけど腕がしばらく掛かりそう。

宿題も入院中に終わらせたし、皆と会うとき以外暇なので相変わらず記録の書（仮）を弄ってる。

今記録の書（仮）の中に入っているプログラムは、実は闇の書の闇を取り払うためのもの。

といっても完成したのは昨日だし、确实というわけではない。

しかも闇の書の闇が消えた今あまり意味を成さないけど念のため、ね。

事件中也組んでいたが、結局完成せず今回リインフォースさんのデータを基にやっと完成した。

んで、今組んでいるプログラムというのがまた酷い。

簡単にいえばウイルス。

すでにあるデータを消しつつ新しいプログラムを書き込むもの。

まあ、シャマルさん達みたいなプログラム体にこんなもの使えば良くて人格の消失、悪くて存在自体が別のものになっちゃうからね。

正直使う気はないけど本当に保険。

何かあったときに使えるしね。

ちなみにまだ両腕がまともに使えないので、マハトフリーユージェルを

腕の代わりにして空間パネルを使ってる。

宿題もこれと同じ用量でやったわけ。

制御の練習にもなるし、うまくいけば戦術の幅が広がるかもしれないしね。

「ネーベル、このプログラムって完成にどれぐらい時間かかりそう？」

そうですね。リインフォース殿たちの協力もあったので数日中には完成するかと。

「そか。」

俺も作業はしているがほとんどネーベルがしている。

俺はプログラミングとか詳しくないというかできないからね。

そんな感じでしたら早く作業していると海鳴周辺に複数の魔力反応を感じた。

「！ネーベルこれは！？」

ベルカ式、ミッド式と思われる複数の魔力を感知。

すると俺に通信が入った。

『ハガル君大丈夫！？』

「エイミーさん！ええ、大丈夫といえば大丈夫ですけどこの魔力反応は？」

『ごめん、今こっちでも感知したばかりでわからないんだ。』

「結構数がありますよ。」

魔力波形解析完了。エイミー殿、そちらにデータを送ります。

『ありがとう……え、これって……』

「どうしたんですか？」

エイミーさんは魔力波形のデータを見た瞬間急にあわてました。

そしていくつかのデータと照合しているみたいだ。

「ネーベル、何が？」

信じられないかもしれませんが、解析結果マスターの魔力波形と酷似しています。

また別の場所ではなのは殿、フェイト殿の波形も感知しています。

「え……それって……」

『それはありえないんだよ。』

だってハガル君はそこにいるし、なのはちゃんやフェイトちゃん  
だって今家にいるんだよ？』

「ええ、だって俺今通信してますし……」

『今近くにいる皆には現場に急行してもらってる！』

なのはちゃんたちもすぐに出るみたい。

ハガル君はまだ怪我人だからその場で待機ね。』

「……わかりました。」

いたい何起きてるんだ？

なんかいやな予感がするな……こういつときの予感って結構当たるんだよな。

エイミーから連絡を受けて私は現場に向かっていた。

真偽はわからないけどネーベルリッターが解析した魔力波形とハガルの波形が似ていたらしい。

現場の公園上空に到着するといきなり結界が張られた。

すると目の前に魔力が集まり人の形を作っていた。

そしてその魔力はハガルになったんだけどどこか様子がおかしい。

見た目はバリアジャケットを展開したハガルそっくりだけどデバイスを持っていない。

自分の両腕を見ながら何か考えてるみたい。

「・・・」

「・・・君は？」

「てめえは・・・ああ、テストロッサか。

俺か？俺は・・・そうだな、闇の残滓、闇ハガルとでもいってこ  
うか。」

「闇の残滓？あなたの目的はいつたいなんですか？」

「それを素直に教えろと思ってるのか？ああ？」

「いえ、でも答えてくれると助かります。」

「そうだよな。じゃあ・・・」

すると闇ハガルはいきなり攻撃を仕掛けてきた。

しかも射撃魔法で。

見た目はなのはのアクセルシューターに似ていて色はハガルと同じ鋼色。

「な!？」

「何驚いてやがる。俺が偽者ってわかってるんだろ。」

なら俺が攻撃魔法を使えないってこたあねーだろ。」

確かにそうだ、いくらハガルに似ているからといって本物じゃない。

だから攻撃魔法も使えるんだ。

「ははは！もっと早くかわせよ！  
当たっちまうぞ。はははははっ！」

「くっ……調子に……のるなー！」

Photon Lancer

「あめーんだよー！！」

簡単にかわされた、でも。

「ターン！」

「それもわかってんだよ！  
おらおらおらおらおらー！！」

これもかわされ、射撃魔法で全て相殺された。

しかもその後、肉体強化をして接近戦を挑んできた。

スピード重視の接近戦なら。

「接近戦ならどうかなるとでも思ってんじやんーのか？」

「!!!」

「あめゝ・・・あめーな、てめーは!」

「はい!?!」

「本物から聞いてねーねの？」

俺のオリジナルは接近戦じゃあ馬鹿つえーんだよ!!!」

そういえばシグナムが「海波の接近戦での力は我々よりも上かもしれん。」って言った。

ハガルからも武術を習ってることは聞いている。

まさかここまでなんて。

「まあ、オリジナルは攻撃魔法が使えねーし、俺もオリジナルが使ってる魔法や技の一部は使えねーけどな。でもてめーを倒すにゃ十分だろっさ!」

確かにいうだけのことはある。

闇ハガルの攻撃は速いし重たい。

「でも・・・」

S o n i c M o v e

闇ハガルの攻撃をかわして距離をあけて、カートリッジを一つ消費。

630

「負けない!!」

P l a s m a S m a s h e r

「なに!?!」

「はあああ!!」

「じなくそ!!」

プラズマスマッシュャーとシールドがぶつかりすごい光を放ってる。

でもそれもシールドが壊れたことで終わり、ハガルに直撃し爆煙が起こった。

「はあはあ……」

「まだだあー！！」

これなら……そう思った瞬間煙から闇ハガルが出てきて、そのまま攻撃を仕掛けてきた。

でもその攻撃は私に届くことはなかった。

なぜなら闇ハガルが振り上げた拳は私にある直前で崩れしまったから。

「な！……ちっ、時間切れかよ。」

「え？」

「元々この身体は闇の残滓でできた偽の身体だ。

たぶん魔力の使いすぎとオリジナルの力に耐えれなかったんだろ

うな。」

「教えて！何故今の状況が起きてるのか。  
あなたの目的は？」

「バーカ、誰が教えるかよ。

知りたかったら王候補を倒して聞き出しな。  
所詮俺は尖兵にすぎねーんだからよ。」

「王候補？」

「じゃーな、もし今度戦うときゃあ負けねーからな！」

「あ！まって！！」

私の静止も意味無く、闇ハガルの身体は魔力の塵となって消えていった。

それにしても闇の残滓と王候補っていったい……。

もしかして闇の書と何か関係があるのかな？

『フェイトちゃん大丈夫！？』

「なのは。こっちは大丈夫だよ。

さっきハガルの偽者と戦ったところ。」

『フェイトちゃんも！？こっちは自分の偽者だったよ。まさか自分と戦うとは思ってなかったよ、にやははは・・・』

「こっちもまさかハガルと戦うとは思ってなかったよ。そうだ、いくつか気になることを聞いたよ。」

『フェイトちゃん、なのはちゃん、よかった二人にも通信がつながるみたい。』

『エイミイさんどうかしたんですか？』

「あ、エイミイさつき気になる情報を・・・」

『ハガル君と連絡がつかなくなっちゃったの！』

「え！？」

『ハガル君の家を中心に大きな魔力反応があつてその直後に通信がつながらなくなったの。』

今から向かつて！他の皆にはもう伝えてるから。』

『わかりました！』

「うん。」

そうだ、もし相手の目的が闇の書と同じでリンカーコアならハガルを狙う可能性だってある。

闇の残滓に王候補。

もしかして相手の目的って、闇の書の復活？

でも闇の書の闇はあの時消えたはず。

ハガル、無事でいて・・・

くっくくく

第20話『事件、闇の残滓』（後書き）

人「どうしょ」

ハ「いきなり何？」

人「筆が進まん！！なんというか考えが纏まらなくなってきた。」

ハ「前といってること違う気がするんだけど。」

人「構成を練り直したらなんかわからんことになっちゃった。」

ハ「それ大丈夫なのか！？」

人「大きい分岐というかイベントは変わらんのだけど、小さいイベントがね。日常やらその他のことが浮かばん。もしくは筆が進まん。」

ハ「だめじゃん！これからどうするのさ？」

人「まあ何とかなる。さて、まあ俺の事情はどうでもいいや。今回の内容に触れてみよう。」

ハ「そうだね。え〜っとまず俺の偽者ができたね。でもさ、闇ハガルってなんか安直じゃないか？しかも俺と性格違いすぎ。」

人「いいんだよ。この闇ハガルはお前の不の部分を歪めて強調した存在だからね。んで本物と違いコアに異常が無いから攻撃魔法が使えるってわけ。そのぶん魔力吸収が使えないけどね。」

ハ「あと清心流もだね。これはなんで？」

人「まだ完全体じゃないから自分の技に身体が耐えれないんだ。王が生まれるか、自身が完全体になれば話は別だけどね。」

ハ「その王、まあ今は王候補か、それはあの三人でいいの？」

人「ネタバレになるけどね。たしかにあの三人だ。ちなみに次に出てくる予定。」

ハ「まじか。あ、そういえば何でテッサに俺の偽者を当てたの？高町みたいにテッサの偽者でもいい気がするんだけど。」

人「それは簡単だよ。フェイトの偽者だと闇ハガルと違って情報を出しにくいから。あとはお前にフラグが立ってるからだよ。」

ハ「一つ目はいいとして二つ目はなんだよ！めっちゃ関係ない気がするんだけど！」

人「微妙に関係あるよ〜。ちなみに現在恋愛関係のフラグのランキングをつけるとこんな感じだ。」

- 1位 シヤマル
- 2位 アリサ
- 3位 はやて
- 4位 フェイト&すずか
- 6位 シグナム

人「ちなみになのは、ヴィータには恋愛フラグは立っていない。な

のははわからんがヴィータには立てるつもりはない。」

ハ「シグナムさんと月村さんは何故!？」

人「シグナムはまあお前の可能性というが強さにだな。すずかは図書館での出会いと攻撃から守ってもらったのがだ。ちなみに3位と4位の間はかなり開いてて、上位三人はほぼ変わらない。理由はそれぞれ違うけどな。今後このランキングにはどんどん人が入るぞ。別のフラグランキングも同じだ。」

ハ「まじか・・・どうしよう?」

人「どうもできないよ。ま、俺の意思しだいだ。」

ハ「どうにかして!」

人「嫌だ!」

ハ「即答かい!」

人「あ、そろそろ閉めようか。」

ハ「うう・・・それでは皆様次回をお楽しみに。」

人「それではまた」

<暗転>

## 第21話『雷刃の襲撃者』（前書き）

いわゆる、なのポの話ですが結構自分なりにアレンジしております。そのためゲームとは違うことも多々発生します。

というか最終的にはゲームと全然変わります。

性格も違うと思います。

そこら辺は生暖かく見守ってください。

では本編どうぞ。

## 第21話『雷刃の襲撃者』

気がついたら僕達は生まれてた。

でも生まれた理由や目的はわかってる。

闇の書の復活、それが理由で闇の書の真の王になるのが目的。

そのためには強い魔導士をたくさん蒐集して力をつけないとね。

っていつても王はまだ動かないし、星はなんか作戦実行するとか言  
って動かない。

だったら僕が先に動いちゃうよ。

まずは吸収能力をもってるあいつ。

あいつの力があつたら僕が最強になっちゃうよ。

だって魔力切れがなくなるんだしね。

でも肝心のあいつはどこにいるんだろ？

・・・家にいるよね？

うん、いる。絶対にいる！！

マズはあいつの家に行ってみよう!!

でもあいつの家ってどこだっけ？

うーん・・・そうだ！サーチかければすぐだ！

僕ってあつたまい〜！

よーし・・・居た！

待ってるよ、お前を倒して僕は最強になる！

この雷刃の襲撃者が!!

〜とある水使いの物語〜

## 第21話 『雷刃の襲撃者』

やばい、今の状況は非常にやばい。

何がやばいって？

エイミーさんとの通信中に俺の家を中心にいきなり結界が張られた。

運がいいのか結界内部にいるのは俺と敵だけぽく、お婆ちゃんは結界の外みたい。

とにかくすぐにバリアジャケットを展開し、家の外にでた。

すると空中には原因と思しき存在がこつちを見ていた。

その姿を見て俺は驚くしかなかった。

テッサにとっても似ていたからだ。

髪の色が水色だったり違いはあるがほとんど違いがない。

デバイスまで似てるよ。

「君が海波ハガルだね。君の力を奪いに来た。」

「そうだけど、何が目的だ？」

「それを簡単に言うと思うの？」

「いや、思ってないよ。じゃあ質問を変えよう。」

君はテッサに似ているようだけど、君はいつたいなんなんだ？」

「僕かい？いいよ教えてあげる。」

そういうと奴は空中で一回転した後ポーズを決めた。

なんだこいつ？

「僕は雷刃の襲撃者。」

力のマテリアルにして闇の書の真の王になるべく生まれた存在。  
強いものを倒し吸収し我が力とするのだ！  
そして僕はあの暖かな闇の中に帰るんだ。」

「・・・そうか闇の書の復活が目的か。」

「あー！ー！！まった、今のなし！！  
ノーカン、ノーカン！！！」

・・・こいつアホだ。

さっき自分で目的は簡単には言わないって言って置きながらもつ言  
っているし。

しかもノーカンとかどんだけアホなんだ。

ちよつとまでよ、てことは今別の場所で起こってる事件はこいつの仲間の仕業か？

こいつからもつ少し情報を引き出せるか、やってみるか。

「今起きてる事件はお前の仕業か？」

「違う！僕はこんなセコイことはしない！

これは星の奴が勝手にやってるだけで僕は……ってまた言っちやっただけ！！

くそー、僕を誘導尋問するだなんて、お前なかなかやるな。」

「いや、俺は普通に聞いたただけなんだけど……」

「うるさいうるさい！とにかく僕は君を倒す！

倒してその力をもらう！

くらえ、でんじんしょう電刃衝！！」

テッサのプラズマランサーと同じような魔法が飛んでくるがそれを避けてつつネーベルと作戦を考える。

だって今の俺はまともに両腕が使えないからね。

戦闘方法がかなり限られるのよ。

” どうする？ あいつアホっぽいから罠を張れば多分引つかかるけど。

”

” それだけでは倒せないでしょう。

おそらく実力はフェイト殿と同等でしょうし、闇の書の闇と同じような力を持っている可能性もあります。”

” そうだね、蒐集も魔力が足りないからって可能性もあるしね。

そうなると俺を狙うのも納得できる。”

” 魔力吸収、ですね。”

” うん。魔力の回復にはもってこいのスキルだし……”

” うまく使えば相手の攻撃を無効化できます。”

そう、魔力吸収は魔力素の吸収効率を上げるだけじゃなく、相手の魔法を吸収し取り込むことができる。

攻撃魔法だって吸収することができるからね。

まあ俺はまだそこまでうまく使えないけどさ。

「うりゃあ！光翼斬！」  
こうよくせん

今度はハーケンセイバーと同じ魔法か。

でもなんで名前がいちいち漢字っぽいんだ？

「光翼斬・乱！」  
みだれ

「くっ、シールド！」

フィール  
V i e l      シルト  
S c h i l d

今度は無差別に乱発してきた。

さすがに逃げ道が塞がれたのでシールドで防ぐけど、両腕が使えないのでうまく使えない。

「捕まえた！天破・雷神槌！！！」  
てんぱ      らいじんづい

今度は広域魔法、しかも範囲が広いからかわせない。

翼と盾の両方を使って防御するけど雷が少し貫通してきた。

「あはは、やっぱり僕って最強！」

「調子に乗るな！」

ブリッツ  
ライン

「逃がさないよ。電刃衝！」

「く、こなくそお……！」

相手もスピード型だからかわしながらじゃ近づきにくい。

だったら攻撃受けながらも突破して一撃与えてやる。

それに当たると解つてればまだ耐えられる。

「甘いよ。雷神壁！」

「あめーのはそつちだ！砕……！」

「え!?!うわー!?!」

向うもシールドを張るけど関係ない。

碎でシールドを壊してそのまま蹴りであいつを地面に叩き落した。

んで動けなくなってるあいつにバインドをして、また話をする事にした。

「はあはあ、ネーベル、バインド。」

ネーベル  
N e b e l      フェッセルン  
F e s s e l n

「いてて・・・あ!くそ、放せ!?!」

「誰が放すか。あと逃げようとしても無駄だぞ。」

そのバインドはちょっと特別でね、並大抵のことじゃ解除できないから。」

「くううう・・・」

「まずはお前の存在についてだ。」

闇の書の復活のために生まれたって言ってたけど守護騎士たちと同じような存在なのか?」

「……」

全てではありませんが解析完了しました。

「え！？ずるいぞこらー！！」

「うるさい！ネーベル、続けて。」

はい。身体の構成は守護騎士たちとほぼ同じようです。

また闇の書の復活というだけのことがあります。

身体の中に闇の書の闇の欠片と思しきものがあります。

「闇の欠片？」

おそらく放って置けば第二の防衛プログラムのようになるのではないかと推測します。

現状ではあそこまでの脅威はありませんが。

「へーそうなんだ……」

「て、お前のことなんだけど」

「うるさい！どうやって僕が生まれたかは知らないんだから別に知らなくてもいいだろ！！」

……完全に駄目だ。もうアホの子だ、こいつ。

「で、ネーベル。どうすればいいかな？」

事件解決に一番簡単な方法はやはり彼女や他のマテリアルを倒すことでしょう。

「だよな。」

もしくはアレを使ってみるのも方法の一つだと思います。

アレか。確かに使えるかもね。

闇の書の闇から生まれたってことはあのプログラムも有効なはずだしね。

うん……

「なあ、お前は闇の書を復活させてどうしたいんな？」

「なんだよいき」「いいから答える！」「……わかったよ。」

首筋に魔光円靱を近づけて脅した。

無理矢理にでも喋ってもらわないとな。

「別に何かしようって訳じゃないよ。ただ消えたくないし闇のぬくもりを感じたいだけだよ。」

世界を滅ぼそうとかは考えてないよ。

ま、これは僕の考えで他の二人は知らないけどね。」

「なるほど・・・」

じゃあ、こいつに限っていえば特に害はないな。

まあ防衛プログラムみたいになると話は別だろうけど。

それに消えたくない、ぬくもりを感じたい、か。

「だったらいい方法があるぞ。」

闇の書の復活以外でお前が消えなくて済む方法が。」

「え？」

俺がそういつとあいつは興味を持ったのか俺の話の聞く気になったみたいだ。

「今からお前にあるプログラムを入れる。

成功確立は前例が無いから不明、まあ予想では80%ってところだね。

成功すればお前は闇の書から解放され、さらに消えなくても済む。どうする、やるか?」

簡単な説明を聞いた後考えてる、考えてるけど意味があまり解っていないみたい。

時々うなってるし、頭の上にクエッションマークが見えるよ。

「うん・・・」

「ちなみにこれを拒否すればお前をこ」「やる、やって!」「・・・わかった。」

よし、んじゃさっそくやるつかね。

まずは記録の書(仮)を起動させないとね。

「記録の書(仮) 起動。」

起動確認

「じゃあ術式開始。」

すると俺と雷刃の襲撃者の足元にベルカ式の魔方陣が発生した。

「第一工程、対象と記録の書（仮）をリンク。」

リンク完了。第一工程終了

「第二工程、対象者を登録。対象者、力のマテリアル雷刃の襲撃者。」

登録開始、完了。第二工程終了

「第三工程、対象者にプログラムをインストール。完了と同時に起動。」

インストール開始

「いつ・・・」

どうやらインストールの時に少し痛みがあるらしく、雷刃の襲撃者

は少し苦い顔をしている。

3分ぐらいしてインストールは終わった。

インストール完了。プログラム起動

「え！？ああああああ！！」

「なんだ！？」

プログラムを起動すると同時に急に苦しみました。

おそらく闇の欠片が最後の抵抗をしてるんだろう。

よくよく考えればいくら欠片が小さいとはいえ、欠片からこいつは生まれてるんだから影響があるのは当たり前か。

起動から1分ほどしたころだろうか。

第三工程終了

「よし第四工程、再度スキャン開始。異常が無ければ終了だ。」

解析完了、異常無し。第四工程終了。全工程を終了します

「ふう・・・おつか」こんなに痛いなんて聞いてないぞ!!!」「・・・ごめん。」

全工程が終わり近づいて確認しようと思いをかけたら急に起き上がって怒られた。

まあ、怒るのも無理ないか。

一分間苦しみ続けたわけだしね。

とりあえずバインドを解いて話を続けるか。

「ああ、それについてはごめん。

まさか作業中にこんなことになるなんて予想してなかったから。」

「苦しかったんだぞ! 痛かったんだぞ!」

「ごめんごめん。で、身体に異常は無いか?」

「うーん、特に違和感はないかな?

逆になんかスッキリしてるよ。」

闇の欠片が消えたからでしょう。

あれはある意味バグの塊、人間でいうと癌のようなものですからね。

「それが消えたなら確かにすつきりするよな。

あ、そうそう、これでお前は自由だから好きにしていよ。

まあ、まずはアースラで事情聴取をしてもらうようになるけどね。

」

マスター、そのことなんですが・・・

「ん？」

「どしたの？」

どうやら雷刃の襲撃者が記録の書（仮）の守護騎士プログラムとして登録されたようです。

記録の書（仮）のマスター登録は現在マスターハガルのため、彼女の主はマスターということになります。

俺と雷刃の襲撃者はお互いに顔をあわせた後

「「ええええ！！」」

て、感じて見事同時に驚いた。

え？これ何？

なんで急に俺がマスターになっちゃったの？

予想外すぎるんだけど！！

〜じゅん〜

## 第21話『雷刃の襲撃者』（後書き）

人「さてさて第21話どうだったでしょう？急展開というか結構ご都合主義にしておりますが。そして今回はゲストがおります。」

雷刃の襲撃者（以下雷）「どうも、皆のアイドル雷刃の襲撃者だよ。」

人「アイドルつてもアホの子としてネットで人気あるだけだろ。」

雷「そんなこと無いよ！皆僕の可愛さにメロメロなのさ。」

人「まあ、テツサ見た目も近いし実際可愛いけどね。」

雷「な、そんな面と向かって言われると恥ずかしいな・・・」

人「はいはい、無自覚にフラグ立てない！本編の話しに行くよ。」

人「わかった。しかしまさかこんな展開になるなんてね。」

人「まあこの展開はこの小説を書き始める前、設定の段階で決まっていた大きなイベントなんだ。マテリアルをどうやって生かすかって考えててさ、最初はハガルの魔導書と契約しちゃえばいいじゃんって思ったんだけど、それもなんかしっくりこなくてさ。」

人「んで最終的にこんな感じになったと。」

人「まあ前例の無いことすれば何かが起きるのはよくあることさ。今回はそれがこんな形で発生したってことさ。」

雷「まあ僕は生きてぬくもりを感じれるならそれでいいけどさ。」

人「では次は本編に登場したオリジナル設定を紹介しよう。」

名前：光翼斬・乱こうよくざん みだれ

系統：ミッド式・攻撃・誘導制御

詳細：

ハーケンセイバーと同系列の魔法、光翼斬こうよくざんを乱発しただけの技。

一応誘導制御型の射撃魔法なのだが、数が多すぎて雷刃の襲撃者はその特性を生かしきれていない。

例に洩れず漢字名。

名前：雷神壁らいしんへき

系統：ミッド式・防御・シールド

詳細：

普通のシールド。

こちらも漢字名。

名前：ネーベル・フェッセルン(N e b e l F e s s e l n) (霧の束縛)

術式：ベルカ式・捕獲・バインド

発動：A+

射程：B

詳細：

霧の特性を持った多重バインド。

霧1つ1つがバインドとしての力を持ったため、非常に強固で解除がし難い。

使用魔力は一般的なバインドと変わらないが制御が難しい。

人「今回は以上かな。」

八「それにしても雷刃の魔法は漢字が多いね。」

雷「その方がかっこいいからね！」

霧「世間一般で言う中二病というやつですね。」

人「まああの時期はこういったことが好きになってしまっからな。」

霧「作者もそうでしたか？」

人「まあ俺もだな。ただ俺はそれをプラモやなんか物を作る意欲に変えてたけどな。」

八「その影響で当時の作品はかなり酷いんだっけ？」

人「残ってる作品を今見ると苦笑いが出るね。」

雷「そこまでなんだ・・・」

人「俺のことはいいんだよ！とまあ今回はここで終了。」

八「次回はどうなるんだ？」

人「一応残りのマテリアルを出す予定。ただ二つに分けると思っけどね。」

霧「それぞれを独立して書くためですか？」

人「そのほうがこの駄文も少しは読みやすいと思うから。」

雷「僕も出るよね？」

人「でるよ。まあでもそこまで重要ではないけど。それでは皆様、次回をお楽しみに。」

ハ・霧・雷「バイバイ」

<暗転>

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9045k/>

---

とある水使いの物語

2010年10月10日06時41分発行